

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.89
2006

4 月号

トピックス

大学統合推進合意書締結式 平成17年度卒業式

ナウスベシャル
全国七大学総合体育大会



大阪大学広報誌

2006 4月号 No. 89

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウスPECIAL	22
キャンパスニュース	24
記念講義	42
表 彰 等	51
人 事	55
名誉教授リレー随想	64
討 報	66
インフォメーション	67
インタビュー	72
海外レポート	74
クラブ&サークル紹介	78
ガイドマップ	79
交流協定大学紹介	80

表紙写真：本部共通棟

撮 影：理学研究科助教授 山本 仁

表紙デザイン：株式会社ココティエ

大阪大学と大阪外国語大学



合意書に署名後、握手を交わす 阪外大・是永学長(左)と阪大・宮原総長(右)



との「大学統合推進合意書締結式」

大阪大学と大阪外国語大学は、両大学の間で連絡協議会を設けるなど、協議を重ねた結果、平成18年3月23日(木)、千里ライフサイエンスセンタービル(大阪府豊中市)において、両大学の特長を活かしつつ、多彩な教育研究を新たに展開することにより、国際社会のなかで日本の果たすべく真の役割を担い得る国際的人材を養成することを目指して、平成19年10月統合、平成20年4月統合後の学生受入を目標に統合を推進することとし、両大学の大学統合推進合意書を締結しました。

締結式には、大阪大学から 宮原秀夫総長、鷺田清一理事・副学長、橋本日出男理事、北見耕一理事・事務局長、

大阪外国語大学から 是永 駿学長、松田 武理事・副学長、南田みどり副学長、塚越義行理事・事務局長が出席しました。

今後、両学の統合に向けて、新たな教育研究体制やカリキュラムの作成をはじめ、新たに設置する「大阪大学・大阪外国語大学統合推進協議会」において、詳細を詰めるべき課題を検討していくこととしています。



平成17年度卒業式及び大学院学位記授与式

平成17年度卒業式が、3月24日(金)本学吹田地区体育館で挙行され、2,752名(男子2,001名、女子751名)が卒業しました。

卒業式では、学位記授与に続き、楠本長三郎第2代総長の退官を記念して創設された楠本賞が、各学部・学科の優秀な卒業生20名に授与されました。

卒業式終了後、体育館前において総長主催の学部及び大学院合同の祝賀会が開催されました。

午後からは、同体育館において大学院学位記授与式が挙行され、1,978名に修士の学位記が、21名に法務博士(専門職)、696名に博士の学位記がそれぞれ授与されました。

また、卒業式と大学院学位記授与式では、各界で活躍する先輩による「記念講話」が行われ、今年度はNHKバンコク支局特派員として活躍中の榎原美樹さん(1987年文学部卒)が、紛争現場での取材経験を紹介しながら、「精神や知識などの強さをつける努力を続けてほしい。その強さを優しさに変えられるときに人間としての真の力が発揮できる」と後輩へエールを送りました。(37～39ページに掲載)

総長式辞 35～36ページに掲載。



榎原美樹さん

キャンパスデザイン室 — 魅力のあるキャンパスをデザインする —

キャンパスデザイン室・助教授 木 多 道 宏
助 手 大 谷 博 三

キャンパスデザイン室は、平成17年4月に、キャンパスマスタープランの実現を担うため、施設マネジメント委員会の下部に設置されました。施設部とは独立した組織であり、教員と事務組織の間をつなぐ役割も期待されています。現在は、則末尚志室長（施設マネジメント委員会委員長）の下、専任教員2名（建築・都市計画、ファシリティマネジメント）、兼任教員4名（新しい整備手法の検討3名、平成18年4月より交通計画1名）、兼任職員2名（施設部）の計9名で構成されています。木多・大谷の専任教員2名を中心に、施設部の全面的な支援を受けながら、当初要請された役割を超える様々なキャンパス計画の新境地を切り開いています。この紙面をお借りして、発足後最初の1年間の主な取り組みを紹介します。

■キャンパスのフレームワークの構築

フレームワークとは、キャンパスの景観やオープンスペース（緑・広場・街路）の骨格であり、吹田キャンパスでは、図1のように既存の特徴を生かしながらシンボルロードや魅力の核を結びつけていくことが目標となります。キャンパスの骨格は、建物の形態や自然、周囲の風景との関係、人の活動、意味性（歴史・メッセージ）などから総合的に形成されるものです。キャンパスデザイン室では、形態の個性のみならず、建物の街路への開き方、図（目立つもの）・地（基調となるもの）の関係などに配慮しながら、建物、オープンスペース、ストリートファニチャ（サイン、ベンチなど）のデザインに取り組んでいます。また、キャンパスデザイン室発足前から設計が進んでいたいくつかのプロジェクトについて、実施設計や現場でのデザイン監修をした他（阪大坂、歯学部附属病院先端口腔総合診療棟など）、各部局で整備される案件についても、景観に影響するものは事前にデザインの相談をいただくよう、平成17年9月に要項が制定されました。



図1 マスタープランにおける吹田キャンパスのフレームワーク

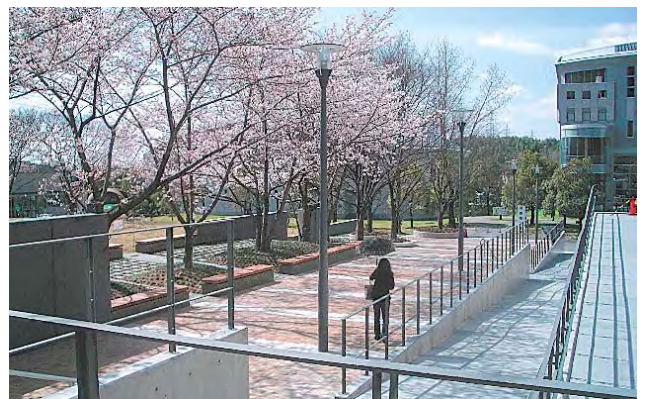


図2 本部共通棟横プロムナード
キャンパスウォールで移動空間（ハード）と芝生（ソフト）の間に憩いの空間（セミハード）をつくる。



図3 千里門周辺整備
イチョウのゲート、桜並木、芝生のマウンドによる緑系のシンボル。下部に300台以上のバイクを収容。

■マスタープラン・リーディングプロジェクト

マスタープランで設定したリーディングプロジェクトのデザインを進めています。いずれもキャンパスの顔や核をつくるもので、フレームワークを構築する上で、特に重要なプロジェクトであると言えます。「本部共通棟横プロムナード整備計画」（2月号で紹介）では、公共性の高い建物に囲まれたポテンシャルを生かし、大学のシンボルとなるようなランドスケープをデザインしており（図2）、平成18年3月末に第Ⅰ期工事が完了しました。また、「千里門周辺整備計画」では、千里地域に対する大学の顔として、千里北公園と連続性を持たせながら、シンボルと交流の場が生まれるような配慮をしています（図3）。平成18年3月末に調整池が広場化され、平成19年度以降に本格的整備が実現される予定です。他に、豊中キャンパス実践センター前のシンボルロード（乳母ヶ谷池・中山池間）、阪大総合学術博物館（修学館改修）、駐輪場再編整備（豊中キャンパス）などの具体的な計画を進めています。

■デザインワークショップ

豊中キャンパスにおけるリーディングプロジェクトの計画に際し、地域住民も含めた様々な立場の人々と意見や思い入れを語り合う待兼山デザインワークショップを開催しました。キャンパス開発前の待兼山地域は、里山やため池として地域社会に育成・継承されてきたものであり、現在

も引き続き、地域の景観や自然を構成する重要な資源となっています。このように公共性の高いキャンパスは、デザインを内側に閉じるのではなく、大学が地域の人々とともに、地勢や歴史を読みとりながら、キャンパスとまちを一体的にデザインしていく必要があるのです。

ワークショップはキャンパスデザイン室と施設部の主催により、平成18年1月～2月までの4回にわたって開催し、地域住民、行政、学生、教職員、専門家など延べ約200人の人々による熱い議論が展開されました。キャンパスに花時計をつくる活動をしている学生グループ「華プロ」（2月号で紹介）にも、準備や進行のお手伝いをさせていただきました。

前半の2回は、待兼山近辺や、石橋・柴原などの街を探索し、キャンパスの内外にわたり、継承すべき個性や将来像を検討しました（図4）。図5は中山池・待兼山周辺に関する議論の結果を集約したものです。史跡や貴重な自然、人々の記憶に残る風景など、ばらばらに埋もれている資源をどのように紡ぎ上げていくのかについて様々な議論や提



図4 ワークショップの風景
グループごとにまとめたポスターの発表に聞き入る。楽しく密度の濃い議論が交わされた。



図5 中山池・待兼山近辺における個性と課題
探索では、大正天皇が来訪した際の記念碑を草むらの中に発見。



図6 地元植木業の方の剪定によるセンスのよい街路樹の樹形。



図7 地元の方の要望により実現したポケットパーク。学生もよく利用する。維持管理が課題。

案が得られました。また、キャンパスの東側に隣接する柴原では、地域の人々が、境界部分の市道を阪大に因んで「アカデミック街道」と名付け、ポケットパーク整備や遊歩道整備などの努力を積み重ねてこられたことが明らかとなりました（図6・7）。街道に広く接する阪大も、街道沿いの魅力形成の熱意に応えていく責任のあることを強く認識しました。

続いて第3回では、キャンパスを含めたまち全体について、街並み、緑・水、花時計、暮らし・キャンパスライフの観点から議論した結果、人的資源の交流やネットワークによるまちづくりの体制の構築、キャンパスを通り抜ける歩行者や緑のネットワークの形成などの提案が生まれました。以上を参考にしながら、デザインを具体化したものが

図8～11です。この案を第4回で発表し、様々な意見交換を行い、今後も待兼山周辺整備、花時計の実現、まちづくりを、キャンパスデザイン室、施設部、学生グループなどが、地域と連携しながら進めていくことを約束・確認しました。

■まちづくりとの協働

待兼山デザインワークショップで生まれた地域の人々との関係を生かしながら、次の二つの活動を立ち上げつつあります。一つは、まちとキャンパスが協力して、境界部分に魅力的な街並みをつくりあげるため、まちに建物や広場が整備される時に、建築系学生サークル（木多・大谷が顧問）が無料でデザインの相談をさせていただく活動です。

図12は、デザインアドバイスで目指すべき、地域の景観像を示したものです。

地区、街路、眺望の三つの景観単位を設定し、それぞれの将来イメージやデザインコードを提案しています。もう一つは、キャンパスを取り囲む様々なまちについて、近世から現在に至るまでのまちづくりの積層を表現する「ま



図8 中山池周辺のスタディ
●：緑のガイド ●：キャンパスガイド
●：史跡ガイド ●：花時計の候補地



図9 柴原（手前）から石橋（奥）まで、キャンパスを通り抜ける緑のネットワーク。浪高時代から大切な地域の生活動線であった。

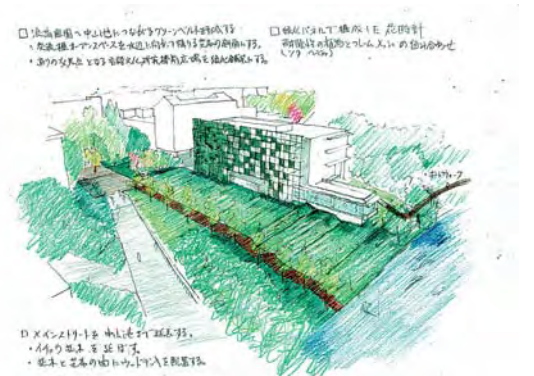


図10 花時計を学生交流棟の壁面に付ける提案。3案の中では評価が高かった。



図11 阪大坂下の街並み形成

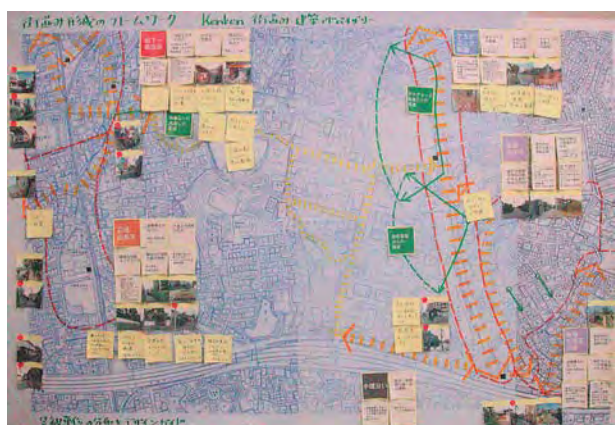


図12 柴原地区における街並みの個性と将来像の検討

ちづくりマップ」を作成し、キャンパスも含めた待兼山地域の魅力を発信することになりました。観光ガイドとして利用できる他、歴史的資源、社会的資源のネットワークによるまちづくりの可能性も示すものです。学生グループと協力しながら実現に向けて動き出すことになりました。

■キャンパス計画に関する研究

ファシリティマネジメント（FM）の研究に取り組んでいます。一般的に普及しつつあるFMは、維持管理・老朽



図13 吹田キャンパスにおけるFCIの分布

施設の整備不具合を財務的に評価する指標で、残存不具合額（計画よりも延期されている保全項目の更新工事費の合計）と、施設の復成価格（現在同じものを新築した場合の価格）の比率。FCIが5%以下なら良好な状態、5%~10%なら注意を要する状態、10%以上なら悪い状態といわれる。FCIの改善と同時に、生活環境の質をいかに向上させるかを研究。

FCI	建物数	割合
0%~5%	55	31%
5%~10%	20	11%
10%~	104	58%

改善を主体とするのに対し、デザイン室では、景観形成、交流性、開放性、安全性、バリアフリーの五つを生活環境指標として設定し、これらをバランスよく向上させるためのFMの方法論を開発研究しています。阪大の典型的な63棟を抽出診断し、これに基づく全棟のシミュレーション結果から、豊中・吹田の各キャンパスに最適なマネジメント方法を検討しました。また、多様な主体による魅力あるキャンパスづくりの理論化のため、国内175大学に対する参加型キャンパスマネジメント（PMCE）の実態調査と考察を行いました。別の機会に研究成果をご報告する予定です。

■キャンパス計画に関する授業

基礎セミナー「キャンパスデザインプロジェクト」の授業を、平成18年度後期より開講します。学生がキャンパスの診断を行い、改善案を立案・実践するもので、課題を通して、キャンパスに対する責任や愛着を持ってもらうことも目的です。講師として、木多・大谷の他に、工学研究科、コミュニケーションデザイン・センターから建築・都市・交通・ランドスケープを専門とする若手教員、事務局から施設部職員が参画し、地域住民とも協働しながら、楽しく斬新な取り組みを展開したいと思います。

■開かれたキャンパスづくり

キャンパス計画は大学本部が主体となって進めるものではありませんが、一般のまちと同じように、多様な人々の参画やアイデアによって、魅力的なキャンパスに熟成していくはず。様々な部局の方々、学生、地域の方々と意見交換をしていきたいと思っています。事務局棟4階に新しいオフィスが誕生しました。ここには、検討中の模型や図面、キャンパス計画に関する書籍・資料なども充実させていく予定です。キャンパスづくりに関心のある方々は、是非一度お越しください。



図14 キャンパスデザイン室

きた・みちひろ

株式会社 日建設計、大阪大学工学研究科助手・助教授を経て平成17年4月から現職

プロフィール

おおたに・ひろみつ

株式会社 竹中工務店設計・FM部を経て平成17年7月から現職

プロフィール

役員室だより

2006.4 Vol.11

法人化3年目の平成18年度がスタートしましたが、大阪大学にとっての今年度の最重要課題は、大阪外国語大学との統合に向けた準備です。3月23日に大阪大学と大阪外国語大学との間で統合推進に関する合意締結がなされたのを受けて、この4月からは両大学に統合推進協議会が設けられ、連携・協力しながら統合へ向けた具体的な準備を開始します。乗り越えなければならないハードルは沢山ありますが、新生大阪大学が20年、30年後に世界のトップクラスの総合大学として発展していることを確信しながら、困難を一つひとつ乗り越えて統合実現を目指します。そのためには、構成員全ての一致団結が必要です。皆様方のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

(大学統合推進合意締結に関する情報については、本学ホームページ「大学最新トピックス URL : (<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/press/newtopics.html>)」をご覧ください。)

平成18年度の年度計画

平成18年度の年度計画については、各部局の協力を仰ぎながら、6室と1本部が分担・連携して作成し、3月末に文科省へ提出しました（既に大阪大学ホームページに掲載済）。また、3月3日に開催された経営協議会において年度計画を了承していただいた際には、年度計画の中でも重要と考える事項を主要事項として取りまとめて説明を行いました。この主要事項は別途19～21ページに記載しておりますのでご覧ください。年度計画の達成に向けた取組みや活動をよろしくお願いいたします。なお、主要事項の幾つかについては、各室のたよりの中で詳しく触れられています。

役員会等の新メンバー

総 長：宮原 秀夫	
理 事：鈴木 直（総合計画担当）、	鷺田 清一（教育・情報担当）、
馬越 佑吉（研究推進担当）、	馬場 明道（評価・広報担当）、
仁科 一彦（財務・会計担当）、	北見 耕一（人事労務担当）、
橋本日出男（国際交流推進担当）	
総長補佐：遠山 正彌（医学系研究科長）、	萩原 俊男（医学部附属病院長）、
小泉 潤二（人間科学研究科長）、	土岐 博（核物理研究センター長）、
大和谷 厚（医学系研究科教授、学生生活委員会委員長）、	
辻 毅一郎（工学研究科教授）、	西田 正吾（基礎工学研究科長）
監 事：二瓶 文博（常勤）、	吉田 周邦（非常勤）

総長、理事、監事の顔ぶれは昨年度と同じですが、2年間総長補佐を務められた西尾章治郎情報科学研究科長、木下タロウ微生物病研究所長、高杉英一大学教育実践センター長に代わって小泉潤二人間科学研究科長、土岐博核物理研究センター長、大和谷厚医学系研究科教授が総長補佐の新メンバーとして加わりました。



4月3日（月）銀杏会館において、総長をはじめ役員と各室員等との交流会が開催されました。

組織の整備

平成18年度から新設、改組など新たに整備された教育研究組織は、次のとおりです。

【学部関係】

・理学部《学科名称変更》	生物学科	→	生物科学科
《入学定員変更》	数学科 (48人)	→	数学科 (47人)
	物理学科 (78人)	→	物理学科 (76人)
	化学科 (79人)	→	化学科 (77人)
	生物学科 (20人)	→	生物科学科 (25人)
・薬学部《学部の改組》	総合薬学科 (80人)	→	薬学科 (25人) 6年制
		→	薬科学科 (55人) 4年制
《学科目の再編》	総合薬学科	→	薬学科
	(分子・有機化学) 学科目		(医療・生命薬学) 学科目
	(医療・生命科学) 学科目		薬科学科
	(生命・情報薬学) 学科目		(分子・有機化学) 学科目
			(生命・情報薬学) 学科目
・工学部《学科の再編》	電子情報エネルギー 工学科 (197人)	→	電子情報工学科 (162人)
	地球総合工学科 (158人)		環境・エネルギー工学科 (75人)
			地球総合工学科 (118人)

【研究科附属施設関係】

《新設》

- ・医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター
- ・薬学研究科附属実践薬学教育研究センター
- ・工学研究科附属フロンティア研究センター

【学内共同教育研究施設等】

《改組》

- ・極限量子科学研究センター（極限科学研究センターから改組）

《新設》

- ・金融・保険教育研究センター

《部門名称変更》

- ・コミュニケーションデザイン・センター
臨床コミュニケーションデザイン部門
→ 臨床&フィールド・コミュニケーションデザイン部門
- アート&フィールド・コミュニケーションデザイン部門
→ アート&テクノロジー・コミュニケーションデザイン部門

【全国共同利用施設関係】

《改組》

- ・レーザーエネルギー学研究センター（学内共同教育研究施設から改組転換）

【教育研究支援組織関係】

《新設》

- ・学際融合教育研究プラットフォーム

【海外拠点関係】

《新設》

- ・海外拠点本部（サンフランシスコ教育研究センター・グローニンゲン教育研究センター・バンコク教育研究センター）

総合計画室

法人化後2年が経過し、今後は、平成16、17年度に整備した制度・組織が旨く機能するかどうか検証すると同時に、中期計画の実質化を図っていかねばなりません。平成19年度には中期計画の後半に入り、中期計画全体の評価を視野に入れた年度計画の作成と実施が必要となってきます。その意味においても、平成18年度においては、平成16、17年度の年度計画進捗状況を十分に踏まえながら、高いポテンシャルティをもって中期計画後半に突入できるよう、その年度計画の達成を図る必要があります。

以下には、総合計画室に係わる年度計画の主要事項の幾つかについて説明します。

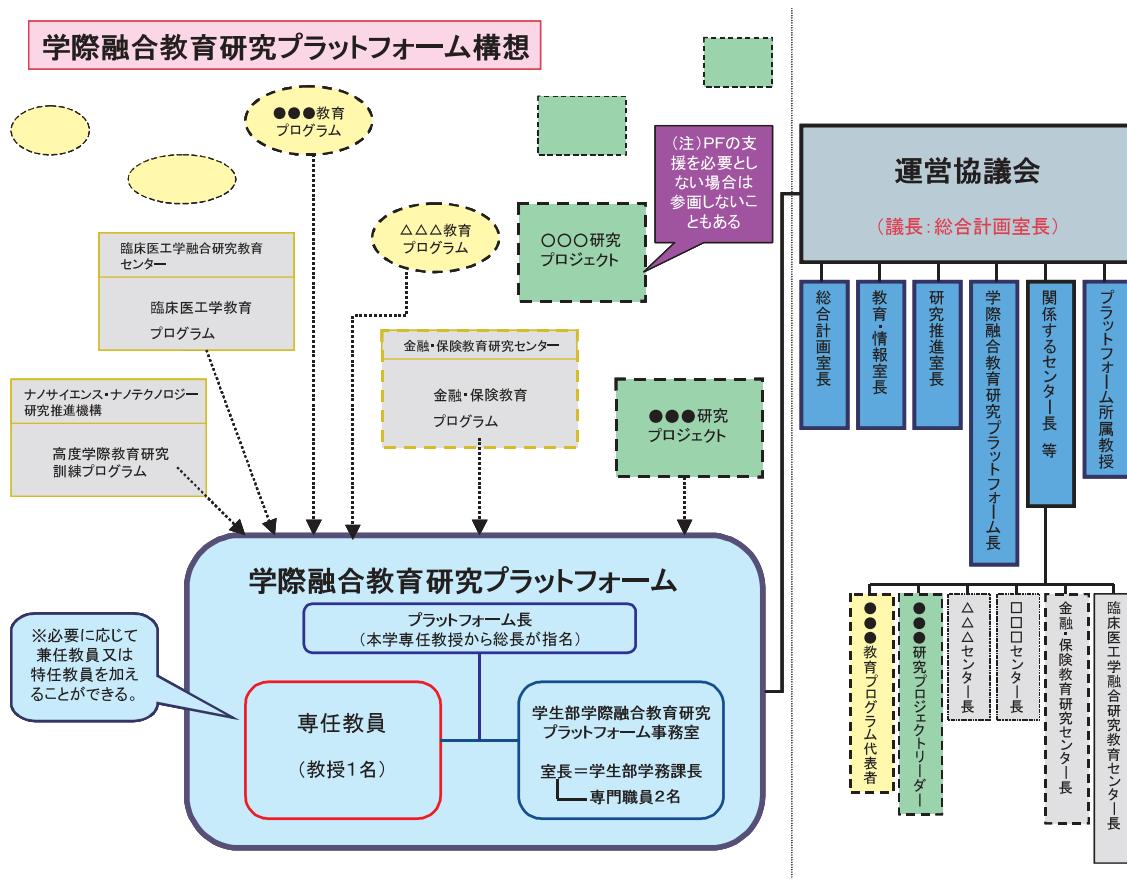
学際融合教育研究プラットフォーム

本プラットフォームは、学際融合的な教育プログラム及び研究プロジェクトを実施する本学の教育研究組織等の要請に基づき、それら教育プログラム等の運営上必要な支援を行い、その円滑な実施に資することを目的とした教育研究支援組織として4月1日から新設されました。

プラットフォーム長には、総長指名により工学研究科の久保司郎教授が就任（任期2年）しました。専任の教授については、運営協議会に置かれた選考委員会で現在選考中です。事務体制としては、学生部に学際融合教育研究プラットフォーム事務室を置き、室長は学務課長が兼務し、2名の専門職員が専任で担当することとなっています。

プラットフォームの設置場所は、将来的には両キャンパスへの分散配置も考えられますが、スペースの確保や配置人員の関係もあることから、当面は、豊中地区の共通教育管理棟6階に部屋を設けて活動を開始することになりました。

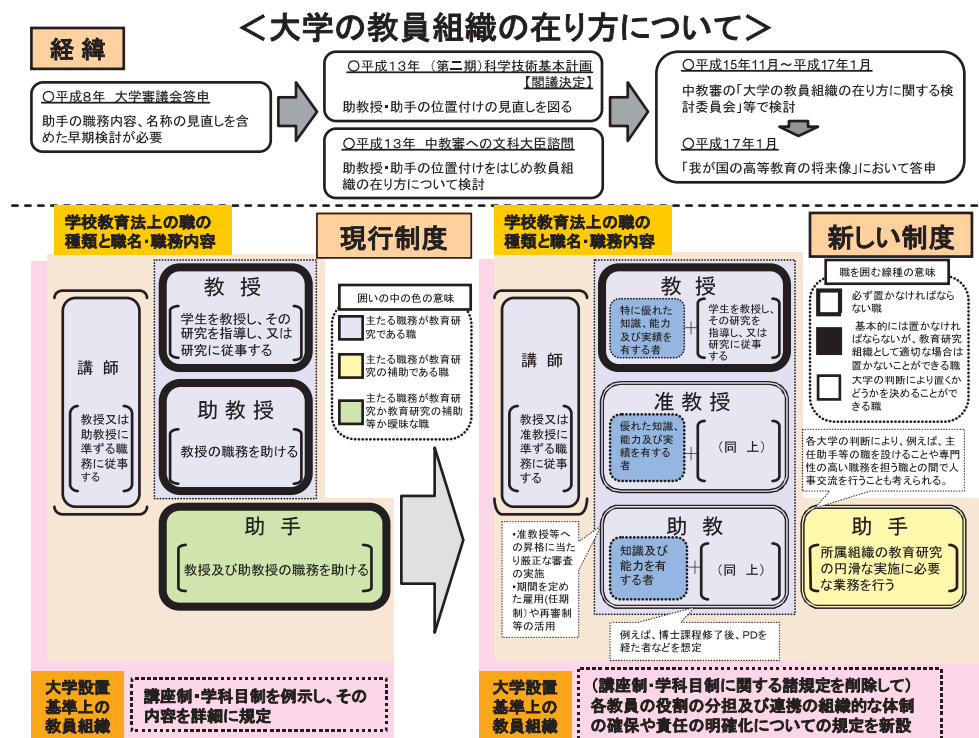
なお、当面は学際融合教育プログラムの支援を中心とする予定ですが、今後の具体的な運営、支援内容等については運営協議会で詰めていくこととしています。有効な支援業務ができるよう今後とも関係各部局との連携と協力をよろしくお願いします。



新しい教員組織の在り方についての検討

平成19年4月から施行される学校教育法の改正に伴う新たな教員の職の種類と職名及び大学設置基準の改正に伴う教員組織の在り方については、総合計画室の下に設置された「教員組織等の在り方に関する検討ワーキング」で検討を進めています。

なお、本ワーキングにおいては各部署の実状を踏まえた検討を行うために、3月末に各部署局長あてこのたびの制度改正に関する意見、考え方についてアンケートを行うことにしました。また、7大学副学長懇談会においても各大学の検討状況等について意見交換していくことになっていきますので、他大学の動向も参考にしながら、今秋までにはワーキングでの検討結果をとりまとめていきたいと考えています。



男女共同参画推進体制の整備

男女共同参画に関する対応方策等については、昨年7月から、総合計画室の下に設置された男女共同参画に関する検討ワーキングが検討を重ねてきたところですが、この度、「男女共同参画に関する対応方策等に関する提言」として取りまとめられ、3月の教育研究評議会で報告されました。(ホームページに掲載されていますのでご覧下さい。)

今後は、この「提言」の中で示された「大阪大学における多様な人材活用推進に関する基本理念」に基づき、4月から新たに設置される「多様な人材活用推進委員会」が、多様な人材の積極的活用・開発のための施策及び教職員・学生の意識向上を図るための施策等を審議、提言又は実施していくことになります。

なお、昨年12月に実施した「多様な人材活用推進のための実態調査」については、男女共同参画に関する検討ワーキングにおいて約50項目のデータ処理を行い、そのうち代表的な14項目を「提言」に添付していますが、引き続き、多様な人材活用推進委員会で、更に綿密な分析を行ったうえで、公表することとしています。

文書館(仮称)設置についての検討

平成17年1月に総合計画室の下に設置された文書館(仮称)設置検討ワーキングでは、これまでの検討結果を第2次答申としてとりまとめ、3月の教育研究評議会で報告されました。(答申の内容は次頁のとおり)

この答申を踏まえ今後の計画としては、平成18年度中に文書館設置準備室を設置して、第2期中期計画が始まる平成22年度に文書館開設を目指すこととしています。

平成 18 年 2 月 10 日

大阪大学文書館（仮称）設置第二次答申

大阪大学総合計画室長
鈴木直理事・副学長殿

大阪大学文書館（仮称）設置ワーキング主査 阿部武司

昨年 1 月以来、大阪大学に文書館的機能を持つ組織（以下、便宜的に文書館と呼びます）の設置の可否をめぐって討議を重ねてまいりましたが、同年 8 月の第 5 回ワーキングで設置可という結論が得られ、9 月にそれに関わる第一次答申を総合計画室に提出し、基本方針はご承認いただきました。さらに本日開催されました第 9 回ワーキングで第二次答申案が了承されましたので、第二次答申を総合計画室に提出させていただきます。よろしくご審議お願いいたします。

1. 設置目的

文書館の設置目的は（1）現用期限が過ぎた法人文書（大学本部および各部局の簿冊をはじめとする文書）中、アーカイブとして保存すべきものを選別し・整理・公開すること、および（2）大阪大学に関するそのほかの歴史的資料を収集・整理し公開することの 2 点を柱とする。それらに関連して文書館は、上記資料に基づく各種調査とその成果の刊行などの研究活動、大阪大学の歴史などに関する学生への教育活動、さらには展示や市民講座の開催などの社会貢献事業も行う。

上記目的の（1）は情報公開法（1999 年制定。2001 年 4 月施行）と深く関わり、（2）は過去に実施され、今後再開が予想される大学史編纂の際の収集資料の保存と関連している。上記 2 つの目的が対象とする資料は、オーバーラップする面はあるものの、少なくとも技術的にみてそれぞれ別個の専門的な取扱いが要求される。

今後、大阪大学の行政文書の保管や公開を確実にし、近い将来編纂委員会*等の（文書館とは異なる）組織を設けて実施しなければならない 100 年史編纂事業を円滑に進めるためにも、可能な限り早期に文書館を実現すべきである。

*阪大の創立 100 年は平成 43（2031）年であるから、その 10 年少し前の平成 32（2020）年頃には 100 年史編纂委員会および同編纂室が設置される必要がある。

2. 組 織

平成 18 年度中に文書館設置準備室（以下、準備室と呼ぶ）を設置し、中期計画が終了する平成 21 年度までに文書館の設置を準備する。文書館自体は新中期計画の実施と同時に平成 22 年度に開設することを目指す。

準備室は法人文書、歴史的資料の両方の整理・収集を進め、文書館設置に備え関連法規の整備を行う。

文書館は本部の直接管理下に置かれるべきであるので、その設置準備の段階から本部兼任の事務職員 1 名が準備室のメンバーになる必要がある。

3. 施 設

準備室は総合学術博物館内に置かれるが、将来の文書館の設置場所は、まず豊中地区とする。将来、各部局の文書が毎年度、文書館に流入してくる体制が固まった暁には、法人文書の保管場所を本部の近隣に別個設置する。

4. 人 員

準備室には兼任教員（教授）1 名を準備室長として置き、その者が統括責任を負う。

同室の専任教員として専任講師 1 名を置く。任期は平成 18 年度から平成 21 年度までとする。多くの国立大学文書館では通常助手が専任教員であるが、大学史編纂室などの伝統の上に設置されたそれらの大学文書館と異なって、基礎がまったくない所に設置される本学文書館を短期間に発展させるためには、すぐれた archivist の確保が肝要であり、また、できるだけ早期に「大阪大学の歴史」などの全学共通教育科目の講義を担当してもらう必要もあるため、講師ポストの確保が必要である。専任教員は資料の収集・整理・保存・公開に深い関心と学識を持ち、かつ実務経験を持ついわゆる archivist である。専攻分野としては日本近代史、とくに大学史、教育史、法制史など、文書館での実務自体が研究・教育に直接反映される分野が望まれる。なお同ポストは全学的見地からみて重要であるので、本部留保教員ポストの活用が期待される。専任教員の下には法人文書、歴史的資料のそれぞれを分担して収集・整理してもらうために事務補佐員 2 名を置く。

そのほか本部兼任の事務職員 1 名を置くことは、すでに述べたとおりである。

[組織表]

文書館設置準備室	統括	準備室長（兼任教授）
		講師 1（専任）
		法人文書担当
		歴史的資料担当
		事務（本部直属）
		事務補佐員 1
		事務補佐員 1
		事務職員（兼任）

以 上

施設マネジメントの一層の推進

昨年度作成されたキャンパスマスタープランに沿ったキャンパス整備を実現するため、施設マネジメント委員会、キャンパスデザイン室、施設部が一丸となって、財務・会計室と連携しながら、計画的な整備を推進します。厳しい財政状況を考えると、Space Management、Quality Management、Cost Managementの重要性は益々高まっています。スペースの有効利用や経費の節減は、構成員の皆様方の意識改革を伴わなければ実現不可能ですのでご協力願います。

昨年度、新たな整備手法検討WGを設けて、種々の検討を行って参りましたが、寄宿舎に関する費用省令が改訂されること等を受けて、留学生や外国人研究者のための宿舎を国からの補助金に頼らずに整備する可能性を具体的に検討します。

同窓会組織の充実

大阪大学同窓会連合会は、部局同窓会相互の交流・連携、本学卒業生等の交流・親睦を推進し、また同窓会と大学との連絡を緊密にして広く社会に貢献することを目的として昨年7月に設立されました。

また、今年1月7日には、宮原総長出席のもと北米在住の阪大OBによる「北米地区同窓会」も発足しました。

さらに、いちょう祭の初日にあたる4月30日（日）は、大学主催、同窓会連合会協賛による第1回ホームカミングデイとして豊中キャンパスで記念式典、記念レセプションを開催することとし、本学及び同窓会連合会のホームページに催しの案内と一般からの出席受付けも掲載しました。

同窓会連合会では、会費や同窓生情報の管理方法など部局同窓会と整理すべき課題もいくつか残っていますが、大学及び各同窓会が相互に支援協力しあって、今後ますます世界に伸び続ける大阪大学であるよう努めたいと考えています。

大阪大学同窓会連合会ホームページ <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

教育・情報室

教育・情報室では、新年度を迎え、いくつかの新しい取り組みを開始します。

大阪外国語大学との統合（平成19年10月予定）に向けて、教育システム・学務・学生生活・情報システム関係の懸案事項について、細部の検討を早々に始めます。

次に、本年度、大学教育実践センターに新たにキャリア教育支援部門を設置することになり、そこに教員1名を配置し、さらにキャリア支援室とも連携しながら、総合大学としての大阪大学にふさわしいキャリア教育のあり方を設計し、構築していくことになりました。

特色GP、現代GP、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」といった文部科学省による教育プログラムへの申請は、この3月までに学内ヒアリング、申請書類作成とも終え、これから審査を受けることになっています。どのプログラムにも学内からは熱心な応募があり、研究のみならず「教育の大阪大学」のイメージがしだいに定着しつつあります。

上記以外の検討事項としては、まず、TA・RAの理念と業務内容・方式についての抜本的な見直しがあり、また、主専攻・副専攻制度の検討という将来の大学教育制度の根幹にかかわる事項の検討も、昨年度の議論をふまえ、さらに継続して審議していきます。

研究推進室

研究推進室は、馬越佑吉理事・副学長を室長とし、本多佑三教授、伊藤 正教授、仲野 徹教授、中嶋英雄教授、宮本欽生教授、小泉潤二教授、土井健史教授、原島 俊教授、今田幸二郎研究推進・国際部長を室員とする新体制となりました。平成 18 年度は、下記の項目を中心に研究の活性化を図ります。構成員各位のご協力をお願いします。

Industry on Campus構想による産学連携の活性化

本年 4 月より、共同研究講座・共同研究部門制度が導入されます。この制度では、従来の共同研究より更に踏み込んで、企業の研究者が講座所属の教員として参画し、企業のニーズと大学の研究シーズをマッチングさせ、より実効的な共同研究、開発研究を行うことが可能です。その共同研究で得られた研究成果の知的財産権は、原則として大学と企業の共有となります。また、科学研究費等の公的資金による研究展開と共に、出資企業の了解が得られれば、他企業との共同研究も可能です。既存の専攻の講座等の教員が兼任教員としてこの共同研究講座の運営に参画し、幅広い研究展開を行っていただきます。

また、ここでは研究に重点をおき、教育の義務は課していませんが、学生が共同研究に参加することにより、産業と結びついた第一線の研究現場を体験することにより、研究開発力に優れた人材の育成を期待しています。企業の基盤的、基礎的研究を大学で実施する、いわば企業のサテライト研究室として産学協働してわが国の科学技術、産業の活性化に寄与する制度として発展することを期待しています。

部局横断型プロジェクトの実施ならびにポスト 21 世紀 COE への対応

研究戦略 WG を中心に各種の部局横断型研究プロジェクトを実施するとともに、昨年度に策定した研究グラウンドデザインを参考にその具現化を検討します。また、新たな研究グループを組織し、大型プロジェクト、競争的資金獲得に向けて戦略的な企画、立案体制を構築します。さらに、平成 19 年度に計画されているポスト 21 世紀 COE プログラム導入に対しての対応策を検討します。

関西をバイオ研究の拠点に

蛋白質関連の研究で実績のある、生物分子工学研究所の施設が大阪大学に移管されました。大阪大学バイオ関連多目的研究施設として活用し、学内のバイオ関連プロジェクトを実施すると共に、隣接する大阪バイオサイエンス研究所、企業とも連携して新たな研究展開を図ります。

また、彩都地区のバイオインキュベータ施設、独立行政法人医薬基盤研究所、国立循環器病センター、大阪大学、バイオ多目的実験施設と連絡バスで結ぶ交通インフラを整備し、バイオ関連研究の活性化を図ります。さらに、けいはんな学研都市の財団法人関西文化学術研究都市推進機構の光医療産業バレープロジェクト、地域クラスター等の企画立案、関西地区の大学等との研究機関とも連携し、関西圏をバイオ関連研究を拠点として発展するよう働きかけます。

研究倫理ポリシー策定と科学上のミスコンダクトの防止

論文データ捏造等、科学者に対する信頼が揺らぎつつあります。研究推進室では、研究上のミスコンダクトを防止し、責任ある対処をとるため、研究倫理 WG を設置し、その対処策を検討することになりました。日本学術会議、総合科学技術会議、他の研究機関の答申案を参考に、信頼回復に向けての対処策を検討いたします。

評価・広報室

今年度の抱負

今年度の評価・広報室の抱負としては、(1) 組織評価の最終版の策定、(2) 広報体制の一元化に伴う体制の整備と具体的行動指針の策定、(3) 法人評価委員会の年度評価に対する対応、の3つの目標があります。(1)については、昨年度実施した基礎評価の全学試行の結果、年度業務報告書作成に伴う達成状況評価のこれまでの実績をもとに、組織評価の最終版の策定を目指したい。(2)については、広報委員会の廃止に伴う広報体制の一元化を、具体的に活動指針を策定する中で実現していきたい。(3)については、大学、部局の実績をうまくとりまとめ、初年度に続く高い年度評価を獲得したい、と考えています。

国立大学法人評価委員会による年度評価の主な改正点

国立大学法人評価委員会による大学の年度評価について、実施要領が変更され、平成18年度から次のような観点が加えられました。

- ・業務運営における各大学共通に評価すべき項目を設けたこと。
- ・各大学の取り組みや実施体制が充分機能しているかどうか。
- ・「教育研究等の質の向上」の評価において、各大学の特色ある取り組みの外形的・客観的な進捗状況を積極的に取り上げているかどうか。
- ・中期目標・中期計画の達成に向けた業務が順調に進捗しているかどうか。

また、実施要領の運用に係る改善点として、次のような事項が新たに示されました。

- ・各国立大学の評価に当たって、財務諸表等の分析結果を積極的に活用すること。
- ・附置研究所及び研究施設の全国共同利用に関し、各大学の取り組みの進捗状況を確認し、特筆すべき点や遅れている点を示すこと。
- ・年度計画に記載のない事項についても、当該年度に中期計画に対応した取り組みの内容や、16年度に整備した体制や仕組みについて17年度にどのように機能したかを記載すること。

教員基礎データの登録・更新

教員基礎データは、個々の教員の公的なアクティビティを表すもので、個々の教員の入力を通じて集積するデータベースです。集積したデータは、個人のデータベースとしての活用以外に、組織の活動データとして大学の基礎評価等に利用するとともに、研究業績などのデータは研究者総覧として広く社会に公表しています。このため、データ管理分析室では、信頼性の高いデータベースとなるよう改良を加えていますので、各教員におかれてもデータの登録・更新にご協力願います。

広報委員会の廃止

新たな広報活動の取り組みを展開していくために、広報委員会は平成18年度末をもって廃止しました。これに伴い、新たに平成18年4月から企業の広報専門家等を加えた機動的な「広報ワーキング」を評価・広報室の下に設置することとしました。

広報ワーキングでは、広報活動指針の策定や具体の広報活動の企画立案を検討・実行していくことになります。

広報委員会報告書「大阪大学における広報活動の取り組み」

広報委員会の過去2年間（平成16年度・17年度）の取り組み状況や今後の広報活動のあり方について報告書としてとりまとめ、ホームページにも掲載しました。（アドレス：<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/committee/index.html>）

報告書の内容は、大阪大学の広報活動の基本的な考え方、広報活動の視点と方向性、効果的な広報活動を展開するための具体的方策などで構成されています。

財務・会計室

財務・会計室長所感

財務・会計室の2年目は、難問を抱えながらも順調に展開し、責務を果たすことができました。これも室員の先生方と財務部の諸氏による努力と協力の賜物です。

法人化3年目になる新年度は、これまでの成果に安住せず、新たな目標に向かって努力したいと思います。

大阪大学がその理念に沿って一層飛躍していくための、財務的基礎を確立すべく、財務・会計室が一丸となって邁進する所存です。

今後、財務・会計室では、平成19年度以降の予算配分の在り方、戦略的・総合的な資産運用、余裕資金での新たな短期運用の実施、長期的な財政計画の策定などの検討を進めることとしております。

平成17年度予算補正第2次案

法人化に伴い、本学の予算は、授業料収入、附属病院収入などの自己収入の増減が支出に反映されるため、予算補正案の編成という作業を行う必要があります。

このため、平成17年11月時点の収入見込額により予算補正第1次を行ったところですが、改めて本年1月までの収入実績等により、予算補正第1次時点での収入見込額との増減額を支出予算に反映する予算補正第2次案を策定し、2月23日の役員会で承認されています。

平成17年度間接経費執行計画の策定

平成17年度の間接経費について、第3次執行計画案を策定し、3月20日の役員会で承認されています。追加採択事業の詳細については、以下のとおりです。

間接経費 8事業		(単位:千円)
部局名等	事項名	金額
事務局(施設部)	待兼山周辺修景整備工事	128,968
共通(高圧ガス関係)	屋外貯蔵所設置工事	8,000
安全衛生管理部	AED(自動対外式除細動器)整備経費	6,308
保健センタ	健康診断用機器類更新費	5,000
国際交流推進本部	海外拠点タイ・バンコクセンター運営費	2,677
知的財産本部	機関附属知的財産の出願等経費補填	2,603
医学部附属病院	ダイオキシン環境測定	1,544
事務局(施設部)	待兼山修学館サッシ等改修工事	1,225
計		156,325

平成18年度の予算配分

平成18年度の予算配分については、国立大学法人大阪大学予算編成方針、平成18年度予算配分基本方針、平成18年度間接経費配分基本方針を策定し、3月の教育研究評議会、役員会で承認されています。

平成18年度重点経費、間接経費執行計画(案)

平成18年度の「重点経費」及び「間接経費」については、より効果的、効率的な執行計画案を策定するため、公募された事業について、財務・会計室で書類審査並びにヒアリング審査を実施し、これらの審査結果を踏まえ、執行計画案を策定したところです。

なお、4月の役員会で同執行計画案が承認された後には、採択事業の詳細について、役員室だよりで公表いたします。

人事労務室

外部資金を使用した任期付常勤職員の雇用

「プロジェクトの目的達成のため、より優秀な職員を相当の待遇で確保したい。」「外部資金で常勤職員を雇用し、プロジェクトにより増加した業務を処理させたい。」といった要望がかねてからありました。

今回こうした要望に応え、外部資金を使用した任期付常勤職員の雇用を可能とする制度を創設しました。

この制度は、任期を限って雇用するものであり、給与は職務給・年俸制として設計しています。

(平成18年4月実施)

平成18年度以降における教職員給与規程等の改正

本学では、平成17年度の人事院勧告（改正給与法）を受け、これへの依拠を基本とした給与改正を実施するとの方針の下に、給与規程等の改正を、また、国家公務員退職手当法の改正に依拠した退職手当規程等の改正を行うこととしました。

ただし、非常勤職員及び寄附講座教員等については、国の制度とはことなる職務給制度を採用しているため、改正を行わないこととしております。

概要

- ① 教職員の給与を平均4.8%引き下げ、中高年層については民間の同年齢層との均衡を考慮し、さらに2%程度の引き下げを行う一方、若年層については引き下げを行わない。ただし、在職者については、現在の給与を経過措置として保障する。
- ② 現行の調整手当に代えて地域手当を支給する。（両キャンパス等を同一生活圏と考え、同一の支給割合とする。）
- ③ 勤務成績に応じた昇給制度を導入し、賞与への勤務成績の反映の拡大を図る。
- ④ 退職手当の支給率カーブのフラット化等を図る。

これらの規程については、本学のホームページからご覧下さい。

(平成18年4月実施)

招へい教員等災害補償制度の補償の拡大

招へい教員等を対象にした災害補償について、平成18年4月1日以降の補償制度を以下のとおり拡大することとなりました。

- ① 招へい教員等の業務に従事する過程において心筋梗塞等により疾病した場合にも一定の保険金が給付されること。
- ② 招へい教員等の業務を行うためホテル等に宿泊し、宿泊中に発生した事故等により被災した場合にも一定の保険金が給付されること。

(平成18年4月実施)

育児・介護を行う教職員の早出遅出勤務の対象範囲の拡大

教職員がフルタイムで働きながら育児・介護を行い、家庭責任を果たすことができるよう、始業及び終業の時刻を繰り上げ又は繰り下げて勤務できる対象範囲に次の教職員を追加することとなりました。

「児童福祉法に基づく学童保育施設に託児している小学生の子を迎えに行く教職員」

(平成18年4月実施)

国際交流推進本部

国際交流推進本部は、昨年末、「大阪大学の国際戦略」を発表しました。その全文は大阪大学のホームページに掲載されています。そこでは、大阪大学の国際交流の目標として「世界に開かれた魅力ある大学」を掲げています。私たちは、大学における研究・教育の成果は国際公共財ともいえるものであって、人類全体によって享受されるべきものであると考えます。そのためには、何よりも「世界に開かれた魅力ある大学」でなければならないし、また、「世界に開かれた魅力ある大学」であってこそ、世界の各地から人が集まり、大阪大学の研究・教育の更なる発展が可能となると考えます。そして、具体的には次の3つを掲げています。

- ・ 海外研究者・研究機関との連携促進と、研究成果の世界への発信
- ・ 国際社会でコミュニケーションし、創造的・建設的に行動できる人材の育成
- ・ アジアにおける共同研究コミュニティ構築による国際貢献

国際交流推進本部第3年目に当たる本年度は、この3つの具体化を目指します。

まず、研究面における世界的ネットワークの構築は、個別研究者・部局の主導によるものが主であり、今後ともそうした自然発生的なものが根幹をなすと考えます。国際交流推進本部はこうした活動を支援し、研究面での一層の交流を推進します。

教育面においては、学生の交流を推進します。特に、本学学生の海外留学・研修が少ないことが国際交流の問題点の1つです。そのため学生派遣のための奨学金制度を設けましたので応募してください。留学性の受け入れについても、奨学金制度を作り交流協定大学からの留学生を積極的に迎え入れます。

アジアに対する国際貢献については、タイ国を中心に30年余にわたり行われてきた生物工学国際交流センターの活動に加え、昨年から微生物病研究所を中心にした新興・再興感染症の共同研究が加わりました。

こうした国際交流の目標を達成するに当たっては、海外教育研究拠点が重要な役割を果たします。サンフランシスコ・センターは2004年に、オランダのグローニンゲン・センターは2005年に開所しました。今年度にはバンコクセンターが開かれます。海外教育研究拠点は学生・研究者・研究成果交流の前進基地であり、拠点活動により北米、ヨーロッパ、アジアにおける本学のプレゼンスを高めていくことを目指します。なお、この4月21日、22日にはサンフランシスコにおいて、大阪大学とカリフォルニア大学バークレー校との共同主催、APRU（環太平洋大学協会）とAEARU（東アジア研究型大学協会）などの後援で、地震シンポジウム（Earthquake Hazards around the Pacific Rim—Global Watch and Environmental Impact）が行われます。サンフランシスコ・センターがその準備、運営に当たります。

大阪大学海外拠点本部の設置

上に書いたように、本学はサンフランシスコとグローニンゲンにセンターを置き海外拠点活動を続けてくるとともに、バンコクにもセンター発足の運びになりました。しかしながら、こうしたセンターの学内での正式な組織としての位置づけが明確でなかったこともあり、この度大阪大学海外拠点本部を設置することになりました。海外拠点本部は関係部局との連携を深めながら大阪大学の方針の下で、センターの活動を積極的に進めていこうとするものです。海外拠点本部には運営委員会が置かれます。

シンポジウム「21世紀における産業バイオのフロンティア」

大阪大学は3月5日、6日の両日、バンコクのアマリウォーターゲートホテルにおいて、上記のシンポジウム（Japan-Thailand Symposium on the Frontier of Industrial Biotechnology for the 21st Century）を開きました。おりしも訪タイ中の河本三郎文部科学副大臣の出席を得てシンポジウム冒頭に挨拶をいただきました。全部で2題の基調講演、6題の特別講演と12題の招待講演があり、このうち阪大側が11題で、タイ側が8題でした。タイ側の発表者には、ポンチャイ・マヒドン大学学長はじめ、チュラロンコン大学、カセサート大学教授やNational Center for Genetic Engineering and BiotechnologyのDirectorがおられます。予定の100名を大きく上回る約280名の参加者があり、産業バイオへの関心の高さを示しています。

平成18年度 年度計画の主要事項

平成18年度における各室・本部の具体的な取り組み、活動が4月からスタートしました。この中で、とくに大きな事項、重点的に進める項目を主要事項としてとりまとめました。

この主要事項については、3月3日に開催した大阪大学経営協議会で説明し、了承を得たものです。

今後、役員室だよりで進捗状況についてもお報告していきたいと考えています。

平成18年度 年度計画主要事項:大阪大学

1. 業務運営
2. 財務
3. 人事労務
4. 評価・広報
5. 教育
6. 研究
7. 国際交流・社会連携

地域に生き世界に伸びる



OSAKA UNIVERSITY

1

1

【1. 業務運営】学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学 に向けて

- 平成16、17年度に整備した制度・組織が旨く機能するかどうかの検証
- 計画の実質化
- 施設、設備のそれぞれについて、大学独自の自助努力により整備できるものについては計画的に整備

(1)大阪外国語大学との統合

- ・平成18年3月、統合推進に関する合意締結
- ・統合準備室の設置

(2)事務改革の推進

- ・事務改善推進室の設置
- ・情報推進部の設置
- ・給与関係事務及び共済組合関係事務の再編
- ・財務部の組織再編

OSAKA UNIVERSITY

2

2

【1. 業務運営】学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学 に向けて

(3)学際融合的な教育プログラム、研究プロジェクトを支援する体制の整備

- ・学際融合教育研究プラットフォームの設置

(4)全学の情報基盤の整備

- ・情報基盤デザイン機構の設置
- ・情報推進部の設置
- ・ICカードによる統一的な認証機構の検討

(5)新しい教員組織の在り方について検討・提言

- ・教員組織等の在り方に関する検討ワーキングの設置

OSAKA UNIVERSITY

3

3

【1. 業務運営】学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学 に向けて

(6)男女共同参画推進体制の整備

- ・多様な人材活用推進に関する基本理念の制定
- ・多様な人材活用推進委員会の設置

(7)文書館設置に向けての体制整備

- ・文書館設置準備室の設置

(8)施設マネジメントの一層の推進

- ・施設マネジメント委員会とキャンパスデザイン室が連携した計画的整備
- ・Space Management, Cost Management, Quality Managementの実質化
- ・新しい施設整備手法の検討
- ・設備の整備に関するマスタープランの作成

OSAKA UNIVERSITY

4

4

【1. 業務運営】学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学 に向けて

(9)安全衛生管理体制、情報管理体制、環境保全教育の充実

- ・環境安全関係授業の実施
- ・職域別メンタルヘルス講習会の実施
- ・情報基盤デザイン機構の設置

(10)同窓会組織の充実

- ・全学同窓会連合会と後援会の連携推進
- ・ホームカミングデイの開催
- ・天神祭船渡御への参加

【2. 財務】

- (1) 戦略的・総合的な資産運用を検討する。
- (2) 余裕資金について、引き続き国債等による資金運用を図るとともに、新たに短期運用の実施を検討する。
- (3) 長期的な財政計画を策定する。

【3. 人事労務】

- (1) 高齢者雇用安定法および国の人事関係法規を勘案しつつ、再雇用制度等を構築する。
- (2) 人材確保が難しい看護師の人材確保のため、選択制による退職金の前払い制度を導入する。
- (3) 教員以外の職員についても、年俸制を導入する。
- (4) 社会貢献の観点から、教職員の国際機関等への派遣の制度化を図る。

【4. 評価・広報】

【4-1. 評価・自己点検】

- (1) 組織評価(基礎評価・達成状況評価)の最終案の策定
 - ・平成16、17年度の試行の結果を分析し、内容、実施要領の改良を行い、大学運営への反映の方策を具体化する。
- (2) 達成状況評価(中期計画・年度計画の進捗と達成状況の点検)
 - ・平成17年度計画の達成状況の点検を、平成18年度計画の進捗状況と平成19年度計画の修正なども含めた観点から行う。
- (3)大阪大学基礎データシステムの整備と改良

【4. 評価・広報】

【4-2. 広報・情報提供】

- (1) 評価・広報室を中心とした広報一元化の体制作り
 - ・平成18、19年度の広報活動指針を策定し、実施する。
- (2) Webでの広報機能の拡大(ホームページの管理体制の充実)
 - ・大学ホームページで、常時最新の情報が提供できるよう、全学管理システムを検討する。
- (3) 大阪大学広報ネットワークの機能強化

【5. 教育】三つの教育目標「教養・デザイン力・国際性の涵養」のさらなる推進

- (1) 大阪外国語大学との統合による新しい教育実践に向けての取り組み
 - ・教養: 大学教育実践センターの設置(2004)
 - ・デザイン力:コミュニケーションデザイン・センターの設置(2005)
 - ・国際性: 国際的人材の育成のための新専攻、新学科、ならびに国際協力センターの設置(2007)
- (2) 平成19年度に向けての全学共通教育科目の抜本的な見直し(大学教育実践センター)
- (3) 大学院共通教育の開始(CSCD)
 - ・研究者倫理教育の設計

【5. 教育】三つの教育目標「教養・デザイン力・国際性の涵養」のさらなる推進

- (4) 「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の推進
- (5) キャリア教育の企画・推進
 - ・大学教育実践センターキャリア教育支援部門の設置
 - ・キャリア支援室の充実
- (6) 学生支援の充実
 - ・大阪大学教養教育奨学金(大阪大学後援会による支援)
 - ・課外活動物品購入支援 (")
 - ・「阪大坂」の整備
- (7) 出版活動の推進
 - ・大阪大学出版会の拡充(大阪大学後援会との連携)
 - ・教育・情報室教養書出版WGの設置
- (8) 学務情報システムの統合・整備(情報基盤デザイン機構)

OSAKA UNIVERSITY

11

11

【6. 研究】

- (1) 特別教育研究経費による研究拠点形成ならびに大学間連携研究の推進
 - ・研究推進: 継続9件、新規1件
 - ・拠点形成: 継続1件
 - ・連携融合事業: 新規4件
- (2) レーザーエネルギー学研究センターの全国共同利用化に対する研究支援
- (3) 部局間連携プロジェクトによる大型プロジェクトの企画・推進と競争的資金獲得
- (4) スーパー産官学連携本部事業による産学連携体制の整備
- (5) 共同ユニット制度(共同研究講座、共同研究部門)導入による新たな産学共同研究体制の構築

OSAKA UNIVERSITY

12

12

【7. 国際交流・社会連携】

【7-1. 国際交流】

(1) 海外教育研究拠点活動の活発化

- ・バンコク教育研究センター:
 - 新規開設、開所式と記念シンポジウム
- ・グローニンゲン教育研究センター:
 - 欧州協定校等との共同シンポジウム
- ・サンフランシスコ教育研究センター:
 - APRU/AEARUリサーチシンポジウム
 - 大阪大学フォーラム
 - 遠隔講義「世界は今、サンフランシスコから」
 - 「学問のすすめ、米国大学キャンパスから」

OSAKA UNIVERSITY

13

13

【7. 国際交流・社会連携】

- (2) 海外から来学した学生・研究者に対する生活・研究環境の整備
 - ・ワンストップ・サービス
 - ・GCN-Osaka、GCN-Worldwide(ネット上での参加型情報提供サービス)
- (3) 新たな国際学生交流支援事業(70周年基金)の実施
 - ・「学生交流助成金(派遣)」、「同(受入)」
 - ・「学生海外研修プログラム等助成金」
 - ・「学生海外短期研究留学助成」
 - ・「留学交流支援基金」の設立と運営
- (4) 国際交流に関する企画・立案能力の強化
 - ・国際企画室による企画・立案能力の強化
 - ・主要大学との研究交流の推進
 - ・国際貢献の組織的取組

【7-2. 社会連携】

- (1) 中之島センターの有効活用による社会連携の充実
 - ・大阪大学エキステンションの開始、ヘルスケアクラブの開設

OSAKA UNIVERSITY

14

14

全国七大学総合体育大会（大阪大会）



実行委員会委員長 田 村 祐 一

通称「七帝戦」

全国七大学総合体育大会は、法人化以前は「国立七大学総合体育大会」でしたが、法人化後に改称しています。参加大学は、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の7大学で、「七帝戦（ななだいせん）」「七帝戦（しちていせん）」「七帝（しちてい）」などと略されて学生の間で親しまれています。

しかし、「七帝」という略称は印象が良くないという意見も一部にあって、実行委員会では「七帝戦」と略して呼ぶようにしています。クラブの間では「七帝」と呼ぶ部員もまだまだ多いようです。

七帝戦の起源

七帝戦の起源は、昭和36年に北海道大学体育会委員長となった阿竹宗彦氏が、セミプロ化しつつある学生スポーツ界へのアピールとして、是非とも「学生自身の運営する総合体育大会」が必要と考え、これまで各クラブで個別に行われていた七帝戦を総合化した「国立七大学総合体育大会」の開催を提唱したそうです。

はじめは、賛同を得られるものではありませんでしたが、北大が掲げる大会の意義や目的、効果、必要性が認められ、その年の9月に東京大学で開かれた委員長会議において第1回大会の開催が決定されました。

今回の平成18年の大阪大会で、第45回目を迎えます。

競技種目

競技種目は、冬季2種目、春季2種目、夏季34種目の計38種目で約6,000人が参加します。

冬季2種目は、アイスホッケーとスキーで昨年の12月から今年の1月にかけて、春季2種目は、航空と馬術で3月3日から22日にかけて行われました。

夏季34種目は、7月初旬から約2ヶ月間かけて実施されます。

結果については、七帝戦ホームページ <http://www.7-u.jp> でお知らせします。

■冬季競技結果

【スキー】

- 1位 阪大
- 2位 東大
- 3位 京大
- 4位 名大
- 5位 九大

【アイスホッケー】

- 1位 北大
- 2位 九大
- 3位 東北大
- 4位 東大
- 5位 名大

- 6位 京大
- 7位 阪大



開会にあたりエールを送る応援団

■春季競技結果

【航空の部】

- 1位 名大
- 2位 九大
- 3位 東北大
- 4位 阪大
- 5位 京大
- 6位 北大
- 7位 東大

【馬術の部】

- 1位 九大
- 2位 東北大
- 3位 京大
- 4位 名大
- 5位 北大
- 6位 東大

■夏季競技種目

番号	競技種目	番号	競技種目
1	空手道	18	卓球（女）
2	弓道（男）	19	軟式テニス（女）
3	弓道（女）	20	軟式テニス（女）
4	剣道（男）	21	バスケットボール（男）
5	剣道（女）	22	バスケットボール（女）
6	硬式テニス（男）	23	バドミントン（男）
7	硬式テニス（女）	24	バドミントン（女）
8	硬式野球	25	バレーボール（男）
9	ゴルフ	26	バレーボール（女）
10	自動車	27	ハンドボール
11	柔道	28	フェンシング
12	少林寺拳法	29	ラクロス（男）
13	準硬式野球	30	ラクロス（女）
14	水泳（男）	31	陸上競技（男）
15	水泳（女）	32	陸上競技（女）
16	体操	33	洋弓
17	卓球（男）	34	ヨット



馬術の部（3月3～4日開催）

開会式

開会式は、7月15日(土)に吹田キャンパスコンベンションセンターで行います。今年はビデオレターを作成したり、と少し趣向を凝らした開会式にします。開会式全部は無理かもしれませんが、一部は七大戦公式ホームページから映像配信したいと考えています。学内では柔道、少林寺拳法、空手道、剣道、バスケットボール（男女）、ハンドボール、フェンシング、弓道（男女）、卓球（男女）が行われる予定です。学内の会場には掲示を出しますのでご注目ください。

大会運営

クラブ員を啓発することが一番大事なことです。「七大戦という総合体育大会が開催されるから、ソフトテニスや、硬式野球などといった競技が実施される」という考え方は大きな誤りです。七大戦は各競技が個々に実施してきた大学対抗戦を総合化したものです。「様々な競技が主体的に七大学で競技を実施するから、総合体育大会としての七大戦がある」のです。競技に参加する選手全体が「自分たちで自分たちの競技をつくっていくんだ」という意識を持ってもらいたい。主役はその競技の学生なのです。そういう点で我々と意識のギャップがあり、参加学生への啓発が必要です。

たむら・ゆういち

工学部4年生。ライフル射撃部所属。

2006年にはサッカーのワールドカップ、近畿地区全域では、インターハイ、そして秋には兵庫国体が開催されます。それらに負けないような熱気あふれる大会にし、総合優勝を目指したいと思っています。

七大戦ギャラリー

七大戦のことをもっとたくさんの人に知ってもらおうと豊中キャンパス新学生交流棟に「七大戦ギャラリー」を設置しようと準備をすすめています。参加校の紹介、七大戦の歴史、優勝トロフィーなどを展示したいと考えています。気軽にぜひ一度お立ち寄りください。

今後の活動

運営面ではホームページ上での大会結果の迅速な公表に努め、企画面ではタオル、Tシャツなどのグッズの販売を行います。また、生協では「七大戦応援企画」として「七大学メニュー」を4月、7月に食堂で展開しています。ぜひご注目ください。



航空の部（3月13～22日開催）

第45回全国七大学総合体育大会事務局
(大阪大学体育会内)

TEL/FAX 06-6855-1000



大阪大会のロゴ

七大戦マスコットの名前は、「ヘブたん」。「7」を意味するギリシャ語の接頭語「hepta」をもじって命名。モチーフにしているのは豊中キャンパスから発掘され阪大のキャラクターとしてよく題材にされる「マチカネワニ」。口の部分が「7」になっている。

デザイナーは工学部応用理工学科の仲田佳弘さん。

プロフィール

平成18年度入学式挙行

平成18年度入学式が、4月6日（木）午前10時から吹田地区体育館において挙行されました。

開式に先立ち、本学交響楽団によりワーグナー作曲「ニールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」が演奏された後、新入生2721名を代表して、人間科学部の神野夕希^{じんの ゆき}さんが宣誓を行いました。

続いて、宮原秀夫総長の告辞、学部長等の紹介の後、入学を祝して本学混声合唱団が「大阪大学学生歌」を、男声合唱団がシュトゥンツ作曲「フライエクスト」をそれぞれ合唱し、閉式となりました。

引き続き、同会場においてオリエンテーションが行われ、学生生活全般についての説明の後、本学応援団により新入生歓迎エールがあり、全日程を終了しました。

なお、保護者の方々はコンベンションセンターと仮設テントを会場として、体育館からの映像の配信により、入学式の様子をご覧いただきました。

当日は天候にも恵まれ、約2500名の保護者の方々の出席があり、全日程終了まで熱心にご覧いただきました。

入学式における総長告辞は39～41ページに掲載。

（総務部総務課）



「阪大坂」を全面リニューアル



「うろこ張り」に敷かれた歩道が約250m続きます



銘板「大阪大学」と
「地域に生き世界に伸びる」



石橋門へ続く桜並木

豊中キャンパス石橋門に上る通称「阪大坂」が全面的に改修され、さる3月24日（金）銘板除幕式・通り初め式が行われました。

当日は、宮原秀夫総長による銘板除幕式の後、学内関係者と地元代表の方々、学生代表によるテープカットが行われ、新たに修景された阪大坂の開通を祝いました。

今回のリニューアルでは、待兼山の豊かな「里山環境」と貴重な「歴史文化遺産」の雰囲気・ポテンシャルを最大限に活かしながら、大学の玄関口にふさわしい美しさと親しみを持ったデザインに修景されました。

また、四季の変化を感じることでできる植栽を目指し、広場には大学のシンボルツリーとなるべくイチョウが植えられ、沿道沿いには、春の入学・新学期の時期に華やかさを与える桜並木、その他コブシ・サンシュユなど季節の花木が植えられており、花と緑あふれるアプローチガーデンが形成されています。

（施設部整備課）



宮原総長と地元代表の方々によるテープカット

第11回 企業等と研究懇話会開催

第11回大阪大学研究懇話会
が去る3月7日(火)、医学部銀
杏会館で開催されました。

この研究懇話会は、企業等
に本学における研究活動の情
報を提供するとともに、企業
が求める人材あるいは共同研
究など大学に対する要望など
幅広く意見交換することを目的に年に一度、開催されてい
ます。

当日は、関西の企業等の研究開発担当役員及び本学の部
局長等、総勢70名以上の人が集まり、『特別教育研究経費
による研究プロジェクトと産学連携』というテーマのもと、
プロジェクトを推進する研究代表者から「感染症対策研究
における微生物病研究所の果たす役割」、「附置研究所間連
携事業（新産業創造物質基盤技術研究センター）」、「膜蛋
白質研究国際フロンティアとその社会的インパクト」、「全



開会の挨拶をする宮原総長



懇話会中の様子

国共同利用附置研究所連携事業（金属ガラス・無機材料接
合技術開発拠点）」についてそれぞれ話題提供が行われ、
今後の大学運営等、産学連携及び協力の推進について、参
加された企業等の方と活発な意見交換が行われました。

（研究推進・国際部研究推進課）

平成17年度大阪大学外国人留学生修了パーティー開催

平成17年度本学外国人留学生修了パーティーが3月16
日(木)に千里阪急ホテル仙寿の間で開催されました。

この修了パーティーは、3月に本学を修了する予定の外
国人留学生とその家族を総長が招待し、祝賀・懇親の場と
するもので、毎年開催されています。



留学生との記念撮影に応じる宮原総長（中央）

当日は、本学教職員の他、来賓として留学生奨学団体、
留学生支援団体、修了者のホストファミリー、ボランティ
ア家主の方々を含め、約450名が出席する盛大なものとな
りました。

宮原秀夫総長による祝辞の後、橋本日出男理事の発声に
より乾杯が行われ、各テーブルには賑やかな懇談の輪が広
がりました。

乾杯後、留学生の代表として、基礎工学部4年生 チョ
イ・コー・イーさん、大学院国際公共政策研究科博士前期
課程2年生 ソウ・ヒンさん、大学院文学研究科博士後期
課程3年生 コウ・ジョヘイさんがこれまでの留学生生活
を振り返るとともに、関係者への感謝の気持ちを流暢な日
本語で述べられました。

懇談中、留学生それぞれが共に学んだ友人達やお世話に
なった先生方と名残りを惜しむなか、辻 毅一郎留学生セ
ンター長からお祝いの言葉があり、終始和やかな雰囲気
のうちに散会となりました。

（研究推進・国際部学生交流推進課）

大学院理学研究科生物科学専攻 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 学習コミュニティ・ワークショップ(大学院生がみずから学ぶ組織作り) 開講

大学院の教育研究機能強化を目的とした「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業に平成17年度より採択された「学習コミュニティを基盤とした大学院教育」プログラム(大学院理学研究科生物科学専攻)のオープニング企画として学習コミュニティ・ワークショップが12月26日(月)に理学部D棟4階講義室で行われました。

この教育プログラムは、従来の「教える」教育から「自ら学習する能動的な」教育システムへのパラダイムシフトを目指しており、「学習コミュニティ」というユニークな発想のもと、大阪大学の始まりとなった適塾を21世紀に蘇らせる試みです。異なる分野の院生5～6人からなるユニットを学習コミュニティの基本形とします。講師の教授、演出家、女優等のナビゲーターに始まったセッションでは学生達の笑顔や笑い声があり和やかな雰囲気で行われました。

また、その後の学習コミュニティ・ユニット毎に行なわれたグループワークでは初対面とは思えないくらい議論が盛り上がり、学生達の議論の大きな声が会場のあちこちに響き渡っていました。学生達はコミュニケーションをとるうえで普段とはまったく異なった努力を強いられる、ある意味「負荷」を日常的に経験していくことで、狭い専門分



平田オリザ氏(コミュニケーションデザイン・センター教授)を講師に招いての学習コミュニティ・ワークショップ

野でしか通用しないタコツボ思考から脱却し、自然に高いコミュニケーション能力を身につけていく姿がワークショップで垣間見られました。

このプログラムに関する詳細は、ホームページ(<http://www.bio.sci.osaka-u.ac.jp/index.html>)に掲載されています。

(大学院理学研究科・理学部)

特別講演会(産学連携・英語科学論文作成)を実施

大学院医学系研究科保健学専攻では、研究支援委員会の活動の一環として、特別講演会を実施いたしました。

参加した教職員・学生は熱心に聴講し、大変有意義な講演会となりました。

まず1月12日(水)に、大阪大学知的財産本部藤澤幸夫



講演する廣岡助教授

特任教授による「大阪大学知財本部の活動と業務」と題するご講演をいただきました。

この講演会は、特許、ベンチャー等産学連携の知識を普及し、産学連携による研究成果の実用化、外部資金獲得の方法についての知識を教授することを目的としたものです。藤澤特任教授から他大学等の事例を交え、本学の産学官連携活動の取り組み、特許等の仕組みについて講演が行われました。

1月27日(金)には、科学英語の分野で顕著な活躍をされている自然科学研究機構核融合科学研究所の廣岡慶彦助教授による「英語科学論文の書き方の基礎知識」と題するご講演をいただきました。この講演会は、若手研究者の英語による論文作成に対するモチベーションを高め、実際に論文を作成する際に必要な知識を獲得させることを目的としたものです。廣岡助教授の15年間にわたる米国での体験をもとに英語を随所に折りまぜ、英語科学論文執筆の心構え及び書き方の基礎知識について講演が行われました。

(大学院医学系研究科・医学部)

「生涯生活設計セミナー」(退職準備セミナー)開催

去る2月7日(火)文部科学省共済組合・大阪大学主催、大阪教育大学・大阪外国語大学・和歌山大学・国立民族学博物館・和歌山工業高等専門学校共催による平成17年度「生涯生活設計セミナー」がコンベンションセンターで開催されました。

このセミナーは、定年退職を間近に控えた国立学校等の教職員並びにその配偶者を対象に行われたもので、教職員の退職に当たっての心構えや退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基礎づくりに役立ててもらうことをねらいと



して開催されたもので、今年度は125名の参加者があり、退職後の生活について関心の高さをうかがわせました。

当日、本学北見耕一理事・事務局長の開会挨拶の後、退職後の生活設計を見つめる観点から、以下のプログラムで進められ、充実した内容の講義が行われました。

- ・「退職後の生活設計等について」
(木曾教育研究所 山田主任研究員)
- ・「退職共済年金等について」
(国家公務員共済組合連合会年金部給付第二課 高橋課長代理)
- ・「退職後の所得税の知識について」
(吹田税務署個人課税第一部門 岩本上席国税調査官)
- ・「退職後の医療保険制度について」
(本学財務部資金管理課 檜共済組合係長)
- ・「大学元職員による退職後の体験談」
(元大阪大学職員 平ノ上昭夫)

(総務部人事課)

コミュニケーションデザイン・センター イタリア国ボローニャ大学ベルティノーロ研究センターと学術交流協定を締結

コミュニケーションデザイン・センターは、2月22日(水)にイタリア国ボローニャ大学ベルティノーロ研究センター(CeUB Centro Residenziale dell'Università di Bologna a Bertinoro)とイタリア・ボローニャ市にあるボローニャ大学において学術交流協定を締結しました。

ボローニャ大学は、創立が1088年の世界最古の大学といわれ、現在23の学部と教職員数約5,600人、学生数約110,000人を擁するヨーロッパ屈指の大学であり、世界各国の大学とも活発な交流を進めています。

協定当日は、Facoltà di Scienze Matematiche, Fisiche e Naturaliを会場として、本学から中岡成文コミュニケーションデザイン・センター長及び藤田治彦教授の2名が、ボローニャ大学からはPaolo Pupilloベルティノーロ研究センター長及びRaffaele Milani教授らが出席し調印を交わしました。調印後、今後の両センター間の教育・学術研究交流及び学生交流等について意見交換を行いました。

今回の協定の内容は、研究者の交流、情報交換等に関する事項のみならず、コミュニケーションデザイン・センターが平成18年度に開講する授業科目の一つ、「アート・プロジェクト入門」の一部として9月に実施予定のイタリア・デザイン・サマースクール:芸術・社会・産業(Italian Design Summer School: Art, Society and Industry, 実施会場: Istituto di Studi Avanzati, Scuola Superiore di Progettazione e Disegno Industriale)に関する内容も含んだものです。

また、今回のボローニャ大学訪問に併せて、前日の21



協定締結

左から、Raffaele Milani教授、Paolo Pupilloセンター長、Dr.Barbara Cimatti、中岡センター長、藤田教授

日(火)にFacoltà di Ingegneriaにおいてワークショップ Tradition and Innovation : a Comparison between Italian and Japanese Designが開催され、藤田教授がDesign Identity of Japanと題する講演を行いました。さらに22日(水)の午後には、Facoltà di Lettere e Filosofiaにおいて中岡センター長がNISHIDA Kitaro or Invention of Boundaries - Kyoto-School Philosophers Confronting Western Modernityと題する講演を行い、その後Residenza di Studi Superioriにおいて藤田教授がDesign Theory and History of Modern Japanと題する講演を行い、いずれの講演も多数の参加者があり活発な議論が交わされました。

(コミュニケーションデザイン・センター)

医学部保健学科が高度医療教育フォーラムを開催

3月4日(土)、大阪市中央公会堂において、高度医療教育フォーラム「医療とマネジメント：求められる医療経営とは」が、医療関係者や一般の方約540名の参加者を得て開催されました。

医学部保健学科では、経済産業省が助成する医療経営人材育成事業に採択されたため、大阪大学を代表団体とする、



高度医療教育コンソーシアムを編成いたしました。

本コンソーシアムは、日本医師会をはじめとする主要医療団体(8団体)からなり、各医療職種のマネジメント教育カリキュラムの開発研究を通して、医療経営に携わる医療職を育成するプロジェクトです。今回のフォーラムは、現状の医療環境や高齢化に向けた将来の医療提供体制の在り方などについて包括的に論議することを目的として、日本医師会から寺岡暉、櫻井秀也の両副会長、坂口 力元厚生労働大臣、経済財政諮問会議メンバーである吉川 洋東京大学大学院教授、梶本 章朝日新聞論説委員などに参加していただきました。

フォーラムでは、「医療体制と医療マネジメント」、「医療経営における医療専門職の役割」、「医療制度と医療マネジメント」の3つのセッションが行われ、講演者の意見・提言等活発な議論が展開される中、盛会裡に終了いたしました。

(大学院医学系研究科・医学部)

「IT分野-大学マッチングカンファレンス大阪」開催

「大学コンソーシアム大阪」の「関西経済界・大学間交流専門部会(部会長は宮原秀夫総長)」と、経済産業省が推進する産業クラスター計画である「情報系クラスター振興プロ



宮原総長の挨拶

ジェクト」の推進機関である「関西IT共同体」が協力し、大学と産業界との結びつきを一層深め、産学連携活動が一層飛躍することを狙いとして、「IT分野-大学マッチングカンファレンス大阪」が、3月9日(木)に大阪科学技術センターで開催されました。

主催者を代表して宮原総長が挨拶された後、シャープ株式会社三坂重雄常任顧問が「シャープのモノづくりと産学連携」と題した基調講演をされました。

8大学46研究室がブースを構え、ポスターとデモによる展示を行い、各ブースでは教員、学生が来場者に熱心に説明をしていました。

大阪大学からはIT分野ということもあり、情報科学研究科が中心となり、サイバーメディアセンター、産業科学研究科などの協力講座、連携講座、及び工学研究科の協力を

得て、最多の11研究室が出展しました。また、各大学の産学連携窓口のブースも設けられ、先端科学イノベーションセンターからも出展いただきました。

参加者は来場者、出展関係者を含め約400名であり、各大学単独の産学連携展示会はあるものの、「大学コンソーシアム大阪」傘下の大学が一堂に会する展示会は初めての試みであり、学学連携の場でもありました。大学で育まれた技術シーズが、産業界と上手くマッチングされて広く社会に出ることにより、関西発の産業活性化に役立つことができればと願っています。

(大学院情報科学研究科)



展示ブースの様子

「平成17年度大阪大学大学院基礎工学研究科博士学位取得者お祝いの会」開催

大学院基礎工学研究科では、3月9日(木)、豊中キャンパス生協4階食堂において、「平成17年度大阪大学大学院基礎工学研究科博士学位取得者お祝いの会」を開催しました。



この会は、博士学位取得者・教員・博士後期課程学生が集まり、学位取得をお祝いするとともに基礎工内の交流を活発にすることを目的として、平成15年度より開催されています。立食パーティ形式で、学位取得者には会場周囲に博士論文の内容をポスターで紹介していただき、参加者が自由に議論や交流を行う会としました。38名の学位取得者による発表があり、西田正吾大学院基礎工学研究科長はじめ、教員・学生あわせて約100名の参加者がありました。

研究科長による祝辞、乾杯の後は自由な歓談の時間としましたが、ポスターを前に議論する風景も見られ、盛況のうちに閉会しました。アンケートにも「有意義であった」「来年も参加したい」などの声が寄せられました。大学院基礎工学研究科では、来年度も同様の会を予定しております。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

「第1回基礎工学研究科 Σ学生フォーラム」開催

大学院基礎工学研究科では、3月9日(木)、10日(金)の2日間にわたり、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ企画運営委員会・「特色ある大学院教育支援プログラム(特色GP)」企画担当室・「博士お祝いの会」委員会の合同で、『第1回基礎工学研究科 Σ学生フォーラム』を開催しました。

1日目は、「基礎工学研究科：大学院教育の最先端を目指して」と題して、午前と午後の2部に分けて行いました。

午前の部は、鷲田清一理事・副学長、西田正吾大学院基礎工学研究科長の挨拶に始まり、各先生方の大学院教育に関する最先端の取り組み、また外部よりお招きした奥井隆雄氏に「博士の生き方～充実した人生を歩むために～」と題して講演いただきました。奥井氏は民間企業に勤めながら「博士の生き方」というホームページを開設されています。大学院生としても興味ある話題で、会場は満席の状態でした。

午後の部は、一転してイニシアティブRAの学生たちが、



自分たちの研究を他分野の人たちにも分かりやすく伝えるようにプレゼンテーションを行い、活発な質疑応答が繰り広げられました。

2日目は、「学生による学生のためのΣグランドデザイン」と題して、基礎工RA学生・イニシアティブRA学生・イニシアティブTA学生による、研究室・分野を越えたグループ討論が行われ、予想以上に討論が盛り上がりました。例えば、違う研究をしていますが基本的な考え方は同じであったり、また、同じ結果を求めることであってもそのためのアプローチの方法が違っていたりと、学生たちにとって新たな刺激となったようです。

今回のフォーラムは、基礎工学研究科ならではの良さが発揮でき、2日間で延べ150名余りの参加者を数えました。学生たちからも、今後もこのような活発な意見交換の場を提供してほしいという声が上がっていました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

大学院理学研究科附属原子核実験施設50周年記念事業開催

昭和30年に発足した大学院理学研究科附属原子核実験施設は、3月11日(土)に50周年記念講演会を開催しました。発足の地、中之島の大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールで行われた記念講演会には、67名の原子核実験施設ゆかりの参加者がいました。阪大の原子核実験施設出身で前放射線医学研究所長の平尾泰男先生による講演「阪大にサイクロトロンが出来た頃」では、米軍によるサイクロトロンの爆破やその後の再建の映像が紹介されるなど、原子核実験施設ができたころの興味深いお話がありました。他に初期の研究と現在から将来への展望の講演が行われました。阪大の原子核研究の歴史とその成果を知る機会となるとともに将来へ向けての展望を見る講演会でした。引き続き行われた懇親会では旧交を温め合い、世代を

超えて研究の将来を語り、盛会裡に終了しました。

(大学院理学研究科・理学部)



平尾先生の講演風景。映像は中之島時代の理学部

コミュニケーションデザイン・センター 『round.1「CAFE BATTLE／カフェバトル」』開催

コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)は、3月20日(月)に阪急梅田駅コンコース内コミュニケーションスペース(通称：ビッグマン前)において、オムニバス式対談イベント「コミュニケーションデザインプロジェクト round.1 [CAFE BATTLE／カフェバトル]」を開催しました。

この行事は、コミュニケーションデザイン・センターのオープニングイベントの一環として開催されたものであり、大学が「まち」のオープンスペースに出て行う行事としては初の試みです。

これは、学外への情報発信の一方法として有効であるだけでなく、公共空間の活用法の提案、市民を巻き込んだ対話プログラムの実証実験として今後のセンターの活動展開の重要な一歩となるものです。

当日は、14時から20時までの6時間に亘り「コミュニケーションデザイン」をメインテーマに、中岡成文センター長と八木絵香特任講師の司会により、コミュニケーションデザイン・センターの教員(1名ゲストを含む)たちがオムニバス方式により異種格闘技でユニークなトークバトル(トーク対決)を披露しました。

実施されたプログラムは、次のとおり。

「デザインは都市を解決するか？」

藤田治彦(環境芸術学) vs 久保田徹(メディアデザイン)
「コミュニケーション・ショック」

池田光穂(医療人類学) vs 西川 勝(看護と臨床哲学)
「身体の発する声」

志賀玲子(舞台芸術企画制作) vs 西村ユミ(看護学)

「群れの風景、場所の記憶」

渥美公秀(グループダイナミクス) vs 花村周寛(ランドスケープアーキテクチャ)

「実験・アジア・しろうと」

本間直樹(臨床哲学) vs 中川 真(都市環境学・大阪市立大学)

「アートの仮説と科学の提案」

小林傳司(科学哲学／科学技術論) vs 木ノ下智恵子(アートプロデュース)

当日は平日でしたが、駅コンコース内で且つ紀伊国屋前の待ち合わせ場所というロケーションの良さが加わって、多数の一般の方々の参加があり質疑応答も活発に行われて盛況な催しとなりました。

(コミュニケーションデザイン・センター)



CSCDのテーマカラーであるオレンジをベースにしたイベント会場はCSCD教員の手でデザインされた。毎日100万人が行き来するこの場所とは対照的に、カフェのようなくつろげる居場所を設けることでゆったりとした時間の演出を狙う。

退職教授との懇談会開催

総長主催による平成 17 年度退職教授との懇談会が 3 月 28 日（火）午後 5 時 45 分から、銀杏会館で開催されました。

この懇談会は、本学を退職または転出される教授の方々の永年の尽力に感謝するとともに、惜別の意を表すために開催され、今回は対象となる 45 名のうち、13 名の方々が出席されました。



謝辞を述べる若山教授

はじめに、宮原秀夫総長の挨拶のあと、退職教授を代表して文学研究科の若山映子教授から謝辞が述べられました。

引き続き、橋本日出男理事の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

（総務部総務課）



宮原総長の挨拶

事務系職員退職者送別会開催

平成 17 年度事務系職員退職者送別会が 3 月 29 日（水）午後 5 時 30 分から、医学部銀杏会館 3 階大会議室で行われました。

この催しは、本学を退職及び異動される事務系職員の方々の在職中のご尽力に感謝するとともに、惜別の意を表するため毎年開催されているもので、退職される 10 名を含む 66 名の出席がありました。

はじめに、北見耕一理事・事務局長から挨拶があり、続いて退職者及び異動者全員から挨拶がありました。

引き続き、鳥越定雄総務部長の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

（総務部総務課）



退職挨拶をする鳥家大永言語文化研究科事務長

AED（自動体外式除細動器）の設置

スポーツ中に突然倒れ、そのまま亡くなってしまうというニュースをお聞きになったことがあると思いますが、その原因の多くは心室細動（致死的不整脈）という心臓の病気で、国内だけでも年間5万人にのぼる心臓突然死です。心臓突然死は、スポーツ中だけでなく、駅、空港、職場など場所を選ばず発生しており、われわれにも身近な問題となっています。

心室細動という病気で倒れた人を救うためには、救急車が到着するまでの間に1分でも早く、心肺蘇生（気道の確保、人工呼吸、心臓マッサージ）を行うとともに、AED（自動体外式除細動器）という装置で電気ショックを与え、心臓を正常な状態に戻すことが重要になります。



AED 本体

臓を正常な状態に戻すことが重要になります。

AED は、医療従事者以外の一般市民でも使用することが認められており、操作も非常に簡単です。音声ガイダンスに従っ



工学部の設置

て、電極パッドを傷病者の胸部へ貼るだけで、電気ショック（除細動）が必要かどうかを解析し、必要な場合にだけ電気ショックが行われる仕組みになっています。

このため、近年、駅や空港などの公共施設でも設置が進んでおり、本学においても、事業場安全衛生委員会等で検討した結果、順次各部局に設置していくこととなりました。平成17年度は22台の設置が完了し、平成18年度は約20台設置する予定にしております。

AED 設置場所一覧

キャンパス	設置部局等	設置場所
豊中	附属図書館（本館）	A棟2階玄関ホール
	文学部	玄関ロビー
	理学部	A棟1階正面玄関ホール 公衆電話付近
	基礎工学部	C棟1階エレベータ横
	大学教育実践センター	共通教育管理講義棟1階玄関ホール
	健康体育研究棟	1階玄関ホール
	保健センター（豊中）	1階玄関ホール
	学生交流棟（学生部）	1階レストラン「宙」入口
	第1体育館（学生部）	2階体育室入口
吹田	附属図書館（吹田分館）	旧館1階玄関ホール
	附属図書館（生命科学分館）	1階玄関ホール
	人間科学部	本館1階玄関ホール
	医学部（医学科）	研究棟L階受付
	医学部（保健学科）	2階事務室前通路
	薬学部	玄関ホール
	工学部	工学部管理棟1階守衛室付近（U1M）
	産業科学研究所	管理棟玄関ロビー
	蛋白質研究所	本館1階玄関ホール
	保健センター（吹田）	1階玄関ホール
	医学部附属病院	守衛室内
	歯学部附属病院	D棟1階玄関ホール
	事務局	1階玄関ホール

（安全衛生管理部・保健センター）

平成18年度入学者選抜個別学力検査等実施

平成18年度個別学力検査等の志願者数及び志願倍率は、表に示すとおり前期日程5,585名（2.8倍）、後期日程3,874名（7.8倍）で前年度と比して前期日程280名減、後期日程274名の増で、両日程を合わせると6名の減となりました。

2月14日（火）に第1段階選抜の合格者発表が行われ、前期日程の理学部で6名、後期日程の理学部で6名、医学部医学科で36名、合計48名が不合格となりました。

前期日程試験は、2月25日（土）及び26日（日）に行われ、5,468名が受験し欠席率は全体で2.1%（昨年1.8%）

でした。合格者発表は、3月7日（火）に行われ、合格者数は2,194名（昨年2,175名）でした。

続いて、後期日程試験が3月13日（月）及び14日（火）に行われ、2,004名が受験し欠席率は全体で48.3%（昨年47.0%）でした。合格者発表は、3月22日（水）に行われ、合格者数は519名（昨年540名）でした。

両日程合わせた合格者数は2,713名で昨年と比べて2名減でした。

平成18年度大阪大学入学者選抜試験（前期日程）合格者数等

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文 学 部	人文学科	125	490	3.9倍	482	137
人間科学部	人間科学科	105	287	2.7倍	282	113
法 学 部	法学科	145	396	2.7倍	393	153
経 済 学 部	経済・経営学科	185	609	3.3倍	594	206
理 学 部	数学科	38	77	2.0倍	74	41
	物理学科	58	146	2.5倍	144	62
	化学科	60	148	2.5倍	147	64
	生物科学科	20	67	3.4倍	65	24
	理学部 計	176	438	2.5倍	430	191
医 学 部	医学科	75	234	3.1倍	225	75
	保健学専攻	60	101	1.7倍	99	66
	放射線技術科学専攻	30	63	2.1倍	62	34
	検査技術科学専攻	30	50	1.7倍	48	36
	医学部 計	195	448	2.3倍	434	211
歯 学 部	歯学科	54	156	2.9倍	149	56
薬 学 部	薬学科	20	115	5.8倍	111	21
	薬科学科	50	185	3.7倍	182	54
	薬学部 計	70	300	4.3倍	293	75
工 学 部	応用自然科学科	173	400	2.3倍	394	187
	応用理工学科	198	506	2.6倍	499	214
	電子情報工学科	129	294	2.3倍	287	140
	環境・エネルギー工学科	60	135	2.3倍	133	69
	地球総合工学科	94	235	2.5倍	233	104
	工学部 計	654	1,570	2.4倍	1,546	714
基礎工学部	電子物理科学科	74	195	2.6倍	194	76
	化学応用科学科	63	199	3.2倍	192	66
	システム科学科	127	336	2.6倍	324	131
	情報科学科	50	161	3.2倍	155	65
	基礎工学部 計	314	891	2.8倍	865	338
合 計		2,023	5,585	2.8倍	5,468	2,194

平成 18 年度大阪大学入学者選抜試験（後期日程）合格者数等

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数	
文 学 部	人文学科	40	298	7.5倍	190	44	
人間科学部	人間科学科	25	175	7.0倍	109	28	
法 学 部	法学科	25	284	11.4倍	158	28	
経 済 学 部	経済・経営学科	35	337	9.6倍	153	35	
理 学 部	数学科	9	51	5.7倍	18	10	
	物理学科	18	120	6.7倍	67	19	
	化学科	17	126	7.4倍	72	18	
	生物学科	5	52	10.4倍	38	6	
	理学部 計	49	349	7.1倍	195	53	
医 学 部	医学科	15	129	8.6倍	50	17	
	保健 学 科	看護学専攻	18	54	3.0倍	19	17
		専門高校卒業生選抜(看護学専攻)	2	0	0.0倍	0	0
		放射線技術科学専攻	10	40	4.0倍	14	10
		検査技術科学専攻	10	30	3.0倍	11	9
	医学部 計	55	253	4.6倍	94	53	
歯 学 部	歯学科	6	76	12.7倍	41	6	
薬 学 部	薬学科	5	60	12.0倍	36	5	
	薬科学科	5	67	13.4倍	39	5	
	薬学部 計	10	127	12.7倍	75	10	
工 学 部	応用自然科学科	44	361	8.2倍	186	44	
	応用理工学科	50	432	8.6倍	235	55	
	電子情報工学科	33	251	7.6倍	143	34	
	環境・エネルギー工学科	15	118	7.9倍	51	15	
	地球総合工学科	24	207	8.6倍	117	27	
	工学部 計	166	1,369	8.2倍	732	175	
基礎工学部	電子物理科学科	20	140	7.0倍	58	21	
	化学応用科学科	17	140	8.2倍	54	18	
	システム科学科	34	212	6.2倍	91	34	
	情報科学科	14	114	8.1倍	54	14	
	基礎工学部 計	85	606	7.1倍	257	87	
合 計		496	3,874	7.8倍	2,004	519	

注：① 理学部、工学部、基礎工学部は、第 1 志望学科の志願者数である。

② 複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

③ （ ）内は、女子を内数で示す。

（学生部入試課）

平成17年度卒業式式辞

本日、大阪大学を卒業される2,752名の皆さん、おめでとうございます。ご家族の皆様、ご関係の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

今日科学技術の成果は、ただちにさまざまな商品やサービスとして、浸透するようになっています。つまり科学技術は、社会生活や産業・経済と深く関わるようになっているのです。また、科学技術の規模はますます拡大し、多くの専門分野が複雑にからみ合っています。あらゆる分野の業務は、最先端の科学技術とも何らかの関係を持っていて、将来を予測することはたいへん難しくなっています。しかし、大阪大学を卒業される皆さんには、そのような状況の中で、今後の日本を背負い、リーダーとして、その持てる力を存分に発揮していくことが期待されています。

そのためには、どのような能力が必要か、そのことについて、お話ししたいと思います。仕事をする能力を「仕事力」と呼ぶとすれば、仕事力は「知識力」と「人間力」に分けられます。「知識力」は仕事をするのに必要な知識や実務能力のことです。これについては、皆さんは、その基礎をじゅうぶんに身に付けてこられたことと思います。

もうひとつの能力である「人間力」とは、どのようなものでしょうか。まずは、社会的な行動能力、つまり積極的に行動ができて、仲間と協調することができる能力を意味します。次にあげるべきは、自己啓発能力です。常に好奇心を持って、自ら学習する能力のことです。その結果は、「教養」という形で身に付くものです。3番目は、物事を判断する力、つまり論理的、大局的な判断や、ものごとの良し悪しを見分ける能力です。最後に、4番目は、立場の異なる人、文化的背景の異なる人と、意思疎通を行うコミュニケーション能力です。

これらの基本的な能力が組み合わさって、人間力がいろいろな形で形成されていくのですが、本日は、そのひとつとして大切な、「デザイン力」について、お話ししておきたいと思います。一般に、デザインというと、建築、服飾、グラフィックスなどを想像されるでしょう。しかし、大阪大学が教育目標のひとつとして掲げているデザイン力とは、「広くものごとを構想する力」を意味します。つまり異なる分野、異なる知識を編集して、新しい知識の領域や社会を創出するイマジネーションのことを指します。

もちろん、イマジネーションと言っても、単にものを感じ覚的に作ればいいということではありません。しっかりした問題意識をまず持って、次に関係する情報を幅広く活用しながら、論理的に概念を組み立てることを意味します。そのために必要なこと、それは論理的思考力であり、広い視野に立つ確かな社会的識見です。これはコモンセンス、つまり、一市民としての的確な感覚と判断力ということなのです。もちろん「デザイン力」には、「グッド・センス」



という言葉で表現される美的感受性も含まれます。

現在、加速度的に発展しつつある科学技術は、その社会的影響力が極めて大きくなっています。環境汚染や天然資源の枯渇問題から、遺伝子治療や再生医療など、生命の機能に関する問題まで、科学技術の最前線で起こりつつある問題は、ことごとく我々の生命と、安全に深く関わっています。重要なことは、それらを理解するには、高度な専門知識を必要とするということです。専門外の一般市民は、自らの生命と安全に深くかかわる問題でありながら、そのような問題が起こる仕組みを理解したり、解決したりするのが難しいのです。そこで、専門家と一般市民が、コミュニケーションをとりながら、一緒に解決していくことが必要になります。

つまり、文化的背景が異なったり、時には利害が対立したりする関係者が、複雑な問題を協力して解決していこうとする時にこそ、デザイン力が必要になるのです。皆さんは、自らがそれぞれの分野の専門家として、あるいは関係する一市民として、このような状況に直面することが必ずあると思います。そのために、コミュニケーションを構築することによって互いに理解し、解決策を構想することのできるデザイン力を、是非、身につけていただきたいと思います。皆さんは、大阪大学で学んだ経験を生かして、人類を幸福に導くよう、社会的責任を果たしていく義務があるのです。

社会に出て、仕事をするために必要な力について、お話ししましたが、具体的なことは、実際に、今、仕事をしている方の話を直接聞くことがいちばんだと思います。そこで、初めての試みとして、皆さんの先輩で、社会の第一線で活躍しておられる方に、直接お話をさせていただくことにしました。今回お願いした方は、榎原美樹さんです。榎原さんは1987年に本学の文学部を卒業され、NHKに入局されました。その後、ヨーロッパや中東の海外特派員として、また2000年4月から1年間は、NHKニュース10のメインキャスターとしても活躍されましたので、御存知の方も多いでしょう。その後も、海外の緊張する現場から直接カメラに向かってレポートされている映像を拝見するたびに、報道記者の仕事の難しさにもかかわらず、それを克服してい

榎原さんの努力に感服しておりました。本日は、勤務地のタイからわざわざお越しいただきました。ぜひ、榎原さんのお話から、皆さんの、これからの生き方に参考になる、何かをつかんでいただきたいと思います。

最後に、皆さんが、21世紀の社会で、人類の進歩と幸福に、貢献されることを願って、私のお祝いの言葉にかえさせていただきます。

平成17年度大学院学位記授与式式辞

本日、永年の研鑽と努力の結果、大阪大学大学院を修了される2,695名の皆さん、おめでとうございます。また、ご家族の皆様、ご関係の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

今日科学技術の成果は、ただちにさまざまな商品やサービスとして浸透するようになっていきます。つまり、科学技術は社会生活や産業・経済と、深く関わるようになっていきます。また、科学技術の規模はますます拡大し、多くの専門分野が複雑にからみ合っています。あらゆる分野の業務は、最先端の科学技術とも何らかの関係を持っています。将来を予測することはたいへん難しくなっています。しかし、大阪大学大学院を修了される皆さんには、そのような状況の中で、今後の日本を背負い、リーダーとして、その持てる力を存分に発揮していくことが期待されています。

そのためには、どのような能力が必要か、そのことについてお話ししたいと思います。仕事をする能力を「仕事力」と呼ぶとすれば、仕事力は「知識力」と「人間力」に分けられます。「知識力」は仕事をするのに必要な知識や実務能力のことです。これについては、皆さんは十分な能力をすでに身に付けてこられたことと思います。

もうひとつの能力である「人間力」とは、どのようなものでしょうか。まずは、社会的な行動能力つまり積極的に行動ができて、仲間と協調することができる能力を意味します。次にあげるべきは、自己啓発能力です。常に好奇心を持って、自ら学習する能力のことです。その結果は、「教養」という形で身に付くものです。3番目は、物事を判断する力、つまり論理的、大局的な判断力や、ものごとの良し悪しを見分ける能力です。最後に、4番目として立場の異なる人、文化的背景の異なる人と、意思疎通を行うコミュニケーション能力です。

これらの基本的な能力が組み合わさって、人間力がいろいろな形で形成されていくのですが、本日は、そのひとつとして大切な「倫理力」についてお話ししておきたいと思っています。倫理力の向上には、まずは、人間として善悪の感覚をしっかりと持つことが必要なのは言うまでもありません。しかし、単純な善悪の倫理観では済まない問題もたくさんあります。たとえば、自動車や家電などの、人工物の安全

問題です。人工物は設計時点では想定していなかったような使われ方をして、事故が起こったり被害を与えたりすることがあります。もちろん、安全に対する規制や基準は常に作られてきていますが、それを守るだけでは十分とは言えません。設計者は、「人間はミスを侵す」「想定外のことも起きる」ことを前提にして、事故を起こさないように対策をほどこす倫理的な責任があるのです。また、人工物の製造には、技術者だけでなく製造関係者や建設関係者など、多くの人が組織的に関わります。従って、安全倫理が組織レベルで守られる仕組みも必要です。専門家としての個人と組織が互いに働きかけながら、「安全」という文化をつくっていかねばならないのです。

もっと難しい問題もあります。科学技術が高度に進歩した結果、対策をほどこさないと取り返しがつかない問題も発生し得ます。生命科学のクローン技術は、そのような例のひとつです。再生医療は画期的な進歩の可能性がある一方、クローン人間が人類にとって解決困難な問題を引き起こす可能性も指摘されています。環境問題やエネルギー問題は、人類がこの地球上で永続的に生存できるかどうか、将来に、つけない残さないためにはどうすればよいのかという問題を提起しています。これらの問題を解決するには、広範な人たちが参加し議論して、市民や社会、さらには人類の幸福のためにどのようなルールが必要かという観点から倫理規定などのコンセンサスを作っていく必要があります。皆さんも専門家として、しっかりした専門知識、倫理観をもつだけでなく、人類や地球という幅広い視点を持って行動されることを期待しています。

社会に出て、仕事をするために必要な力についてお話ししましたが、具体的なことは、実際に今仕事をしている方の話を直接聞くことがいちばんだと思います。そこで、初めての試みとして、皆さんの先輩で、社会の第一線で活躍しておられる方に、直接お話をさせていただくことにしました。今回お願いした方は、榎原美樹さんです。榎原さんは、1987年に本学の文学部を卒業されNHKに入局されました。その後、ヨーロッパや中東の海外特派員として、また2000年4月から1年間は、NHKニュース10のメインキャスターとしても活躍されましたので、御存知の方も多いでしょう。その後も、海外の緊張する現場から直接カメラに向かってレポートされている映像を拝見するたびに報道記者の仕事の難しさにもかかわらず、それを克服している榎原さんの努力に感服しておりました。本日は、勤務地のタイからわざわざお越しいただきました。ぜひ榎原さんのお話から、皆さんのこれからの生き方に参考になる、何かをつかんでいただきたいと思います。

最後に、皆さんが21世紀の社会で、人類の平和と幸福に貢献されることを願って、私の式辞といたします。

榎原美樹さん 記念講話

大阪大学を今日ご卒業されるみなさん、20年ほど前ですけれども大阪大学の文学部を卒業し、非常にたくさんのことを学んで卒業した私から、心よりまずお祝いの言葉を申したいと思います。本当に今日はおめでとうございます。

このような、みなさんにとってのお喜びの席でお話をさせていただくことは本当に大変光栄と思っています。普段の私は、テレビのカメラの前でマイクを持ってしゃべるといのが毎日の仕事なんですけれども、これだけたくさんの方のみなさんの前で直接話をする機会はそんなにないので、本当は非常に緊張しているんです。しかし、本日は前途洋々たるみなさんですから、心から本当にエールを贈りたいと思います。

先ほど総長の式辞で「能力」、「力」と言う言葉が出てきました。私もこの「力」と言う言葉を何かみなさんにお話しできることはないかと昨日帰ってきてから、自宅で考えていたんです。取材の現場でこれまで見たことで、「力」と言う言葉で何を感じてきたかと言うことを少しお話しさせていただきますと思います。

1980年に「第3の波」と言う題で本を書かれ有名になられたアメリカの未来学者アルビン・トフラーさんが次のようなことをその本の中で提唱しています。

人間の力というのは大きく分けて3つあると。その3つというのは何かというと、もっとも原始的な力というのは「暴力」、バイオレンスですね。その中には武力もあるでしょうし、みなさんが持っている、身体と力で喧嘩をしてどちらが勝つかというような力、その本当にもっとも人間が持って、人間だけではないですが動物が持って生まれてきたその力、これがまず最初の力であると。そして次の力と言うのは何か、それは「富の力」、お金の力ですね。これは歴史的に見てみると産業革命以来、富というものを他の人よりもたくさん持つ、そういう人間が強いと言う時代が続いてきた。しかし、今第3の波が起きようとしている。1980年代ですから、まだ情報化時代と言うのが来るちょっと前にそれを見抜いて書かれた話です。第3の波というのは、知識である。知識をどれだけためている人間が強いのかという時代が来るのだと言うことを書かれました。

私は今、普段東南アジアのタイで駐在していて、普段は、東南アジア、タイとかラオスとかカンボジアとかそういうところを拠点に取材をしているんですけれども、何か事があると、例えば中東、イラクやカタールとかそういうところへ出張、私たちは出稼ぎと呼んでいるんですけれども、タイから取材に行く事もあります。21世紀に入ってから、アメリカの9.11事件、ニューヨークやワシントンがイスラム過激派によってテロが起きた。みなさんもまだテレビで、飛行機が世界貿易センタービルに突っ込むという映像を覚えておられる方が多いと思いますけれども、その9.

11事件の起きた3日目から現場に入りました。それからその9.11をきっかけにアメリカが空爆を始めたその日に、次はアフガニスタン、アフガニスタンを攻撃し始める訳ですけれども、アフガニスタンにはすぐは入れなかったんで、パキスタンに入って、そこからアフガニスタンを取材をして、そして今度は3年前に、その次に起きたイラク戦争ですね。

実際戦争はイラクで起きていたのですが、私はむしろ米軍の担当で、NHKの中で分担がいろいろあるんですけれども、米軍と一緒にいてイラクに入った人間もいますし、イラクの中にいて米軍が入ってくるのをイラク側から取材したと言う人間もいます。

私は湾岸諸国の小さな国ではありますが、産油国のカタールというところでアメリカ軍中央指令前線基地と言うところから毎日、今日アメリカ軍はこういうことをしましたと言う取材をしていました。そういう戦争が起きているところから、現場から見て取材をしていると、なかなかアルビン・トフラーさんが言われたような、知識をたくさん持っている人間が強くて、もうバイオレンスの時代は終わったとは全く言えないですね。

彼は、やはりアメリカと言う視点から見ていたのであって、まだまだ世界はそれよりはもっともっと複雑な構造になっているというふうに肌で感じています。ですけれども、世界は依然として暴力が支配する地域と言うのが非常にたくさんある中で、その複雑な世界で、じゃあ私たち人間は、個人個人としてどのように生きていくべきなのか、また日本は経済大国と言われますけれども、その強い国日本の日本人がどういうふうに生きていくべきなのかと言うことをよく考えるんですね。

先ほど総長は、力を、能力をつけて下さいというふうに言われましたけれども、私は、強さそして優しさというのとは何か、強さから来る優しさと言うメッセージを今日は贈りたいと思います。もちろんここで言う私の力の強さというのは何も武力についてだけ言っているのではなくて、精神の力とか、先ほどの知識から来る力、技能の力、美から来る力など、人間にとっての力の源というのは非常にたくさんあるわけです。そのすべてを持って私は今、力というふ



うに言いたいと思っています。

私は取材をずっとしてきた現場の中で尊敬できる人、それは国の指導者であっても、農業を続けていらっしゃる方であっても、どういう職業や生業を持っておられる方でも、この人は尊敬できるというふうに思った人に出会えたときに本当に私はこの仕事をしていて本当に良かったと感じるんです。みなさんは南アフリカのもう引退されましたけれども、アパルトヘイトに反対して、白人と黒人の権利を平等に認めるようにと一生ずっと活動してこられたネルソン・マンデラさんと言う元大統領の名前を聞かれたことがあると思います。また、亡くなられましたけれども、パレスチナの解放運動にずっと身を捧げてきたPLOのアラファト議長、と言う方も聞かれたことがあると思うんです。私は南アフリカもパレスチナも取材をした経験というのがあるんですけれども、この2人の方々、自分達の同胞にとっての指導者、この同胞、南アフリカの黒人であったり、イスラエルに抑圧されてきたパレスチナの人のために、それぞれの解放運動を、暗殺されたり、暗殺の危険な目にあったり、それから投獄されたりというような様々な逆境がありながら諦めなかった。それはそれで人間としてもすごい偉業を成し遂げた人達だと言うふうに思うんです。だけれども私がむしろもっと人間としてこの人達がもっと偉いんじゃないかというふうに思ったのは、その相手方なんです。白人が優位であった南アフリカの社会をいわばひっくり返して、マンデラさんの言ってることは正しいんじゃないかというふうに認めて、ものすごく強い反対をした白人の同胞達をなだめて全体を仕切って、その強い反対を押し切って、アパルトヘイトを撤廃に導いていったこの方は白人なんですけれども、デクラートさんという大統領。それから、アラファト議長の相手方として、それまではそんなテロリスト達はここにはいないという、存在までも否定していたというPLOというひとつの解放運動をしている団体の存在を認めて、イスラエルとパレスチナが和平を今探すべきだと言って踏み出して1993年9月にイスラエルとパレスチナの歴史的な和解というのを導いたイスラエル側のラビン首相という首相がいました。彼はその後、結局パレスチナに国を売ってしまったと言って、自分の同胞のみなさんと同じくらいの若い人間、学生だったんですけれども、に銃で殺されてしまうんですね。私はこの2人の人間性というものに取材、インタビューをしていて非常に感銘を受けました。というのは、自分がもっていないものを求めてそれを得るまで戦うというのは偉業ですね。しかしこの2人というのは、自分の相手方よりもずっと強い立場にあって、その現状をよしとしていればそれは非常にたぶん楽だったと思うんです。だけれども自分達の中で自分に反対する同胞というのを押さえて、白人優位というのをあえて撤廃するとか、自分たちが占領していたパレスチナの土地をパレスチナにじゃあ返しましょうというふうに返せる。それは、より偉業なのではないかというふうに感じました。ラビン

首相が亡くなった後に番組を作りに行ったんですけれども、彼の側近が、ラビン氏は、自分たちで血を流して戦争で取った土地だから、それを返すことで自分たちの中に平和が生まれるんだったら返すべきだという非常に強い信念を持っていたというふうに話していました。

また、デクラート元大統領は日本に来られたときに、直接インタビューする機会を得たんですけれども、やはり、これまで勝ってきたものというのが、譲歩する強さというものもあるだろうと言うふうに話されていました。譲歩する弾力性、弾力というのは弾む力なんですけれども、弾力性と言うのもまた強さなんだと言うことなんです。自分が強くなければ相手をおもんばかることはできない、強いからこそ初めて相手に優しくなれると、あるいは、強いからこそ相手に優しくならないといけないと言う責任も出てくると思います。日常、それから個人のレベルで自分の体力とか知力とか能力を高めて、だからこそ相手と真剣勝負もできるし、相手をおもんばかる余裕ができると言うことですよね。



私は今ちょうど、タイで連日連夜起きている抗議デモの取材というのを行っています。宣伝になってしまいますけれども、あさっての日曜日に午後6時過ぎから海外ネットワークという番組がありまして、そこでタイの首相府前から中継をする予定です。お時間がある方は見ていただければと思うんですけれども。そのタイでは何が起きているかと言いますと、今首相の家族が経営してきた会社というのがあって、その会社がシンガポールの企業に持ち株を全部売ってしまったんですね。そして、日本円で2200億円もの利益というのを首相の家族が全部もらっちゃってるわけです。それで一銭の税金も支払われていないと。首相としての立場というのを自分の家族も親族も企業に利用しているんじゃないかというものすごい大きな抗議の声というのが市民から出ています。タクシン首相というのは、財力、先ほどの富の力も、ものすごいですし、自分は元々警察の出身なのでそういう意味の力も持っています。その力がすごく大きかったのがなぜ人々の反発を受けているかというと、そこで傲慢になって強いものだけが勝てばいいんだという、そういう方程式を今までに作ってきてしまって、強

いにもかかわらず他人をおもんばかりの余裕を持っていなかった。

そこが、反発を招いている大きな原因じゃないかと私は思います。今の時点で、首相派の方が、首相を支持する人の方がまだ有権者的には人数が大きいんですけども、大きな流れから言うと、この首相の首相としての命はそう長くないのではないかと私は見えています。

しかし、私はそうは言ってもジャーナリストですから、どちらがいい悪いの判断をみなさんの、視聴者に押しつけてるわけじゃないんです。金権政治と批判されながらも、自分はこの国の事を考えてきたと、絶対に辞任しないと主張して今戦っているタクシン首相の方も、連日連夜、絶対に許せないと言ってデモを行っている数万人の市民、いずれも今のところは力は均衡しています。真剣勝負が続いてるんですね。こういう取材をしていると、どちらの人にも自分の信念というのがあって、どちらがいい悪いというのを別としてですよ。それを掲げて勝負をしていると。平和的にやってますので流血は全く起きていませんし、まあ本当にデモが起きていて、それに対して首相も自分は悪いことはしていないというふうにテレビで反発したりとかしている。その姿を見ていると、どちらも汗を流して精根尽き果てる寸前まで戦っていてですね、人間というのは真剣勝負をするときというのは本当に美しいものだと、私はそう感じながら毎日取材をしています。



どちらが負けを認めるときも、強いものの優しさがそこでどういうふうに出てくるかということが、非常に重要になってくると思うんですね。今日卒業されるみなさんは、すでに相当の知識を持っていちゃってると思いますけれども、是非これから自分の力をつける、強さをつける努力というのを続けられますように、そして、力を優しさに変えられたときに初めて人間としての真の力というものが発揮できるのではないかと私はそういうふうに思っています。

本日は本当におめでとうございました。

えばら・みき

プロフィール

NHK バンコク支局特派員。1987年大阪大学文学部史学科卒業。同年NHKに入局。1991年ヨーロッパ総局、1994年報道局国際部を経て、2002年6月から現職。2000年3月から「NHKニュース10」のキャスターをつとめた。

平成18年度入学式告辞



まず、本日ここに集われた2,721名の学生諸君、入学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも、心よりお祝い申し上げます。

みなさんは、これまでずっと勉学に励み難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学では、これをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていることでしょう。大学としても、みなさんのその夢が十分にかなうよう、しっかりサポートしていきたいと思っています。

しかし、あらためて考えてみますに、大学という場所では描けない夢は、いったいどういうものなのでしょう。それについてわたしの考えているところを、少しお話ししたいと思います。

私たちは、ふつう、この世界で自分の思いがまだ達げられていないときに、もっとこんなふうになればいいのに……という夢を見ます。つまり、自分が馴染んでいる世界、自分が知っている世界のなかで、まだ実現されていないものを、このリアルな世界のネガのようにして思い描きます。けれども、夢の前提となるその世界は、そもそも、ほんとうにリアルな世界でしょうか。リアルだと思いこんでいるだけの世界ではないでしょうか。

この世界を見る、わたしたちの視野というのは、決して広くありません。いつもここから、自分の立っている場所からしか、見られないという限界がまずあります。次に、自分が習ってきた知識や習慣の枠の中でしか見られないという限界があります。加えてさらに、自分が馴染んでいる言語の中でしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うには、まだまだ小さいものです。大きな夢を見るためには、だから、この小さな世界をもっと大きく広げていかなくてはなりません。

学問というのは、そのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるというのは、すでに知っている知識を量的に拡大することではありません。これまで、そんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」に触れるということなのです。

大学には、みなさんが恐らくは、まだ知らないさまざまな知識が、膨大に蓄積されています。宇宙についての、自然についての、社会や文化、そして、それらの歴史についての知識です。そして、いま現在もそれらの知識を深めつつあります。ただ深めるだけではなく、さらに世界に肉迫するためには、ときにこれまでの知識の枠組みを組み換え、それを超えていかなければなりません。そのときに物を言うのが、世界を捉える別の発想なのです。乗り越えたはずの過去の思想ともう一度対話しなおしたり、自分とは異なる他者のものの見方、感じ方に、学んだりする中からこそ、これまで、だれも思いつかなかったような斬新な発想が生まれてきます。

科学における大きな革新は、実際、そのようになされてきました。科学はたしかに理論を積み重ね、観察と検証を積み重ねていくなかで進化していきます。そうしたなかで、これまでの理論の枠組みでは、どうしても説明できない現象がいくつか現れてくることがあります。それらを説明するためには、これまでの枠組みをぐっと広げるか、それでも無理なら、その枠組みを根本から組み換える必要があります。これまでの科学の歴史を見るとすぐに分かりますが、歴史に残る偉大な発見というものは、それまでの研究が立脚してきた理論の枠組みを、しばしば根底から揺るがし、組み換えるようなものでした。そうだとすると、科学研究においては、既存の枠組みのなかでは説明できない現象、既成の枠組みのなかではあまり価値を認められていない現象、いや、そもそも問題としてすら意識されない現象に対する、感受性を十分にもっているかどうか、その進化にとってはきわめて重要だということになります。同じ枠組みのなかでのゲームや競争に埋没しては、真の科学革命につながるような、すばらしい研究は生まれないのです。

そのために、何をにおいても鍛える必要があるのが、イマジネーションというものです。イマジネーションというのは、ここにはないもの、自分がよく知らないもの、これまで考えも及ばなかったものを想像する力のことです。

イマジネーションと言えば、ファンタジー、つまり空想や夢想とよく混同されますが、イマジネーションは、そのように単に感覚的なものではありません。眼の前にある出来事を手がかりとして、眼の前に現れていない別の出来事を想像すること、あるいは、そうした出来事の仕組みを、論理的に突きつめてゆくこと、それが想像の本来のはたらきなのです。

言い換えると、それは、眼の前にあるものを、眼の前にはないものと関連づけて考える能力のことであり、芸術のみならず、宗教も、そして科学も、豊かなイマジネーションの産物なのです。芸術による創造（クリエーション）はもとより、宗教もまた、この世界を超えた彼方の視点から、この世の生活を照らしなおす知性の働きに拠っています。自然科学も、眼に見える現象から、そのような現象を引き起こしている、見えない法則を推論していくアクティヴな

知性の働きに拠ります。そういう、のびのびとした、スケールの大きな視野をもちうるということが、科学研究においても、人生においても大変重要なことなのです。

みなさんが、いま抱いている夢を、もっと大きな、そしてもっと確かなものへと磨き上げていくためには、いま述べたような、生き生きとしたイマジネーションと、広い視野に立った豊かな「教養」が必要です。そういう裏づけがあってこそ、夢は夢で終わらず、夢は一つの具体的な「デザイン」となります。

デザインとは、いままでになかった形を作り上げていくことです。世界が大きく変わりつつある現在、社会の仕組みから物の形まで、あらゆる次元で新しいデザインが求められています。学問においても、異なる分野の異なる知識を編集し、新たな知的領域や、新たな社会の仕組みを構想する、そういう「しなやかな知性」が求められています。わたしは、こうした知性を身につけた人を「柔らかな専門家」と呼んできました。「柔らかな」というのは、自分の考え方に閉じこもらずに、自分とは異なる考え方に開かれているということです。あるいは、自分の感じ方に固執せずに、他人の感じていることに、きちんと耳を澄ますことができるということです。

科学の研究と、人びとへの思いやりというのは、異なる二つのことではありません。自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている、目に見えない構造のほうから、突きとめようという科学の姿勢と、自分では体験しようのない他人の心の内を思いやろうとする、対人関係の態度とは、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他人の側に置くという意味では、実は同じ性質のものなのです。ほんとうの科学は、思いやりのあるものであるはずだ、というのがわたしたちの信念です。そして、みなさんには、このような科学の精神をこそ、大阪大学で身につけてもらいたい、そうして「社会からの厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となってこの大学を巣立って行っていただきたい……。わたしはそうのように願っています。

最近読んだ本のなかで、あるデザイナーの方がこんなふうを書いておられました。



おざなりなデザインというのは、建築であれ、番組制作であれ、「こんなものでいいでしょ」という、どこか人を軽くあしらったところがある。「こんなものでいい」と思いながら作られたものは、それを手にする人の存在を否定する。とくに幼い時期に、こうしたおざなりな物に囲まれて育つことは、人の成長に大きなダメージを与える。人間は「あなたは大切な存在で、生きている価値がある」という、メッセージをつねに探し求めている生き物である。だから、「これはとても丁寧に作られている」「これは大事に使わなければならない」と思わせるもの、手に取った瞬間にモノをとおして自分が大事にされていることが感じられるデザイン、そういうデザインが立派なデザインだということです。

昨年、授業と授業の間に友人とおしゃべりをしたり、ゆったりとした気分で食事をしてもらえるよう、豊中のキャンパスの池に面して学生交流棟をオープンしたのも、また、つい先頃、みなさんが毎日通われる阪大坂を全面改修したのも、同じようなデザインへの思いからです。

大学における教育と研究においても、同様のことが言えるはずです。

大学におけるそれは、より幸福な人類社会の実現に向けてなされるべきことは、言うまでもありませんが、それは、単純に社会のニーズに応えるということではありません。「こうしたい」「こうありたい」という人びとのニーズを鵜呑みにして、それに応えようとするのではなく、それがほんとうに重要なニーズ、正しいニーズなのかを吟味しながら、もっとも望ましい社会の仕組み、物の形をデザインしていく、そのために専門家としての研鑽が必要になるのです。

その意味で、デザイン力があるというのは、専門家としての「グッド・センス」を身につけているということです。「グッド・センス」は、感覚的なものであるとともに、社会的なものでもあります。つまりそれは、一方で、研ぎ澄まされた繊細な感受性を意味するとともに、他方では、「コモンセンス」という言葉にもうかがえるように、広い視野に立つ確かな社会的見識をも意味します。そういう二重の意味で「グッド・センス」を身につけた学生を育てること、それを大阪大学は、教育の重要な目標に掲げています。ほんとうの意味で「賢く」なること、みっともないことはしないこと、このことを肝に銘じた教育をしたいと考えています。

「賢く」あること、みっともないことはしないこと、そのことをかつての大坂町人は、いまよりも強く心がけていました。

近世における大坂は「天下の台所」と呼ばれ、わが国の経済の中心地でした。元禄の世、すなわち西暦1700年頃の日本は、その経済発展のなかで太平と繁栄に浴していました。しかし、いまでいう、このバブル経済もやがて崩れゆき、幕府や各藩は深刻な経済危機に見舞われることになりました。大坂商人は、当時すでに全国の経済を動かす力をもっていましたが、諸藩の経営悪化による貸し倒れの危険にさらされるようになりました。そうした不安定な状況



のなかで大坂商人が抱くことになった強い信念は、「子孫に残せる真の財産は教育でしかない」というものでした。そこで享保九年（1724年）、五同志とよばれる五人の商人たちが資金を募り、学者を招いて、町人のための学問所を創りました。それが懐徳堂です。天保年間には、のちに福沢諭吉をはじめとして明治期の日本国家を担うことになる人材を数多く輩出した適塾も開かれました。

なぜ大坂に、全国でも例のない町人の学問所が生まれたのか。その理由として、歴史家は次のようなものを挙げています。まず、当時の大坂には文化を育み、花咲かせるだけの富が集積されていたことがあります。次に、戦国の争乱ののち、優れた人材が、領主の拘束のない市井に隠遁していたこと、また諸藩の蔵屋敷には豊かな教養をもつ役人が数多くいて、そこに出入りしていた大坂商人には、なにより文化的素養が求められたこと、最後に、幕府や藩の法による締めつけから一定の距離を置くことのできた大坂では、人々は自由な雰囲気の中で学問や芸術に取り組めたということです。

大坂町人は、こうして自分たちで基金を集め、自分たちを高めていくための学問所を開設したのです。その二つの学問所、懐徳堂と適塾を、大阪大学はその精神的な源流としております。「賢く」あること、みっともないことはしないこと、その精神を大阪大学は、みなさんとともにしっかり受け継いでいきたいと思っています。

大阪大学に入学されたみなさんは、教わるだけでなく、次の時代の大学をともに作りあげていくパートナーでもあります。そういう思いで、最後にもう一度、みなさんに心から「ウェルカム」という言葉を贈ります。

不確実性のもとでの意思決定 — 経営科学から金融工学へ —

大学院経済学研究科教授 田 畑 吉 雄

第2次大戦中に誕生した経営科学とオペレーションズ・リサーチ（MS/OR）は、戦後、計画と管理の分野でわが国の復興と成長に深く貢献し、第2次産業革命を実現する原動力となった。MS/ORは問題解決のための科学的方法と合理的意思決定支援体系を提供する学問で、数学モデルの利用とコンピュータによる解析を特徴としている。

「経営者はつねに不確実な状況のもとで一か八かの賭けを強いられている」と言われるように、経営では不確実性への挑戦が絶えず求められる。この講義では、不確実性のもとでの意思決定問題を解決するための数学モデル構築の考え方について述べた後、過去の研究成果である「マルコフ決定過程と線形計画法」、「地域経済の最適計画」、「信頼性理論における代替モデル」、「期待効用理論における確実性効果の解決モデル」、および、金融工学の話題である「インデックス・ファンドの構成アルゴリズム」についての要約と論文作成のヒントとなった動機について語った。



たばた・よしお

略歴：昭和18年生まれ。昭和41年京都大学工学部を卒業。同年同大学大学院工学研究科に入学し、昭和46年修了（工学博士）の後、大阪大学経済学部助手、昭和49年1月大阪大学基礎工学部講師、昭和52年4月工学部助教授を経て、昭和59年3月経済学部助教授に配置換え、昭和62年2月同教授に昇任。平成14-16年経済学研究科長・経済学部長。日本オペレーションズ・リサーチ学会理事、関西支部長、およびフェロー、日本金融・証券計量・工学学会理事、日本数理科学協会理事などを歴任。研究分野はオペレーションズ・リサーチ、経営科学、金融工学。

プロフィール

経済史のなかの大阪

大学院経済学研究科教授 宮 本 又 郎

大阪は都市として4つの歴史的系譜をもっている。古代の大阪は難波宮などの王都がおかれた政治都市であり、中国・朝鮮と交流する国際港湾都市であった。8世紀末の平安京遷都以後、中世の大阪は歴史の表舞台から姿を消したが、15世紀末に蓮如が大阪本願寺を建立してからは、寺内町、宗教都市として再生した。本願寺の大阪退却後、秀吉が大阪城を築城し、武士の政權都市となるが、江戸に幕府が成立すると、大阪は「天下の台所」、経済都市として純化することになった。明治維新期大阪は大きな打撃を受けたが、明治20年前後から綿工業が台頭、それに関連した産業が興り、大阪は「煙の都」、工業都市となった。その後、化学・金属・雑貨工業、生活関連消費財産業、私鉄、百貨店などが次々と興り、都市近代化政策も実って、大正末・昭和初期には日本第一の都市、「大大阪」が現出した。戦後は、繊維・家電など軽工業を軸に復興を遂げたが、昭和30年代からは臨海工業地帯の建設、重化学工業の育成、産業構造の転換が図られた。

このように歴史のなかの大阪はダイナミックに性格変化を遂げてきた。大阪には「暖簾を守るために、暖簾をつかえる」という言葉があるが、まさにそれを体現してきたのである。変化とイノベーションこそが、このまちが築いてきた伝統というべきで、大阪はいま第5番目の歴史的系譜を作り出すことを求められているといえよう。



みやもと・またお

略歴：昭和18年生まれ。昭和42年神戸大学経済学部を卒業。同年同大学大学院経済学研究科に入学し、昭和45年中途退学後、神戸大学経済学部助手を経て、昭和47年10月大阪大学経済学部助手に配置換えとなり、同講師・助教授を経て、昭和63年4月同教授に昇任。同年、経済学博士の学位を取得。平成5-7年経済学部長・経済学研究科長。社会経済史学会理事、経営史学会会長・理事・編集委員長、企業家研究フォーラム会長、日本ベンチャー学会理事。文部省学術審議会専門委員、同省大学設置・学校法人審議会専門委員、大阪市総合計画審議会専門委員、大阪21世紀協会委員、日本学術会議会員などを歴任。昭和63年、日経・経済図書文化賞、平成元年、NIRA政策研究・東畑記念賞を受賞。平成16年、大阪市民表彰（文化功労）。平成17年、大阪大学教育・研究功績賞。

プロフィール

高温・高圧下での結晶学と共に — マントル科学への橋渡しの30年間 —

大学院理学研究科教授 山 中 高 光

多くの地球物理現象を把握するためには、地球内部物質の物質科学的な研究に基づいた理解が必要である。大型プレスやダイヤモンドアンビル等の高圧発生装置を用いて100万気圧を、またレーザー加熱装置を併用して3000℃を超える状態での高圧・高温の極端条件を実験室に再現することが可能になった。長年に亘って放射光施設等を利用し、in situでのX線の回折や吸収実験を、また高圧下でのラマン分光実験を行い、極端条件での物質の構造、相転移機構、電子状態、状態方程式などの研究を行ってきた結果を紹介した。

結晶構造転移等のミクロな現象が深発地震を、また原子の非調和熱振動、熱伝導、熱膨張の機構がマクロなプレート運動に起因していることを論じた。さらに圧力誘起による非晶質転移、Mott転移、ヤーン・テラー転移、分子乖離、スピン状態変化等がマントル科学、地球物理現象や地球ダイナミックスの議論に関与している話題を提供した。



やまなか・たかみつ

プロフィール

略歴：昭和41年3月 東京大学理学部地質学鉱物学科卒業、昭和43年8月アメリカ合衆国ニューヨーク州立大学大学院地球科学専攻科修了、昭和47年3月東京大学大学院理学系研究科博士課程（鉱物学専門課程）修了し理学博士（東京大学）取得後、昭和48年5月東京大学理学部助手採用、昭和60年3月米国New York州立大学（Stony Brook）Research Associate、昭和62年7月大阪大学教養部講師、昭和63年11月大阪大学教養部助教授、平成2年3月大阪大学教養部教授、平成6年4月大阪大学理学部教授に就任、大学院重点化に伴い平成8年4月大阪大学大学院理学研究科教授へ配置換えとなった。この間兼職として平成7年度～8年度学術審議会専門委員、平成12年度～17年度日本学術振興会専門委員・日本学術会議鉱物学研連委員（第14期～19期）・結晶学研連委員（第15期、第19期）・地球化学宇宙化学研連格委員（第19期）、さらに第19期の日本学術会議会員（第4部会員）を務めた。国際学会委員経歴として国際結晶学会（IUCr）のCommission of Powder diffraction委員・国際鉱物学連合（IMA）Commission of Mineral Physics委員長・Jour. of Powder DiffractionのAdvisor Board・Zeitschrift für KristallographieのEditor・国際鉱物学連合（IMA）の副会長・今年7月に神戸で開催されるIMA-2006組織委員長を務めている。以下の学会賞を受賞している。日本鉱物学会奨励賞・日本鉱物学会賞、2000年にアメリカ鉱物学会賞（MSA-Fellow）、また2001年には国際回折データセンター（ICDD）功労賞。

移植バカ35年、本懐を遂ぐ

大学院医学系研究科教授 白 倉 良 太

私は、昭和43年に大阪大学医学部を卒業し、一般外科の初期研修後、心臓外科医を目指して当時の第一外科に入局しました。なぜ「移植」を志したか？昭和42年12月3日、南アフリカのクリスチャン・バーナードが心臓移植をやったというニュースが飛び込んできました。その時、卒業試験の真最中でしたが、結局この出来事がきっかけとなり、以来35年間、旧第一外科、臓器移植学研究室にて心臓移植の実現、普及、定着に向けての基礎研究から前臨床試験、そして学内外のシステム構築までいろいろなことに携わるようになりました。

講義は3部構成で、現在に至る自分史を述べ、「本懐」についてお話ししました。

1) 研究：心臓移植実現に向けて 2) 臓器不足対策：異種移植の臨床応用に向けて 3) 臨床：心臓移植再開、定着に向けて

さて、「本懐」ですが、臓器移植法の施行や、心臓移植の実現ではなく、本年4月から心臓移植の手術料が保険収載されることが中央社会保険医療協議会で決まったことです。脳死臓器移植が一般的な医療として市民権を得た証しだと思います。定年で退任する時に保険適応になる、「本懐」を遂げることができるなんて、これ以上の喜びはありません。



しらくら・りょうた

プロフィール

大阪大学大学院医学系研究科分子治療学講座臓器移植学分野

略歴：昭和43年3月大阪大学医学部医学科卒業、昭和43年4月大阪大学医学部附属病院・医員（診療医）、46年7月大阪大学医学部外科学第一教室（副手）、50年7月国家公務員共済組合連合会大手前病院外科（心臓外科）、52年4月市立豊中病院心臓外科（医長）、53年7月大阪大学医学部助手（第一外科）、55年6月～56年3月公務命令にて英国（ロンドン大学附属 National Heart Hospital）留学、62年10月～63年1月米国（ミネソタ大学心肺研究所）留学、平成2年10月大阪大学医学部助教授（バイオメディカル教育研究センター臓器制御部門臓器移植学研究室）、4年4月京都大学医学部助教授（胸部疾患研究所）併任（6年3月まで）、6年1月大阪大学医学部教授、7年1月大阪大学工学部非常勤講師兼任（16年3月まで）、8年4月山形大学医学部非常勤講師兼任（17年3月まで）、13年4月大阪大学大学院医学系研究科教授（組織改編）。専門は臓器移植学、心臓血管外科学。医学博士（1976年）。学会活動として、日本胸外科学会評議員（昭和58年～）、日本移植学会評議員（昭和61年～）、日本組織適合学会評議員（平成4年～）、日本臓器保存生物医学会評議員（平成5年～）、日本心臓血管外科学会評議員（平成7年～）、日本外科学会評議員（平成8年～）、日本移植学会理事（平成8年～11年）、国際異種移植学会理事（平成11年～14年）

グルタチオン研究から糖鎖生物学へ

大学院医学系研究科教授 谷口直之

本最終講義では、糖鎖研究を始めたきっかけから、21世紀COE拠点リーダーに至るまでの道乗りを紹介した。ラットの化学発癌モデルにおいて、生体内の酸化還元に関わるグルタチオンの量が低下し、それを代謝する γ -GTPという酵素がミラーイメージで著しく活性化することに気付いた。これをきっかけに γ -GTPのタンパク酵素化学の研究を開始し、等電点電気泳動における移動度の違いは、 γ -GTPの癌における糖鎖修飾の違いである事を発見した。その癌細胞に特異的な糖鎖構造を共同研究者とともに決定し、その糖鎖を作る酵轉移酵素を明らかにするため、糖鎖生物学の研究に入った。生体内にごく微量しか存在しない、いくつかの酵轉移酵素の分離精製、遺伝子クローニングにつぎつぎと成功した。さらに糖鎖のもつ生物機能を明らかにするため、自ら提唱した糖鎖リモデリングの方法により、糖鎖が、癌の酵轉移浸潤、肺気腫などの原因であることを明らかにした。そして糖鎖研究は、オルガネラ研究との融合により、21世紀COEプログラム「疾患関連糖鎖・タンパク質の統合的機能解析」として大きく開花した。COE発足後も糖鎖解析法の標準化や新しい糖鎖バイオマーカーの開発などを中心としたHGPI（国際ヒト疾患グライコミクス／プロテオームイニシアチブ）を立ち上げた。COEに始まる一連の糖鎖の国際的な研究は、将来的なシステム糖鎖医学・生物学センターを目指すものである。



たにぐち・なおゆき

プロフィール

略歴：昭和42年、北海道大学医学部卒業、47年、同大学院博士課程修了、同大学、衛生学教室の助手、講師を経て、昭和54年より同大学の癌研生化学の助教授、この間visiting associate professorとしてコーネル大学に留学。昭和61年、大阪大学医学部生化学教室教授に就任。平成14年International Glycoconjugate Organization Award、武田医学賞など受賞、平成17年紫綬褒章。国内外21の学会の会頭もしくは評議員、JBCをはじめとする13の国際誌の常任編集委員。CREST研究の研究総括で、大阪大学21世紀COEプログラムの拠点リーダー、また第20期学術会議会員。一男三女の6人家族。

周産期の臨床と研究 — 周産期の夜明けを目の当たりにして —

大学院医学系研究科教授 村田雄二

1960年代の後半から加速度的に高まってきた子宮内胎児に対する医学的興味と診断手技開発の目覚ましい進展により、胎児から直接の情報を得る超音波診断学・胎児心拍数モニタリングの手法が臨床に取り入れられた。この結果、それまでの母体中心の産科から、胎児をも診断の対象とする周産期医療へと大きく変貌することとなった。基礎的研究面では、生理的な状態下での胎児の観察の重要性が唱えられ、サルや羊を用いて、手術時の侵襲や麻酔薬の影響から胎児を完全に回復させる、いわゆる慢性動物実験モデル、chronic preparationの必要性が強調され、Hon等が提唱した胎児心拍数パターンに理論的な裏打ちがなされると共に、更なる胎児心拍コントロールの機構が解明されることとなった。胎児心拍数モニタリングがこの30年間の胎児死亡減少に重要な役割を果たしているといえるであろう。反面、期待を大きく裏切ったのは、新生児脳障害ことに脳性麻痺の頻度が過去50年間減少を見ないことである。現在、胎児心拍モニタリング単独で、脳性麻痺の発生を効果的に予測し、予防することができるか否かが憂慮されており、補助診断法としての胎児酸素化や心機能のリアルタイム評価が将来の課題とされている。



むらた・ゆうじ

プロフィール

略歴：昭和42年に大阪大学医学部を卒業し、インターン終了後、昭和43年大阪大学産婦人科に入局。昭和46年南カリフォルニア大学産婦人科においてPostdoctoral Fellowshipを開始、49年終了後、同所Assistant Professorに就任。昭和53年よりカリフォルニア大学アーバイン校Associate Professorを勤めた後、昭和61年同大学教授に就任。平成8年で辞任、名誉教授となると同時に大阪大学医学部産婦人科教授に就任、現在に至る。国内では、日本産科婦人科学会（常務理事・渉外担当理事・学術担当理事）、近畿産科婦人科学会（理事・日産婦委員長）、大阪産婦人科医会（学術部理事）などを歴任し、また平成14年からは大阪府医師会副会長として多くの医療問題と関わっている。海外においてもSociety for Gynecologic Investigation、American College of Obstetrics and Gynecology、Society for Maternal-Fetal Medicineなど多くの学会に所属し、また昭和56年にはアメリカ産婦人科専門医、60年にはアメリカ周産期医学専門医の資格を獲得するなど活発に活動している。

咬合・咀嚼・嚥下をコアにした歯科医学教育・研究・臨床の展開 — 歯科補綴学をこよなく愛した38年間 —

大学院歯学研究科教授 野 首 孝 祠

昭和43年に歯学部歯科補綴学第二講座（現顎口腔機能再建学講座）に入局して以来38年間、注入型レジン重合法の命名に始まる有床義歯の設計・製作方法の展開に向けて理工学的見地と生理学的見地から取り組んだことが私の研究の源流であります。そこから派生する様々な研究がコアとなり、今日までに咬合・咀嚼・嚥下という口腔機能の検査・診断・治療法の体系を私なりに発展させてきました。幸いなことにその多くを臨床において実用化でき、社会貢献に至った現状を講義の中で振り返らせて頂きました。

また、教授在任中にわが国の歯科医学教育が大きな転換期を迎え、卒前教育における共用試験の導入と卒後臨床研修必修化に向けての取り組みにおいて、その基本設計から全国規模で従事する機会を与えられたことも大学人として意義ある仕事であったと感謝しつつ、さらなる教育改革を期待いたします。



のくび・たかし

プロフィール

略歴：岐阜県出身。昭和43年大阪大学歯学部卒業。同50年歯学博士。同55年大阪大学歯学部助教授。平成5年大阪大学歯学部教授。同8年歯学部附属歯科技工士学校長。同11年大阪大学評議員。同14年歯学部附属病院院長。同16年大阪大学財務会計室員。

平衡と非平衡のはざ間で

大学院工学研究科教授 小 林 紘二郎

平成元年に大阪大学工学部教授として着任以来、ほぼ17年間お世話になりました。

福井という雪国育ちの私は、小学生の時から、北海道大学低温科学研究所中谷宇吉郎教授の研究（雪の結晶）に興味を感じていました。京都大学の学部4年生時に、研究室で凝固を研究しているところに興味を持ちました。核生成と結晶成長による平衡論的な組織の形成プロセスに始まり、アモルファスの形成や準安定相の形成条件など非平衡プロセスへと研究が発展したのは京都大学及びクインズランド大学時代でした。

大阪大学での17年間は、それらをベースにしての知的応用研究として楽しみました。機能材料の創製・表面機能化・接合工学およびエレクトロニクス実装工学は、溶融・凝固・界面現象・反応層の形成と相変態を内容として含んでいます。

京大時代からの非平衡プロセスによる材料開発は、比較的容易に学問的ピークを迎える分野であり、研究テーマのひとつの柱としました。しかし、これはまさかの時の隠し玉みたいなもので、新規の柱として、1) 機能材料の知的創製 2) 材料の局所的機能化 3) 材料の構造化 4) エレクトロニクス実装における微細接合 5) エレクトロニクス実装におけるAgナノ粒子接合を構築いたしました。

すべての現象は、界面の問題であり、特に、異材界面においては、そのスタートがすでに非平衡であると位置づけました。温度と時間の関数として、界面は反応し、非平衡状態から準安定状態へ、さらには平衡状態へと現象が変化を始めます。このような界面構造の変化のプロセスを知って、最適な機能を発揮する界面構造を構築するように、反応プロセスを制御することが楽しみとなりました。

手がけました多くの研究は道半ばのものが多く、若い研究者たちによってさらに発展されることを期待いたします。



こばやし・こうじろう

プロフィール

略歴：昭和42年3月京都大学工学部金属加工学科卒業、同年大学院修士課程、44年修了、同年博士課程進学、同年10月京都大学工学部助手。工学博士。昭和57年京都大学工学部助教授。平成元年大阪大学工学部教授に昇任。生産加工工学科融体加工学講座を担当、平成10年大学院重点化に伴い、大学院工学研究科教授に配置換えとなり、生産科学専攻知的プロセッシング講座担当となる。この間、クインズランド大学客員研究員、トロント大学客員教授。専門は「材料機能化プロセス工学」、すなわち、材料科学を学問的基礎として、材料の微視的な組織制御をプロセス（温度、時間、圧力など）管理により最適化し、目的とする機能の発現にある。研究成果は、学術論文300篇、国際会議の発表97件などがある。文部省学術審議会専門委員、経済産業省産業技術審議会専門委員、NEDO「金属ガラス」中間評価委員会会長代理など要職を歴任。金属学会功績賞、日本鉄鋼協会西山記念賞、溶接学会貢献賞、日本非破壊検査協会功績賞、国際エレクトロニクス実装学会 (IMAPS) Outstanding Paper Awardなどが授与されている。

塑性学の歴史

大学院基礎工学研究科教授 小坂田 宏 造

現在のように先行きが不透明な時代には、学問の歴史的な展開をよく知って研究開発をすすめることが不可欠であるが、最近これに興味を持って調べたので、紹介したい。

金属の塑性変形を最初に報告したものは、鉄線のねじり試験において永久変形量がねじり回数とともに次第に増えることを報告した1784年のクーロンのフランス科学アカデミーの論文である。現在の塑性学に繋がるものは、1864年のトレスカ（フランス）の論文である。20世紀初頭にドイツ・ゲッチンゲン大学に応用力学研究所が設置され、プラントルが主任教授に赴任してから塑性学がドイツを中心に急進展した。

ドイツの塑性学はユダヤ人研究者が支えていたが、ナチスの台頭と共に主要研究者がドイツを離れ、1940年頃には塑性学の研究の中心は米国、英国に移った。1950年以後は、上界法が塑性加工解析法として開発され、実用されるようになった。

戦前の日本では、大阪帝国大学工学部の創設当時から在職された山口珪次教授（金属）が世界に先駆けて（1929年）転位による塑性変形機構を発表されており、また中原益次郎教授（機械）が日本最初の関連著書「金属塑性学」（1935年）を著されている。

1970年以降は塑性学への有限要素法の研究が中心になったが、幸い筆者も塑性力学の有限要素解析の早い段階から研究に参加でき、楽しく研究させていただいた。



おさかだ・こうぞう

プロフィール

略歴：昭和40年京都大学工学部機械工学科を卒業、昭和45年京都大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程修了、同年4月神戸大学工学部生産工学科助手を経て昭和46年9月助教授昇任。昭和46年9月より1年間ブリティッシュカウンシル奨学生として英国バーミンガム大学機械工学科客員研究員。昭和59年8月広島大学工学部第一類教授に昇任。昭和63年4月より大阪大学（基礎工学部、基礎工学研究科）教授。

専門は塑性学、生産加工学。日本塑性加工学会および日本機械学会フェロー。日本塑性加工学会理事、副会長、会長を歴任、国際生産加工学会（CIRP）正会員および塑性加工部門委員長。国際冷間鍛造グループおよび国際塑性加工会議（ICTP）運営委員。国際誌 Int. Journal of Mechanical Science および Int. Journal of Machine Tool Design and Manufacture 編集委員。日本塑性加工学会会田研究奨励賞、論文賞（4回）、会田技術賞、精密鍛造国際学術賞受賞。

私における「科学と技術の融合」

大学院基礎工学研究科教授 中 戸 義 禮

基礎工学部には「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発、それにより人類の真の文化を創造する学部」という高い理念がある。学生時代を含めると45年の長きにわたって基礎工学部にお世話になった者としては、定年退職を迎えるにあたり、これまでの来し方を振り返り、この理念に沿って我が履歴を反省することが必要であろう。こう考えて、最終講義では、標記のような表題のもとに、光化学、光電気化学、界面科学、非線形科学と、いろいろな領域に研究を展開させていった過程を説明した。博士課程時代、光化学を研究する中で「分子の集まりからどうして生命が生まれるのか」という問いが化学の根本命題であると考えようになり、「微小機能系」に興味を持ち始めた。この辺に研究の原点があった。これがその後の太陽エネルギー変換、ナノ構造形成、非線形自己組織化の研究へと繋がっていった。また人間の創造性に興味を持ち、自ら納得できるところまで考えを深められたのも今では心に残る思い出となっている。いろいろな領域を融合させて活動したという面では基礎工の理念に沿った生き方ができたように思う。最後に、これまでお世話になった多くの方々から心からお礼を申し上げる。



なかと・よしひろ

プロフィール

略歴：昭和40年3月大阪大学基礎工学部合成化学科卒業、昭和42年3月基礎工学研究科修士課程修了、昭和44年3月同博士課程中退、同年4月大阪大学基礎工学部合成化学科助手、昭和47年2月工学博士（大阪大学）、昭和56年6月基礎工学部附属太陽エネルギー化学変換実験施設助教授、平成4年10月大阪大学基礎工学部合成化学科教授。平成9年改組により基礎工学研究科教授に配置換え。平成18年3月31日定年退職。この間、昭和51年9月より1年半ドイツ国マックス・プランク協会フリッツ・ハーバー研究所研究員、平成4年7月から2カ月ドイツ国ハーンマイトナー研究所客員教授。平成7年4月および平成11年4月からそれぞれ2年間大阪大学有機光工学研究センター長、平成17年4月より1年間大阪大学太陽エネルギー化学研究センター長。

専門は物理化学。光化学、光電気化学、光エネルギー変換、界面科学、非線形化学、科学哲学（創造性研究）の多岐の分野で活躍し、昭和52年4月日本化学会進歩賞、平成3年10月光化学協会賞、平成16年3月電気化学会賞・武井賞を受賞。学内においては研究科教務委員長、未来ラボ「非線形ダイナミクス」代表、VBL運営委員会委員、環境・エネルギーPTリーダーなど、学外においては文部省日米科学技術協力事業「光合成による太陽エネルギーの転換」研究計画委員会委員長、日本化学会欧文速報誌編集委員、Intern. J. Electrochem. Sci. 編集委員、電気化学会理事、関西支部長などを歴任した。

印欧語語源に関する若干の考察

大学院言語文化研究科教授 高岡 幸一

現在の英語の単語の中でいくつかのもの、例えば car, daughter, door, know, leech, smile, son, thirsty, udder, water, white など語形がほぼそのままの形で印欧語へと遡るものがあるという指摘から出発し、いくつかの印欧語祖語の推定語源を取り上げ各々についての若干の考察を行った。例えば、door と forest という二語はどちらも推定形 *dhwer- という形から派生していることを論じ、そのことは現在の英語語源辞典では必ずしも明確でなく、印欧語語源の段階を把握することにより判然とする点を指摘した。また、「蛭」といった語が世界的に西から東へと広大なスケールで同じ印欧語語源 *djalukâ- というインド語を頂点として、アラビア語やヘブライ語といったセム系言語をも含めて広がりを見せている事実についても言及した。蛭という語が瀉血行為を経て動物であると同時に「外科医」という意味にも発展する発想過程が古代から各民族に見られることを観察した。



たかおか・こういち

プロフィール

略歴：昭和40年3月大阪大学文学部仏文学専攻を卒業、昭和43年3月大阪大学大学院文学研究科修士課程仏文学専攻修了。昭和45年4月南山大学文学部助手に採用、昭和48年同講師、昭和49年5月フランス国ボワティエ大学より大学博士の学位を授与され、同年9月大阪大学大学院文学研究科博士課程仏文学専攻を単位修得退学。昭和52年4月南山大学文学部助教授、昭和53年4月大阪大学言語文化学部助教授、昭和63年9月同教授に昇任、平成14年4月大阪大学大学院言語文化研究科教授に配置換となる。フランス十七世紀古典主義文学、フランス十六世紀ルネサンス文学、中世ヨーロッパ文学を研究。共通教育ではフランス語教育を担当。言語文化国際関係論講座講座分野代表者、フランス語教育講座主任を歴任。

日本人のドイツ観 — その歴史的変遷をめぐって —

大学院言語文化研究科教授 中埜 芳之

日本は明治期以来、さまざまな分野において「近代化」の範をドイツに求めてきた。第1次世界大戦のとき政治・外交面で日独間の関係は一時断絶したものの、日本のドイツ文化受容は引き続き行われた。その後日本とドイツは同盟関係を結び、世界の多くの国々を敵として戦争を遂行した。しかしそういった親独路線はかならずしも一握りの政治家や軍人が選びとったものではなく、そこには知識人や中間層、草の根レベルでの支持があったことをわれわれはあらためて思い起こしておく必要がある。

第2次世界大戦後日本においてはアメリカのプレゼンスがきわめて大きくなり、そのなかでドイツの持つ意味は相対化されていった。また同時にドイツを見る見方も多岐になり、「ドイツという現象」についての解釈も、見る者の立場や視座によって大きく異なっている。その如実な例としてドイツの「過去の克服」に対する評価を挙げることができる。われわれはこれから他の国を一つのパートナーとして見る場合、その国を、全体的視野に立って、偏ることなく見る姿勢が必要であると考えます。



なかの・よしゆき

プロフィール

略歴：昭和41年3月京都大学文学部ドイツ語学ドイツ文学専攻卒業、昭和43年3月京都大学大学院文学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻修士課程修了。同年4月京都薬科大学専任講師に採用、昭和45年10月大阪大学教養部助手、昭和48年3月同講師、昭和49年5月大阪大学言語文化部に配置換、昭和55年4月同助教授、平成元年大阪大学大学院言語文化研究科に配置換、平成3年6月大阪大学言語文化学部教授に昇任、平成17年4月大阪大学大学院言語文化研究科に配置換となる。ゲーテ以後のドイツ文学、特にゴットフリート・ケラーを中心とする19世紀ドイツ文学、及びドイツ人の日本像・日本人のドイツ像を研究。共通教育ではドイツ語教育を担当。言語文化国際関係論講座講座分野代表者、ドイツ語部会主任などを歴任。

筋・生体情報工学

大学院情報科学研究科教授 赤澤 堅造

生物の優れた機能に学ぶことを機軸にして、筋はやわらかく、コンパクトで重量当たりの出力が大きいことに着目し、筋に関する研究を行うことにしました。歩行ネコの下肢筋の力学特性を計測し、力学的な柔らかさを運動サーボ（神経・筋系の仕組み）の観点から考察して、筋は立脚相ではかたく姿勢維持に有効で、遊脚相ではやわらかく“柳に風”の特性を持つことなどを明らかにしました。このような研究成果を基に、手の運動制御の仕組みを取り入れた人工の手、即ちやわらかさを実現した筋電義手を開発し、切断前の手と同様の感覚で義手の制御が可能となり、筋電義手使用の訓練期間が短縮され、壊れやすい物体の把握が容易になることをNHK教育テレビで放送されたビデオなどを利用して示しました。



次に、ヒューマンインターフェースに関する研究として、情報科学技術を福祉工学へ展開できないだろうかというコンセプトのもとに開発中の、神経疾患（リズム不整）の人や中高年の人が容易に音楽演奏の出来る新しい電子楽器、の成果の一端を紹介しました。最後に、学生諸君そして後輩諸兄がさらなる先進国を目指して研究にのぞむことを期待し、先進国について話題を提供しました。

あかざわ・けんぞう

プロフィール

略歴：昭和40年大阪大学工学部電気工学科卒業、同大学院修士課程修了、昭和45年同博士課程単位修得、昭和46年3月同退学。昭和45年4月日本学術振興会奨励研究員、昭和46年4月大阪大学工学部助手。昭和49年12月工学博士（大阪大学）。大阪大学工学部講師、助教授を経て、平成2年10月神戸大学工学部教授。平成12年4月大阪大学大学院工学研究科教授、平成14年4月大阪大学大学院情報科学研究科に配置換えとなり、バイオ情報工学専攻人間情報工学講座を担当。専門は、筋－神経制御機構の動特性の解明とその応用や生体信号の計測と処理・解析に関する研究。最近では、情報科学技術を福祉工学へ展開した研究として、新しい電子楽器の開発などを行う。主な著書として、筋運動制御系（昭晃堂、1993）、生体情報工学（東京電機大学出版局、2001）などがある。日本エム・イー学会科学新聞・論文賞（1972）、阪本賞（1998）など受賞。

ステロイドジェネシス — 酵素から細胞へ —

大学院生命機能研究科教授 岡本 光弘

ステロイドホルモンの生合成経路においてアルドステロン合成の分子レベルでの解明は遅れていたが、私たちはアルドステロン合成酵素がシトクロムP450ファミリーに属することを見だし、現在CYP11B2と呼ばれるP450をクローニングしその性質を明らかにした。副腎皮質球状層からはアルドステロンが分泌され束・網状層からはコルチゾールが分泌されるが、各層の機能分化を理解するにはそれぞれを特徴づける因子とその機能を明らかにすることが必要であると考え、各層に特異的に存在するタンパク質を探索した。その結果、球状層特異的なZOG（Zona glomerulosa-specific protein）や束・網状層特異的なIZA（Inner zone antigen）をクローニングしその性質を明らかにした。さらに副腎皮質に特異的に存在する新規のプロテインキナーゼSIK（Salt-inducible kinase）を発見し、この酵素がサイクリックAMPによる転写活性化を調節すること、そしてこの調節機構はステロイドホルモンの分泌のみならずインスリンを初めとする多くのホルモンの刺激一応答現象においても働いていることを明らかにした。ZOGやIZAやSIKの生理的な役割をさらに詳細に明らかにすることは今後の研究課題であり、そのためには細胞レベルだけでは不十分で個体レベルで遺伝子破壊などの技術を導入する必要がある。私自身はここで定年退職を迎えるが、これらの研究のさらなる発展を次世代の研究者に期待したい。



おかもと・みつひろ

プロフィール

略歴：昭和42年大阪大学医学部卒業、医学部附属病院において臨床研修に従事、昭和43年医師免許取得、昭和43年大学院医学研究科博士課程に入學、生化学講座で酵素化学の研究を行い、昭和47年医学博士の学位取得。昭和48年－50年、米合衆国カリフォルニア大学研究員。昭和50年－52年、米合衆国ジョンズ・ホプキンス大学研究員。昭和53年富山医科薬科大学助教授。昭和55年大阪大学助教授。昭和61年大阪大学教授（医学部分子生理化学講座）。平成11年大阪大学教授（大学院医学系研究科）。平成14年大阪大学教授（大学院生命機能研究科）。専門分野：酵素化学、とくにステロイドホルモンの代謝に関わる酵素の研究。所属学会：日本生化学会、日本内分泌学会、日本ステロイドホルモン学会、日本脂質生化学会。

明示的理解に魅せられて — 原子力工学から人工知能へ —

産業科学研究所教授 元 田 浩

阪大に在席したのはわずか10年3ヶ月であったが、産研での10年間は非常に充実したものであり、40年に亘る研究生活を無事締めくくることができ感謝している。阪大に来る前の30年間は、民間企業（日立製作所）の研究所で、原子力応用研究に20年、人工知能基礎研究に10年携わり、阪大に来て産研で、人工知能応用研究、とくにデータマイニングの研究をやらせて頂いた。表題の「明示的理解に魅せられて」は、私が40年貫いてきた、どんなに複雑な現象でも、本質だけを残し不要な詳細を抹消すれば、定性的に理解可能であるとの信念を端的に表現したものである。人間のこのような能力に知性を感じ、計算機にも同様な能力を付与できないかとの思いで、途中から人工知能の研究に身を転じた。



概念形成、知識コンパイル、視覚イメージ推論などの基礎研究に没頭した後、最後の10年間は地に足のついた大量データからの知識獲得の研究に取り組んだ。デジタル社会において、量を質に転化することのできる新しい技術であり、計算機パワーを最大限に発揮させ得るチャレンジングな研究分野を立ち上げることができ幸運であった。

もとだ・ひろし

プロフィール

略歴：1965年東京大学工学部原子力工学科卒業。1967年同大学院原子力工学専攻修士課程終了。同年、日立製作所に入社。同社中央研究所、原子力研究所、エネルギー研究所、基礎研究所を経て1995年退社。1996年より大阪大学産業科学研究所教授（知能システム科学研究部門、高次推論研究分野）。工学博士。

材料界面をあやつる

接合科学研究所教授 奈 賀 正 明

東北大学金属材料研究所においては、従来の金属材料と全く異なり原子配列が無秩序なアモルファス合金に着目し、その形成原理や物理・化学的特性の解明を早くより行いました。特に、従来のステンレス鋼が腐食するような塩素を含む苛酷な環境においても全く腐食しないアモルファス合金を見出し米国の腐食の教科書にも紹介されました。昭和56年より大阪大学溶接工学研究所にまいりましてからは、アモルファス合金のコーティングに関する研究を行い、スパッタリング法によるCr, Ti, Al基アモルファス合金を研究しました。これらのアモルファス合金はいずれも50at%の合金元素組成付近で最高硬さを示し、これは母相金属と添加元素の結合数の最も多い組成に対応しており、結晶構造をとる金属固溶体とみなすよりどちらかという化合物的であることが解りました。アモルファス構造をとる手前のナノ構造をとる結晶性Cr-Bの研究も行いました。B量が5at%の組成で最高硬さを示し、完全なアモルファス構造をとる10at%Bでは逆に硬さは低下することを見つけました。これは、Bの合金化により合金の結晶粒サイズが30nm以下にもなり、結晶粒界に体積率で20%ものアモルファス相が形成されているためでした。セラミックスや金属などの異種材料同士の接合では固相接合やろう付け法により形成される界面層構造は元素の化学ポテンシャルの勾配で説明できることを明らかにしました。また、超音波エネルギーや衝撃エネルギーなどの特殊エネルギーを用いた接合法も開発し、従来困難であったアルミニウムと鉄鋼やステンレス鋼の接合技術の開発にも成功しました。これまでの研究から、材料における界面の現象は複雑であり、最初から予断を持たず、柔軟な視点を持って研究すべきである大切さを知りました。



なか・まさあき

プロフィール

略歴：昭和45年12月東北大学大学院工学研究科博士課程終了（工学博士）、昭和48年4月から東北大学金属材料研究所助手に採用、昭和54年から約1年間ドイツザールランド大学研究員として勤務、昭和56年4月から大阪大学溶接工学研究所助教授、平成4年7月大阪大学溶接工学研究所教授、平成8年5月大阪大学接合科学研究所教授。学内では入試委員会委員、図書館運営委員会委員、超高圧電子顕微鏡センター運営委員会委員、工作センター運営委員会委員等、学外では高温学会理事、溶接学会評議員、金属学会編集委員等を務めた。海外ではハルビン工業大学顧問教授、大連鉄道学院顧問教授、ウィーン大学客員教授を務めた。日本金属学会論文賞、腐食・防食協会論文賞、村上記念奨励賞、溶接学会論文賞、高温学会論文賞、岡田記念溶接振興会岡田科学技術賞、先端材料のプロセス科学と技術国際会議優秀ポスター論文賞等を受賞した。専門は界面制御学、接合工学。

サイクロトロンとシンクロトロンに学んだこと、及び、非線形加速理論の現状

核物理研究センター教授 佐藤 健次

大学院生時代、大阪大学理学部の附属原子核研究施設（OULNS）でサイクロトロンの改造を見学見真似でお手伝いした。その後、東京大学原子核研究所（INS）でSFサイクロトロンとクーラーシンクロトロンTARN IIの建設に携わり、科学技術庁放射線医学総合研究所で重粒子線がん治療装置HIMACのシンクロトロンの建設に携わり、大阪大学核物理研究センター（RCNP）で稼働中のサイクロトロンの性能向上に取り組んだ。

HIMACのシンクロトロンとRCNPのサイクロトロンのいずれも、ビームフィードバック無しで、世界の類例を上回る高い性能で運転出来ており、それを実現するに当たり、物理の視点で、加速器技術の拠りどころとするモデルや近似を見直し、新しい技術を考案した。これより、物理の視点で、既存の技術の多くを見直すことが出来ることを学んだ。

加速器のビームの挙動を理解するに当たっても同様に見直しが必要と思い、磁場の下での高周波電場による加速運動を、円形高周波加速器をモデル化し、特殊相対論の下で、より厳密に求める研究に取り組んだ。現在、非線形運動方程式として厳密な式を得ており、今後は、この式の近似解を求めれば良い。

以上、見直すべきものが数多く残されていることを、若い人々へのメッセージとした。



さとう・けんじ

プロフィール

略歴：昭和40年3月大阪大学理学部物理学科卒業後、大阪大学大学院理学研究科修士課程物理学専攻入学。昭和42年4月博士課程進学、昭和45年3月単位取得退学後、大阪大学理学部文部技官。昭和46年3月退職後、理学研究科研究生、同年10月退学。同年11月東京大学原子核研究所助手、昭和63年2月助教授。昭和50年9月理学博士（大阪大学）の学位を授与、また、昭和57年2月から12月まで西ドイツ国立重イオン科学研究所（GSI）の客員研究員としてシンクロトロンの高周波加速装置の研究開発。昭和46年11月から昭和63年3月までの16年半の間、SFサイクロトロンの建設とクーラーシンクロトロンTARN IIの建設に携わる。昭和63年4月科学技術庁放射線医学総合研究所主任研究官、平成元年5月研究室長。昭和63年4月から平成6年9月までの6年半の間、重粒子線がん治療装置HIMACのシンクロトロンの建設に携わる。平成6年10月大阪大学核物理研究センター教授、平成18年3月定年退職までの11年半、サイクロトロンの高性能化に取り組む。

専門分野：加速器物理学。自称「紙と鉛筆で計算したがる加速器のノンブロ」であるが、最近では「物理学に根ざした加速器の研究」の必要性を唱えている。

“Court Jester”

大学院言語文化研究科外国人教師 ボイド、スティーブン アンドリュウ コリン

“Court Jester”というのは道化のことで、例えば劇作品の登場人物でいうとシェイクスピアの『リア王』のFoolがその代表的なイメージだ。なぜ最終講義にこの題目をつけたのかといえば、日本の大学における外国人教師の立場を象徴しているように思われるからである。国王に使える大臣であれば皆政治的権力はもっているが、本音が言えなく、国王に対しての世辞や鸚鵡返ししか言えない。道化は、権力はないけれど、言葉だけは言いたい放題。大阪大学でこの32年間、色々と意見を述べてきたが、大抵はきいてもらえた。ひとつだけ残念に思うのは、キッチン付き模擬国際会議室の実現が出来なかったこと。一緒に料理することにより本当のコミュニケーション能力が身につくと信じているのだが。それはさておき、本題は、長年研究社の英和・和英辞典の編修に携わった者として、KOD = Kenkyusha Online Dictionaryを紹介し、その活用について一考察を述べることである。

KODのサイトは利用者が自由に書き込み出来るシステムになっており、そこに寄せられる問い合わせの中に、異文化間コミュニケーションについて深く考えさせられるものが多い。「アメション」「タチショウベン」から「国立病院機構災害医療センター」「無形文化財」「被爆者」まで、ハイ・カルチャー、ロー・カルチャー、公用語、深刻な社会問題について、様々な議論がオンラインでなされ、これから大いに活用されることを期待する。



ボイド、スティーブン アンドリュウ コリン

プロフィール

略歴：1965年ケンブリッジ大学（クレア・カレッジ）卒、1968年イーリング・カレッジ（大学院）修了、1972年シェフィールド大学日本研究センター（大学院）修了、司書官・歴史学修士。1973年4月から大阪大学教養部外国人講師として採用され、1974年4月から1980年8月まで、そして1981年10月から2006年3月まで大阪大学言語文化部・言語文化研究科外国人教師。応用言語学、辞書編修法の研究に従事、共通教育では英語教育、大学院では応用言語技術論・文献資料技術論を担当。

平成 17 年度大阪大学教育・研究功績賞

国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞は、国立大学法人大阪大学に勤務する教員のうち、教育・研究上の功績が特に顕著であると認められた者に対して、授与し、これを顕彰することにより、本学における教育・研究の一層の発展を期することを目的として行われています。平成 17 年度は、以下の方々が受賞されました。

(総務部人事課)

所属名	職名	氏 名	該当受賞項目	所属名	職名	氏 名	該当受賞項目
文学研究科	教 授	森 岡 裕 一	8	基礎工学研究科	教 授	菅 滋 正	1
文学研究科	助教授	堤 研 二	1	基礎工学研究科	教 授	岡 村 康 行	1
人間科学研究科	教 授	春日 直 樹	10	基礎工学研究科	助教授	加 藤 博 一	1,4
経済学研究科	教 授	堂 目 卓 生	1	国際公共政策研究科	助教授	小 原 美 紀	7
理学研究科	教 授	田 島 節 子	1	微生物病研究所	助教授	熊ノ郷 淳	1
理学研究科	助 手	豊 田 岐 聡	1	産業科学研究所	教 授	中 谷 和 彦	1,3
理学研究科	助 手	松 森 信 明	3	産業科学研究所	助教授	黒 田 俊 一	2,5
医学系研究科	教 授	谷 口 直 之	1	社会経済研究所	教 授	大 竹 文 雄	1
医学系研究科	教 授	辻 本 賀 英	3	蛋白質研究所	助教授	松 浦 良 樹	1
歯学研究科	教 授	米 田 俊 之	1,10	接合科学研究所	教 授	竹 本 正	1
歯学部附属病院	講 師	林 美加子	1	レーザーエネルギー学研究センター	教 授	宮 永 憲 明	1,2
薬学研究科	助 手	小比賀 聡	1,4	超高压電子顕微鏡センター	教 授	鷹 岡 昭 夫	4
工学研究科	教 授	新 田 保 次	1	核物理研究センター	教 授	中 野 貴 志	3
工学研究科	教 授	茶 谷 直 人	1	サイバーメディアセンター	教 授	下 條 真 司	1
工学研究科	教 授	福 井 希 一	7	言語文化研究科	助教授	由 本 陽 子	1
工学研究科	教 授	南 埜 宜 俊	1	生命機能研究科	助 手	川 根 公 樹	3
工学研究科	教 授	藤 田 喜久雄	1,7,10	情報科学研究科	助 手	山 口 弘 純	1
工学研究科	教 授	兒 玉 了 祐	1,2,3	情報科学研究科	助 手	梅 津 高 朗	3,4
工学研究科	教 授	田 中 和 夫	1,2	極限科学研究センター	教 授	萩 原 政 幸	3,10
工学研究科	助教授	塚 本 勝 俊	1	太陽エネルギー化学研究センター	教 授	松 村 道 雄	1,6
工学研究科	助教授	辻 伸 泰	1	留学生センター	助教授	有 川 友 子	10
工学研究科	教 授	北 山 研 一	1	先端科学イノベーションセンター	助 手	前 田 将 克	3
工学研究科	助教授	小 西 毅	1	大学教育実践センター	教 授	山 成 数 明	8
工学研究科	助教授	飯 田 克 弘	1	ラジオアイソトープ総合センター	教 授	斎 藤 直	2
基礎工学研究科	教 授	鈴 木 義 茂	1,3	コミュニケーションデザイン・センター	教 授	小 林 傳 司	10

<受賞項目>

1. 教育・研究上の業績が認められ、特に権威のある学術上の表彰を受けた場合。
2. 教育・研究及びその成果が、社会に対し特に多大な貢献をしたとの評価を得た場合。
3. 専門誌等における掲載論文の評価が特に高いとされた場合。
4. 学術に関する会議等での発表が特に高い評価を受けた場合。
5. 職務発明が特に高い評価を受けた場合。

6. 評価の特に高い発見をした場合。
7. 教育・研究プロジェクト等においてその貢献が特に顕著であると評価された場合。
8. 教育・研究に関する事項を審議する委員会等においてその貢献が特に顕著であると評価された場合。
9. 特に危険な環境の下で困難な業務を遂行した場合。
10. その他、教育・研究活動の貢献が特に顕著であると評価された場合。

※所属名、職名は平成 18 年 1 月現在

山村 傑君「IEEE Electron Device Society Japan Chapter Student Award」受賞

大学院基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域博士前期課程16年度修了の山村 傑君が「IEEE Electron Device Society Japan Chapter Student Award」を受章しました。

この賞は2005年のIEEE Electron Device Societyの学会活動の中で電子デバイス技術への貢献が大きいと認められる日本国内の大学、大学院に所属する若い研究者に贈られるもので、例年5名程度が選ばれています。

受賞の対象となったのは、2005年6月13～16日の間、京都で開催された2005 Symposium on VLSI Technologyにおける山村 傑君の発表論文「Improvement in NBTI by Catalytic-CVD Silicon Nitride for hp-65nm Technology」で、同君の研究科在学中の成果をまとめたものです。内容は回路線幅65nm以降の最先端トランジスタの作製プロセスに、低温で低水素含有量のSiN膜を作製できる熱触媒化学気相堆積法を取り入れることにより、Negative Bias Temperature Instability (NBTI) と呼ばれるトランジスタ動作の信頼性劣化を抑制し、従来プロセスに比べ2桁以上の改善にあたる実用上の目標である寿命10年を十分達成できることを示したものです。NBTIは、多くの研究者が取り組んでいる次世代トランジスタの最大の困難であり、その克服に成功したことが高く評価されました。

表彰は、1月12日に開かれたIEEE EDS Japan Chapter 総会（機械振興会館 東京）の席上行われ、賞状と賞金が授与されました。



（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

審良静男教授「2005年度朝日賞」受賞

微生物病研究所の審良静男教授に2005年度「朝日賞」が授与されました。この賞は、朝日新聞文化財団が、人文や自然科学など、わが国のさまざまな分野において傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に多大な貢献をされた個人または団体に贈るものです。

今回の受賞は、審良教授が、自然免疫における病原体認識の研究で卓越した成果を上げたことが評価されたものです。

なお、贈呈式は1月27日(金)東京帝国ホテルで行われました。

（微生物病研究所）



右端が審良教授

兒玉了祐教授「日本学術振興会賞」受賞

大学院工学研究科電気電子情報工学専攻の兒玉了祐教授が、日本学術振興会から日本学術振興会賞を受賞しました。この賞は、人文・社会科学及び自然科学の全分野より、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を対象に与えられる賞です。平成17年度は、江崎玲於奈氏を選考委員長とする選考委員により443名の被推薦者の中から24名が選ばれました。その内訳は人文・社会科学系6名、理工系10名、生物系8名となっています。

今回の受賞題目は「プラズマフォトリックデバイスを利用した新しいレーザー核融合点火方式に関する研究」です。

なお、授賞式は3月9日(木)に日本学士院において秋篠宮殿下ご臨席のもと行われました。式典後、記念パーティーが開催され秋篠宮殿下とのご歓談の機会を与えられました。

(大学院工学研究科・工学部)



賞状



賞牌

芝 哲夫名誉教授「大阪文化賞」受賞

芝 哲夫名誉教授が2005年度の大阪文化賞を受賞されました。大阪文化賞は、大阪の文化の振興に多大に貢献した人の業績を讃えるため、大阪府、大阪市と両教育委員会が贈呈している賞です。芝先生は生物学・医学の重要な生命現象を有機化学の力で解明するという新しい研究領域を開拓され、世界をリードしてきました。中でも細菌複合糖質の免疫活性化作用に関する研究において、世界で初めて活性本体の化学的解明に成功し、我々のような高等生物は細菌に特有の分子構造を認識して、免疫系を活性化するという事を明らかにされました。この機構は現在では自然免疫と呼ばれ、免疫学研究の中でもホットな研究領域に発展しています。芝先生はその分子レベルの研究の礎を築かれました。昭和63年からは(財)蛋白質研究奨励会ペプチド研究所所長となられ、現在も生命科学に係る講演活動を行っておられます。また芝先生は日本の科学の黎明期の歴史について多くの調査研究を行われ、平成3年から化学史学会会長に就任されておられます。大阪大学の適塾記念会の理事を務められ、適塾建物の修復再建に貢献し、緒方洪庵とその門下生に関する業績の調査、研究、顕彰が続けられています。また明治初年オランダ人化学者ハラタマ博士によって大阪に開かれた舎密局の歴史の顕彰を行うなどの蘭学研究を進められ、日本とオランダの友好に尽くした功績により、オランダ王国よりオラニエ・ナッソウ勲章が授与されました。このように、生物有機化学研究、適塾研究、日蘭文化交流など数々のご業績が高く評価され、今回の受賞となりました。



生物有機化学研究、適塾研究、日蘭文化交流など数々

(大学院理学研究科・理学部)

江口順一名誉教授「第40回大阪市市民表彰」受賞

江口順一名誉教授が「第40回大阪市市民表彰」を受賞されました。この表彰は、公益の増進、産業の振興、学術、文化の向上発展などに貢献し、顕著な功績のあった方、又は市民の模範となるすぐれた善行のあった方を広く市民に顕彰することを目的としており、昭和41年から毎年1回実施し、今回で40回目となります。江口名誉教授は、多年にわたり、大阪市消費者保護審議会において、会長代理をはじめ各種部会の要職にあって、豊かな経験と卓越した識見により、多くの貴重な提言を行い、審議会の意見具申に尽力し、大阪市の消費者行政の進展に貢献したことが認められたものです。

なお、表彰式は、平成17年12月2日（金）に大阪市長公館にて行われました。

（大学院法学研究科・法学部）



又賀 昇名誉教授「日本学士院賞」受賞

又賀 昇名誉教授が平成18年度日本学士院賞を受賞することが決定しました。日本学士院賞は、学術上特にすぐれた論文、著書その他の研究業績に対して贈られるものです。

又賀名誉教授は、溶液中光励起分子の双極子モーメントと溶媒物性の関係を明らかにする又賀・Lippertの式を提案するとともに、溶液中光励起分子錯体の電子状態と幾何学構造は溶媒分子に依存して連続的に変わるという新概念を実証しました。これに基づき、分子間電子移動、陽子移動、エネルギー移動などの素過程の解明を進め、溶媒を摂動と考える従来の反応論を覆す溶液中光化学過程の基本的な概念を確立しました。今回の日本学士院賞受賞は、これらの業績が高く評価されたものです。

又賀名誉教授は、1964年から1991年まで基礎工学部合成化学科教授として、以上のような研究、また教育を精力的に展開され、多くの学生の育成にもあたられました。また1992年からは、財団法人レーザー技術総合研究所のチームリーダーとして生体分子系における光化学初期過程への研究を展開されておられます。又賀名誉教授の業績には、1986年に日本化学会賞、1994年 藤原賞、1995年 紫綬褒章、また1996年には光化学研究の最も権威あるPorter Medalが授与されています。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

新部局長紹介

天 野 文 雄 (あまの ふみお)

大学院文学研究科長・文学部長



【略歴】

- 昭44. 3 早稲田大学法学部卒業
- 50. 3 國學院大學文学部文学科卒業(昭47.4学士入学)
- 50. 4 國學院大學久我山高等学校専任講師(昭58.3まで)
- 52. 3 國學院大學大学院文学研究科博士課程前期日本文学専攻修了
- 55. 3 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期日本文学専攻単位修得退学
- 58. 4 上田女子短期大学専任講師
- 60.12 上田女子短期大学助教授
- 62.10 大阪大学助教授文学部
- 平 8. 1 大阪大学教授文学部
- 8. 3 博士(文学)(法政大学)
- 11. 4 大阪大学教授大学院文学研究科
- 14. 4 大阪大学評議員(平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学附属図書館副館長(平18.3まで)
- 16. 4 大阪大学教育・情報室員(平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学大学院文学研究科長・文学部長(平20.3まで)

金 崎 春 幸 (かなさき はるゆき)

大学院言語文化研究科長



【略歴】

- 昭51. 3 京都大学文学部文学科卒業
- 54. 3 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了
- 57. 3 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学
- 57. 4 大阪大学助手文学部
- 58. 4 大阪大学助手言語文化部
- 59. 1 大阪大学講師言語文化部
- 62. 7 大阪大学助教授言語文化部
- 平 9. 4 大阪大学教授言語文化部
- 16. 4 大阪大学言語文化部長(平17.3まで)
- 17. 4 大阪大学教育研究評議員(平18.3まで)
- 17. 4 大阪大学大学院言語文化研究科副研究科長(平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学大学院言語文化研究科長(平20.3まで)

近 藤 壽 人 (こんどう ひさと)

大学院生命機能研究科長



【略歴】

- 昭46. 3 京都大学理学部卒業
- 51. 7 京都大学大学院理学研究科博士課程修了
- 51. 7 理学博士(京都大学)
- 53.11 京都大学助手理学部
- 62.12 京都大学助教授理学部
- 63. 6 名古屋大学教授理学部
- 平 5. 4 大阪大学教授細胞生体工学センター
- 10. 4 大阪大学細胞生体工学センター長(平14.3まで)
- 10. 4 大阪大学評議員(平14.3まで)
- 14. 4 大阪大学教授大学院生命機能研究科
- 14. 4 大阪大学評議員(平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学研究推進室員(平18.3まで)
- 16. 4 大阪大学大学院生命機能研究科副研究科長(平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学大学院生命機能研究科長(平20.3まで)

新部局長紹介

松 川 正 毅 (まつかわ ただし)

大学院高等司法研究科長



【略歴】

- 昭51. 3 神戸大学法学部卒業
- 53. 3 神戸大学大学院法学研究科私法専攻博士課程前期課程修了
- 56. 3 神戸大学大学院法学研究科私法専攻博士後期課程単位修得
- 59. 2 神戸大学大学院法学研究科私法専攻博士後期課程修了
- 61. 3 トウルーズ社会科学大学第三課程ドクトラ修了
- 61. 4 三重大学講師人文学部
- 62. 4 三重大学助教授人文学部
- 平 4. 4 三重大学教授人文学部
- 8. 4 愛知学院大学法学部教授
- 11. 4 大阪大学教授大学院法学研究科
- 16. 4 大阪大学教授大学院高等司法研究科
- 18. 4 大阪大学大学院高等司法研究科長 (平20.3まで)

雫 石 聰 (しずくいし さとし)

歯学部附属病院長



【略歴】

- 昭46. 3 大阪大学歯学部歯学科卒業
- 46. 7 大阪大学助手歯学部
- 53. 8 大阪大学講師歯学部附属病院
- 56. 8 大阪大学助教授歯学部
- 平 4. 8 大阪大学教授歯学部
- 4. 8 大阪大学歯学部附属病院予防歯科長 (平13.3まで)
- 12. 4 大阪大学教授大学院歯学研究科
- 14. 3 大阪大学歯学部附属歯科技工士学校長 (平16.3まで)
- 18. 4 大阪大学歯学部附属病院長 (平20.3まで)

月 原 富 武 (つきはら とみたけ)

蛋白質研究所長



【略歴】

- 昭42. 3 大阪大学薬学部製薬化学科卒業
- 44. 3 大阪大学大学院理学研究科修士課程(高分子学専攻)修了
- 45.12 大阪大学大学院理学研究科博士課程(高分子学専攻)退学
- 46. 1 鳥取大学助手工学部
- 48. 2 鳥取大学講師工学部
- 49. 3 理学博士の学位授与(大阪大学)
- 53. 4 鳥取大学助教授工学部
- 平 3. 4 徳島大学教授工学部
- 7. 4 大阪大学教授たんぱく質研究所
- 10. 4 大阪大学たんぱく質研究所附属生体分子解析研究センター長 (平14.3まで)
- 14. 4 大阪大学たんぱく質研究所附属プロテオミクス総合研究センター長 (平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学蛋白質研究所附属プロテオミクス総合研究センター長 (平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学蛋白質研究所長 (平20.3まで)

新部長紹介

畑 澤 順 (はたざわ じゅん)

ラジオアイソトープ総合センター長



【略歴】

- 昭54. 3 東北大学医学部卒業
- 58. 3 東北大学大学院医学研究科博士課程修了
- 58. 3 医学博士 (東北大学)
- 58. 4 東北大学抗酸菌病研究所(放射線医学研究部門)研究生 (昭61.12まで)
- 62. 1 東北大学助手サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター
- 平 3. 5 秋田県立脳血管研究センター研究局放射線医学研究部主任研究員
- 13. 5 秋田県立脳血管研究センター研究局放射線医学研究部長
- 14. 6 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 18. 4 大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長 (平20.3まで)

甲 斐 泰 (かい やすし)

環境安全研究管理センター長



【略歴】

- 昭42. 3 大阪大学工学部応用化学科卒業
- 44. 3 大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻修士課程修了
- 45. 3 大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程退学
- 45. 4 大阪大学助手工学部
- 48. 8 工学博士 (大阪大学)
- 60.12 大阪大学助教授工学部
- 平 5. 5 大阪大学教授工学部
- 10. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 18. 4 大阪大学環境安全研究管理センター長 (平19.3まで)

古 城 紀 雄 (ふるしろ のりお)

留学生センター長



【略歴】

- 昭42. 3 富山大学工学部金属工学科卒業
- 44. 3 大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻修士課程修了
- 44. 4 大阪大学助手工学部
- 63. 6 大阪大学講師工学部
- 平 3. 6 大阪大学助教授工学部
- 6. 6 大阪大学教授留学生センター
- 13. 4 大阪大学留学生センター副センター長 (平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学留学生センター長 (平20.3まで)

新部局長紹介

北 岡 良 雄 (きたおか よしお)

極限量子科学研究センター長



【略歴】

- 昭44. 3 大阪市立大学理学部物理学科卒業
- 51. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻修士課程修了
- 51. 3 東京大学物性研究所教務職員
- 56. 1 理学博士（東京大学）
- 57. 7 神戸大学助手理学部
- 60. 8 大阪大学助手基礎工学部
- 平 2. 4 大阪大学助教授基礎工学部
- 9. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科
- 10. 4 大阪大学基礎工学部物性物理工学科長（平11.3まで）
- 15. 5 大阪大学極限科学研究センター長（平18.3まで）
- 18. 4 大阪大学極限量子科学研究センター長（平20.3まで）

大 垣 一 成 (おおがき かずなり)

太陽エネルギー化学研究センター長



【略歴】

- 昭46. 3 大阪大学基礎工学部化学工学科卒業
- 48. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻修士課程修了
- 51. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻博士課程修了
- 51. 3 工学博士（大阪大学）
- 51. 4 大阪大学助手基礎工学部
- 平 7. 6 大阪大学助教授基礎工学部
- 9. 4 大阪大学助教授大学院基礎工学研究科
- 11.11 大阪大学教授大学院基礎工学研究科
- 18. 4 大阪大学太陽エネルギー化学研究センター長（平20.3まで）

守 山 敏 樹 (もりやま としき)

保健センター長



【略歴】

- 昭58. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 62. 3 医学博士（大阪大学）
- 62. 4 大阪大学医学部（内科学第一） 研究生
- 62.11 米国国立衛生研究所客員研究員
- 平 3. 3 大阪大学医学部（内科学第一） 研究生
- 6. 2 大阪大学医学部附属病院医員
- 8. 1 大阪大学助手健康体育部
- 9. 7 大阪大学講師健康体育部
- 15. 5 大阪大学助教授健康体育部
- 16. 4 大阪大学教授健康体育部
- 17. 4 大阪大学教授保健センター
- 17. 4 大阪大学保健センター副センター長
- 18. 4 大阪大学保健センター長（平20.3まで）

新部長紹介

本 多 佑 三 (ほんだ ゆうそう)

金融・保険教育研究センター長



【略歴】

- 昭46. 3 早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業
- 55. 3 Princeton University (U.S.A.) Ph.D.コース卒業
- 55. 4 兵庫県立神戸商科大学勤務
- 55. 6 Ph.D. in Economics (Princeton University) 取得
- 62. 4 神戸大学助教授経営学部
- 平元.12 神戸大学教授経営学部
- 8. 4 大阪大学教授経済学部
- 10. 4 大阪大学教授大学院経済学研究科
- 12. 4 大阪大学評議員 (平15.3まで)
- 17. 4 大阪大学研究推進室員
- 18. 4 大阪大学金融・保険教育研究センター長 (平20.3まで)

新施設長紹介

青 江 秀 史 (あおえ ひでふみ)

大学院法学研究科附属法政実務連携センター長



【略歴】

- 昭54. 4 富士通株式会社入社
- 平 3.12 富士通株式会社渉外本部第一企画部プロジェクト課課長
- 4.12 富士通株式会社ブリュッセル駐在員事務所所長
- 10. 4 富士通株式会社広報室室長
- 13.10 富士通株式会社経営戦略室主席部長
- 14.10 富士通株式会社CS経営推進室室長
- 16. 4 大阪大学教授大学院高等司法研究科
- 18. 4 大阪大学大学院法学研究科附属法政実務連携センター長 (平20.3まで)

前 田 芳 信 (まえだ よしのぶ)

歯学部附属歯科技工士学校長



【略歴】

- 昭52. 3 大阪大学歯学部卒業
- 56. 3 大阪大学大学院歯学研究科修了
- 56. 4 大阪大学助手歯学部
- 59. 8 大阪大学講師歯学部附属病院
- 61.12 文部省在外研究員 Visiting Assistant Professor (The University of British Columbia, Canada) (昭63.11まで)
- 平 4.12 大阪大学助教授歯学部
- 9. 2 文部省在外研究員 (University of Geneva, Switzerland)
- 9. 7 大阪大学教授歯学部附属病院
- 18. 3 大阪大学歯学部附属歯科技工士学校長 (平20.3まで)

新施設長紹介

菅 沼 克 昭 (すがぬま かつあき)

産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長



【略歴】

- 昭52. 3 東北大学工学部卒業
- 54. 3 東北大学工学系大学院博士前期課程修了
- 57. 3 東北大学工学系大学院博士後期課程修了
- 57. 3 工学博士 (東北大学)
- 57. 4 大阪大学助手産業科学研究所
- 62. 5 防衛大学校助教授
- 平 8. 4 大阪大学教授産業科学研究所
- 18. 4 大阪大学産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長 (平20.3まで)

新教授紹介

吉 森 保 (よしもり たもつ)

微生物病研究所



【略歴】

- 昭56. 3 大阪大学理学部生物学科卒業
- 58. 3 大阪大学大学院医学研究科修士課程修了
- 61. 3 大阪大学大学院医学研究科博士課程退学
- 61. 4 関西医科大学助手
- 平 8. 7 岡崎国立共同研究機構助教授基礎生物研究所
- 14. 3 国立遺伝学研究所教授
- 18. 2 大阪大学教授微生物病研究所

所 属：微生物病研究所環境応答研究部門細胞
制御分野
専門分野：細胞生物学

戸 田 保 幸 (とだ やすゆき)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭54. 3 大阪大学工学部造船学科卒業
- 56. 3 大阪大学大学院工学研究科造船学専攻博士前期課程修了
- 59. 3 大阪大学大学院工学研究科造船学専攻博士後期課程修了
- 59. 3 工学博士 (大阪大学)
- 59. 4 大阪大学助手工学部
- 63. 4 アイオワ大学研究員水理学研究所 (平2.3まで)
- 平 4. 4 神戸商船大学助教授商船学部
- 10.10 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 18. 2 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科地球総合工学専攻船
舶工学講座
専門分野：船舶海洋流体力学、船舶抵抗推進学、
水中移動体力学、海洋数値モデル

新教授紹介

近 藤 勝 義 (こんどう かつよし)

接合科学研究所



【略歴】

- 昭61. 3 大阪大学工学部溶接工学科卒業
- 63. 3 大阪大学大学院工学研究科博士課程（前期）溶接工学専攻修了
- 63. 4 住友電気工業株式会社入社
- 平10. 5 博士（工学）（大阪大学）
- 13. 4 東京大学先端科学技術研究センター・客員助教授
- 14. 4 東京大学先端科学技術研究センター・特任助教授
- 18. 3 大阪大学教授接合科学研究所
（東京大学先端科学技術研究センター・特任教授兼任）

所 属：接合科学研究所接合機構研究部門複合
化機構学分野

専門分野：金属材料、粉末冶金、塑性加工

荒 木 浩 (あらき ひろし)

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭57. 3 京都大学文学部文学科卒業
- 59. 3 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻修士課程修了
- 61. 9 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻博士後期課程退学
- 61.10 愛知県立女子短期大学講師兼愛知県立大学講師
- 平 2. 4 愛知県立女子短期大学助教授兼愛知県立大学助教授
- 4. 4 大阪大学助教授教養部
- 6. 4 大阪大学助教授文学部
- 11. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 18. 4 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化表現論専攻
国文学・東洋文学講座

専門分野：日本文学

賀 川 隆 行 (かがわ たかゆき)

大学院経済学研究科



【略歴】

- 昭45. 3 一橋大学社会学部卒業
- 47. 3 一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 48. 4 財団法人三井文庫研究員
- 50. 3 一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位修得退学
- 58. 5 博士（社会学）（一橋大学）
- 平 7.10 財団法人三井文庫主任研究員
- 18. 4 大阪大学教授大学院経済学研究科

所 属：大学院経済学研究科経済学専攻歴史分
析講座

専門分野：日本近世経済史

新教授紹介

水谷 泰久 (みずたに やすひさ)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭62. 3 京都大学工学部卒業
- 平元. 3 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
- 4. 3 総合研究大学院大学数物科学研究科博士後期課程修了
- 4. 3 博士(理学)(総合研究大学院大学)
- 4. 4 日本学術振興会特別研究員
- 6. 1 岡崎国立共同研究機構助手分子科学研究所
- 13. 6 神戸大学助教授分子フォトサイエンス研究センター
- 18. 4 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科化学専攻物理化学講座

専門分野：タンパク質の物理化学、振動分光学

阪井 丘芳 (さかい たかよし)

大学院歯学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 徳島大学歯学部卒業
- 3. 4 大阪大学歯学部研究生(口腔外科学第一教室)
- 3. 7 大阪大学歯学部附属病院研修医(第一口腔外科)
- 6. 6 大阪大学歯学部附属病院医員(第一口腔外科)
- 6.10 大阪警察病院医員(歯科口腔外科)
- 8. 6 大阪大学歯学部附属病院医員(第一口腔外科)
- 12. 4 米国国立衛生研究所(NIH)客員博士研究員
- 13. 3 日本学術振興会海外特別研究員(NIH)
- 15. 4 大阪大学歯学部附属病院医員(第一口腔外科)
- 16. 4 大阪大学講師歯学部附属病院(口腔病態系科口腔外科制御系)
- 18. 4 NIH, NIDCR(頭蓋顎顔面発生再生部門)客員教授
- 18. 4 大阪大学教授大学院歯学研究科(高次脳口腔機能学講座)

所 属：大学院歯学研究科高次脳口腔機能学講座

専門分野：顎口腔器官形成・再生・機能回復に関する研究

我田 広之 (わがた ひろゆき)

大学院言語文化研究科



【略歴】

- 昭55. 3 東京大学教養学部教養学科卒業
- 58. 3 東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専門課程修士課程修了
- 58. 4 図書館情報大学助手図書館情報学部
- 60. 3 図書館情報大学助手外国語教育センター
- 63. 4 図書館情報大学講師外国語教育センター
- 平 5. 4 大阪大学講師言語文化部
- 7. 4 大阪大学助教授言語文化部
- 13. 4 大阪大学助教授大学院言語文化研究科
- 18. 4 大阪大学教授大学院言語文化研究科

所 属：大学院言語文化研究科言語文化国際関係論講座

専門分野：ドイツ思想史、比較言語文化論

新教授紹介

伊 勢 芳 夫 (いせ よしお)

大学院言語文化研究科



【略歴】

- 昭60. 3 京都府立大学文学部文学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程英文学専攻修了
- 平 2. 3 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程英文学専攻単位
修得退学
- 2. 4 園田学園女子大学常勤講師
- 5. 4 大阪大学講師言語文化部
- 8. 4 大阪大学助教授言語文化部
- 17. 4 大阪大学助教授大学院言語文化研究科
- 18. 4 大阪大学教授大学院言語文化研究科

所 属：大学院言語文化研究科現代超域文化論
講座

専門分野：英文学、植民地文学研究、ポストコロ
ニアル文学研究

高 倉 伸 幸 (たかくら のぶゆき)

微生物病研究所



【略歴】

- 昭63. 3 三重大学医学部卒業
- 63. 6 三重大学医学部附属病院医員（研修医）
- 平元. 7 松坂市民病院非常勤
- 3. 4 三重大学医学部附属病院医員
- 6. 3 熊本大学大学院医学研究科博士課程退学
- 9. 3 京都大学大学院医学研究科博士課程修了
- 9. 4 熊本大学助手医学部附属遺伝発生医学研究施設
- 11.10 熊本大学講師医学部附属遺伝発生医学研究施設
- 12. 4 熊本大学講師発生医学研究センター器官形成部門
- 12.10 熊本大学助教授発生医学研究センター器官形成部門
- 13. 4 金沢大学教授がん研究所
- 18. 4 大阪大学教授微生物病研究所

所 属：微生物病研究所環境応答研究部門情報
伝達分野

専門分野：血管生物学、幹細胞医学

杉 江 正 敏 (すぎえ まさとし)

大学教育実践センター



【略歴】

- 昭44. 3 東京教育大学体育学部体育学科卒業
- 46. 3 東京教育大学大学院体育学研究科修士課程修了
- 46. 4 東京教育大学体育学部教務補佐員
- 50. 4 大阪大学助手教養部
- 53.10 大阪大学講師教養部
- 55. 7 大阪大学助教授教養部
- 56. 4 大阪大学助教授健康体育部
- 平17. 4 大阪大学助教授大学教育実践センター
- 18. 4 大阪大学教授大学教育実践センター

所 属：大学教育実践センター教育実践研究部
運動健康支援部門

専門分野：スポーツ文化論、武道論

東風西風

ドイツ・アーヘン工大との交流

名誉教授 木村 博



アーヘン工科大学（ドイツ連邦共和国）（RWTH Aachen University、<http://www-zhv.rwth-aachen.de/zentral/english-index.htm>）と大阪大学が、アーヘン工大 Burkhard Rauhut 学長の来学のもとで、宮原秀夫総長による調印式を行った。その際、阪大側では橋本日出男理事、辻 毅一郎総長補佐が出席し、アーヘン工大側では、ドイツ領事館のエルケ・ティート副領事（Ms. Elke Tiet）が陪席されている。

この際、筆者とアーヘン工大との交流の歴史の一端を紹介し、両大学間学術協定のバックアップの強化の一助になれば幸甚である。

戦後、高分子材料の加工に注力した産業がたい頭しており、精密機械、カメラ、繊維など注目されていた。アーヘン工大の GEORGE MENGES 教授はアーヘン工大に産学協同研究の拠点である研究所の創設を発議され、アーヘン工大プラスチック加工技術研究所（IKV）（所長；PROF.DR. GEORGE MENGES）の設立となった。

一方、国際溶接学会（IIW）では先進 35ヶ国で鉄鋼の溶接を中心とした組織を完成しており、さらなる発展をめざして 1960 年頃、非金属の分野でもテリトリーを拡大する事を決めて第 16 委員会（プラスチックの溶接・接着）を発足している。同時に、ドイツのアーヘン工大 IKV は、GEORGE MENGES 教授が先頭に立って第 16 委員会の組織作りをされており、IKV のプラスチック溶接研究室を強化され、PROF.DR. H.POTENTE を研究室長とし、DIPL・ING・HANS KAUFMANN を副室長として、集中して研究を開始している。著者も我が国のプラスチックの溶接の第一人者（1966 年に“プラスチックの溶接”で、初めて溶接学会論文賞を授与されている）として、アーヘン工大にまけじと集中的に研究発表している。（IIW について毎年 4～5 件の発表）。また、1966 年には日刊工業新聞より“プラスチック溶接”の単行本も出版している。

アーヘン工科大学・IKV と阪大・大西 巖研究室とは良きコンペッターとして、学术交流を行っており、当時、さかんに交流しており、筆者はアーヘン工大を訪問している。PROF.DR. H.POTENTE や DIPL・ING・HANS KAUFMANN 先生を阪大・歯学部になねいて、公開講演会を開催したこともあった。

また、大阪ガス・導管技術センターで“最新のプラスチックの溶接”について講演会を主催している。一方、両先生の希望もあって、国際交流という事で



調印後、協定書を取り交わす Burkhard Rauhut 学長と宮原総長

も有効である事を願って、京都の西陣織会館など京都と奈良の旧蹟を案内している。

当時、IIW・第16委員会・事務局（プラスチックの溶接）はアーヘン工大・IKVにあり、JIW・第16委員会・事務局は阪大の筆者が世話をしていた。JIW・第16委員会では、プラスチックの溶接の実用化の促進をはかるべく作業者の技術検定のJISを創設すべく通産省にはかっている。それでJIS・Z3831が創設され、全国に100回以上の検定を実施している。これには、溶接学会、溶接協会、プラスチック加工技術協会の支援を得ている。

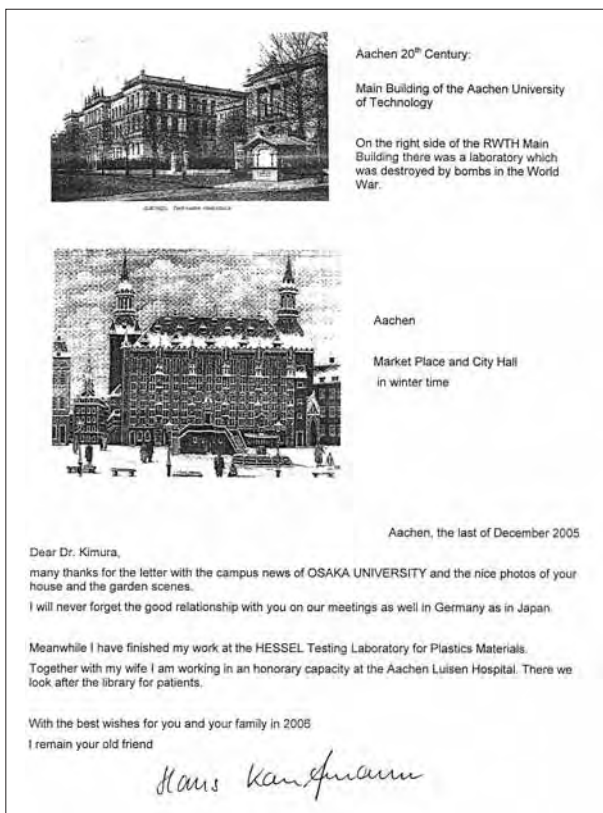
この技術検定をIIW・第16委員会に報告し、アーヘンの第16委員会で実施してもらうべく提案している。

この点でも、アーヘン工大と阪大とは盛んに学术交流が行われている。

今度、阪大Now No.85（2005・10）で、アーヘン工大と阪大との間で、学术交流協定が出来たとの報に接したので、そのコピーをアーヘンの方に通知したところ、早速、HANS KAUFMANN先生より文書がとどいたので以前の相互交流の話をし、相互交流の強化をはかり度いと考えている。4～5年前にアーヘン工大よりプラスチックの加工に関して阪大留学の申出があったが筆者は定年退官しており、対応することが出来なかった事を今でも残念に思っている。又、H. KAUFMANN先生より4～5年前に共同研究の申し出があったが、対応出来ていない。



阪大・木村博が引率して、アーヘン工大・プラスチック加工技術研究所の訪問（IKV）[右から3人目が筆者]



HANS KAUFMANN 先生からの文書

最後に、ドイツ・アーヘン工大までの旅程について概略説明する。関西空港よりルフトハンザ・ドイツ航空にて、ドイツ・フランクフルト国際空港まで約12時間、ドイツ国内線でケルン・ボン空港まで約1時間で来る。空港より、西方約80km、ドイツの西端のベルギー国境近くにある。空港よりアーヘン大学まで、車で約1時間で到着する。



アーヘン工科大学・本館の正面

最上平太郎名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授最上平太郎先生は、去る平成18年1月15日、脳梗塞などのため宝塚市の病院で逝去されました。享年79歳。

先生は昭和24年大阪大学医学部を卒業、岩永仁雄教授(当時)が主催される第2外科学教室に入局され、昭和40年には米国マサチューセッツ・ジェネラル・ホスピタルにご留学、ご帰国後は陣内傳之助教授(当時)のもとで脳神経外科グループを率いられました。

昭和47年、大阪大学に脳神経外科学講座が開設されるとともに初代教授にご就任され、脳神経外科学の教育、研究、診療に文字通り全身全霊を注がれ、関連施設の充実と

ともに今日の神経外科学教室の基礎を築かれました。先生のご専門は脳腫瘍、とくに悪性腫瘍やその髄膜播種に対する化学療法であり、血液脳関門という特殊性を考慮した優れたご研究をなされて班会議を主宰され、また昭和58年には日本脳神経外科学会会長として大阪で総会を開催されました。

学内においては大阪大学医学部附属病院長、大阪大学評議員として大阪大学の発展にご尽力され、平成2年に大阪大学を定年退官された後も労働福祉事業団関西労災病院長、錦秀会阪和第一泉北病院長を歴任されました。以上のご功績に対し、平成14年、勲二等瑞宝章を授与されております。

先生は絵画をたしなまれ、軽快なスケッチや重厚な油絵など多数の見事な作品を残されております。また、学生時代にはアーチェリーやスキー、スケートなど多くのスポーツをたしなまれたとのことでした。

先生のご指導は学問にとどまらず医学、医療への携わり方全般に及ぶものでありました。毎日、朝と夕欠かさず入院中の患者さんを回診され、何時間に及ぶ手術にあっても疲れをみせず、丁寧に手術されました。

片時も患者さんのことを忘れず、何事にも誠実で、争わず、しかも屈せず、ひたすら脳神経外科の進歩のために尽くされた最上平太郎先生のお姿を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

奥 雅博名誉教授(人間科学研究科)逝去



本学名誉教授奥 雅博先生は、平成18年1月17日虚血性心疾患のため逝去されました。享年64歳でした。

先生は、昭和40年3月に東京大学教養学部を卒業、昭和44年3月東京大学大学院人文科学研究科博士課程を退

学後、同年4月東京大学文学部助手に採用され、昭和45年4月新潟大学人文学部講師に昇任、昭和48年4月大阪大学人間科学部助教授に昇任されました。その後、平成元年1月同教授に昇任され、平成6年4月から2年間大阪大学評議員、平成12年5月から2年間大学院人間科学研究科長の職務を全うされました。そして、法人化に際して平成16年4月から1年間大阪大学人事労務室員として大阪大学の運営に貢献され、平成17年3月に定年退職されました。また、先生は、ウィトゲンシュタイン研究を中心とした分析哲学・科学哲学の立場からの研究において顕著な業績をあげられるとともに、科学基礎論学会の理事、評議員、編集委員、日本科学哲学会の理事、評議員、機関紙編集委員長を歴任するなど、学会活動において多大な貢献をされました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

平成18年度いちよう祭開催

いちよう祭は、本学の創立記念日である5月1日を祝し、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦を図ることを目的に毎年開催されます。

今年も、高校生、保護者の方々をはじめ学外の方にも本学の教育・研究の内容を知っていただくため、以下の日程により開催します。

教職員・学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

日 程：4月30日（日）・5月1日（月）

- ・大学主催の各種行事（学内施設開放、展示会、映画会、講演会など）
- ・学生団体による協賛行事（スポーツ大会、園遊会など）
- ・模擬店

※詳細は、本学ホームページ（<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/press/newtopics.html>）に掲載しています。



問い合わせ先：総務部総務課総務係 TEL：06－6879－7014

（総務部総務課）

大阪大学室内楽アンサンブル第2回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル（OUCE）は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。半年の練習会活動を経て、平成17年11月2日に、第1回演奏会を吹田祭関連イベントとしてMOホールで開催し、200名を超える皆様のご来聴をいただきました。今回はいちよう祭関連イベントとして、第2回演奏会を開催いたしますので、皆様お誘い合わせの上ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。詳しくはOUCEのホームページ（<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>）をご覧ください。

〈問い合わせ先〉 kai@chem.eng.osaka-u.ac.jp

日 時：平成18年4月30日（日） 開場 13：30、開演 14：00

場 所：大阪大学コンベンションセンター MOホール

入場無料

演奏曲目：モーツァルト 弦楽四重奏曲 第17番変ロ長調 KV459 「狩」

プーランク フルートとピアノのためのソナタ

ブラームス クラリネット五重奏曲 口短調 Op.115

サン・サーンス

デンマークとロシアの旋律による奇想曲 Op.79

ドップラー 2本のフルートとピアノのためのハンガリーの主題による小二重奏曲 Op.36

モーツァルト 弦楽合奏 「アイネ クライネ ナハトムジーク」



（OUCE）

「第1回 大阪大学ホームカミングデイ開催」のご案内

毎年新入生及びそのご家族等の歓迎の意味を込めて開催されている「大阪大学いちょう祭」の日に合わせ、本年4月30日（日）に「第1回 大阪大学ホームカミングデイ」を開催します。

「ホームカミングデイ」は、卒業生や教職員OBが年に1度キャンパスに集い、同窓生や恩師・先輩・後輩・在学生等と旧交を温めていただくことを目的に開催するもので、この機会に、進化し続ける「今」の大阪大学を実際に見ていただき、阪大ファミリーとして、「これから」の阪大に一層の関心を持っていただける日にしたいと思います。

どうぞお友達、ご家族お誘い合せのうえ、お気軽にお越しください。

主催 大阪大学
協賛 大阪大学同窓会連合会

開催日 平成18年4月30日（日）

場 所 大阪大学豊中キャンパス

【記念式典】 14:00～14:30

○会場 共通教育本館（イ号館）・イ講堂

- | | | |
|---------------------|----------|---------|
| 1. 主催者代表挨拶及び阪大の近況報告 | 大阪大学総長 | 宮 原 秀 夫 |
| 2. 同窓会連合会代表者挨拶 | 同窓会連合会会長 | 熊 谷 信 昭 |

【記念レセプション】 14:45～16:00

○会場 学生交流棟1階「宙（sora）」（会費不要です。）

※記念式典及び記念レセプションの参加登録については、先着順（250名）とさせていただきます。

（下記ホームページから登録できます。）

※駐車場に限りがございますので、車でのご来場はご遠慮願います。お越しの際は公共の交通機関をご利用願います。

〈問い合わせ先〉

大阪大学同窓会連合会事務局 TEL 06-6877-5111（代表）内線3149

ホームページ <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

（総務部企画推進課）

人権問題に関する映画会開催

人権問題に対する理解と学習を深めるため、下記のとおり映画会を開催しますので、教職員、学生の皆様の積極的な参加をお待ちしています。

なお、本年はいちょう祭行事の一環として開催します。

近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

日 時：平成18年5月1日（月）

上映時間 第1回目 10時00分～12時15分（①～④）

第2回目 13時30分～15時45分（①～④）

会 場：基礎工学部国際棟 シグマホール

上映映画：①「こころの交響楽」（アニメ 43分）

②「ぬくもりの彩」（36分）

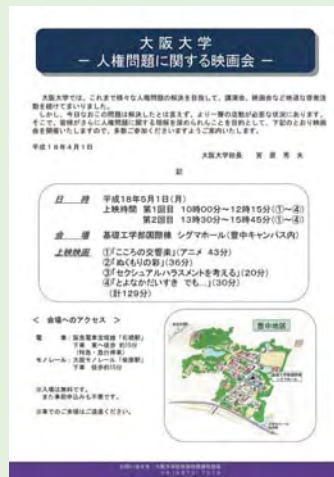
③「セクシュアルハラスメントを考える」（20分）

④「とよなかだいすき でも…。」（30分）

（計129分）

問い合わせ先：総務部総務課総務係 TEL：06-6879-7014

（総務部総務課）



「素粒子を拓く―湯川秀樹・朝永振一郎 生誕百年記念―」
展示会を東京で開催中

1949年に日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士と、1965年にノーベル賞を受賞した朝永振一郎博士の生誕百年を記念して、物理学の研究と日本の科学の発展につくされた両博士の業績をひろく知っていただくために、国立科学博物館、京都大学、筑波大学、大阪大学の主催で、「素粒子を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎 生誕百年記念」展示会を開催しています。

開催期間：平成18年3月26日（日）～5月7日（日）

開催場所：国立科学博物館〔東京・上野公園〕

開館時間：午前9時～午後5時 金曜日は午後8時まで
（入館は閉館時間の30分前まで）

休館日：毎週月曜日（但し、5月1日は開館）

入館料：一般・大学生：500円（団体300円）、小・中・高校生：無料
（団体は20名以上）

※招待券が総務課総務係にあります。

主催：国立科学博物館、京都大学、筑波大学、大阪大学

※国立科学博物館ホームページ <http://www.kahaku.go.jp/>



展示会に先立ち、3月25日(土)に国立科学博物館において、開会式が開催されました。

開会式では、主催者の佐々木正峰国立科学博物館長、尾池和夫京都大学総長、岩崎洋一筑波大学学長、宮原秀夫大阪大学総長並びに文部科学省からは結城章夫事務次官が出席され、挨拶とテープカットが行われました。

宮原総長は、挨拶の中で「大阪大学は、湯川先生に自由で闊達な研究環境を提供し、この環境の中で先生がすばらしい中間子論のアイデア論に到達し、発展させたことを誇りに思います」と述べられました。



挨拶を述べる宮原総長



テープカットを行う主催者代表

（総務部総務課）

公開講演会“宇宙への挑戦”

日 時：平成18年4月29日（土）10：00－12：00

場 所：大阪大学コンベンションセンターMO ホール（吹田キャンパス）

参加費：無料

プログラム：10：00～10：05 開会のあいさつ 宮原秀夫総長

10：05～10：25 “小さい衛星で大阪を元気に!!”

JAXA 宇宙実証研究共同センター長 橋本英一 氏

10：25～10：45 “宇宙環境利用への新たな挑戦とその実現に向けて”

三菱重工業（株）神戸造船所 落合俊昌 氏

10：45～11：45 “宇宙への挑戦” JAXA 宇宙飛行士 向井千秋 氏

11：45～12：00 質疑応答

12：00 閉会

JAXA によるスペースシャトル及び H-IIA ロケットの模型や本物の船外活動用宇宙服、三菱重工・神戸による生物衛星へのマウス搭載装置などの展示も計画しています。早めにおいでいただき、講演会の前に「宇宙」にお近づきください。

主 催：大阪大学、大阪大学医学部・大学院医学系研究科

後 援：宇宙航空研究開発機構（JAXA）、大阪大学臨床医工学融合研究教育センター、大阪府、大阪市

問合せ先：〒563-0043 大阪府豊中市待兼山町1-17 大阪大学健康体育研究棟内 公開講演会事務局

電話：06-6850-6018・6032 FAX：06-6850-6032 E-mail: ohira@space.hss.osaka-u.ac.jp

（大学院医学系研究科・医学部）



平成18年度 懐徳堂春季講座 [第111回]

【総合テーマ】「旅立ち」のかたち—文学の世界へ—

人は様々な想いを「旅立ち」という言葉に読み込んできました。例えば、「冒険」を読み込んで胸躍らせる人、「感傷」に浸って寂寥の気持を抱く人、「再出発」を決意し心を新たに人、等々。「旅立ち」のかたちもまた様々でしょう。現代版「巡礼」とでも言える海外渡航ブームに沸く現代、「旅立ち」文化の諸相を学ぶことで、受講生の皆様にとっての「旅立ち」を考え直すきっかけにしたい、そのような気持ちを込めて、平成18年度の懐徳堂春秋講座は企画されました。文学や芸術に表現された「旅立ち」のかたちを、日本最高峰の研究者である先生方に語っていただきます。春季講座ではまず、文学の先生方に、南太平洋へ、オリエントへ、欧州へと旅立ってもらいます。原田先生にはイギリスのクック船長が18世紀に行った南太平洋周航記について、小澤先生には17世紀のイギリス詩人ジョン・ダンを元に大航海時代の魂の旅立ちについて、出原先生には島崎藤村、森鴎外らの小説に描かれた欧州への旅立ちについて講演していただきます。最先端の研究を踏まえながら、現代日本に住む私たちにとっての「旅立ち」を考えさせてくださる分かりやすいお話です。三日間に渡り、時間空間を縦横無尽に超えたスケールの大きな講演を聴くことで、共に想像力の旅に出かけようではありませんか。

5月16日（火）午後6：30～8：00 原田範行（杏林大学教授）

未知なる海洋への旅立ち—ヨーロッパ18世紀、世界周航の時代—

5月17日（水）午後6：30～8：00 小澤 博（関西学院大学教授）

大航海時代と魂の旅立ち—死と復活と地図の詩学—

5月18日（木）午後6：30～8：00 出原隆俊（大阪大学大学院教授）

欧州へ『舞姫』から『新生』まで—

場 所／大阪大学中之島センター 参加費／500円（会員無料）

申込み／受講希望日・住所・氏名・電話番号をハガキ・FAX・メール・ホームページのいずれかでご連絡下さい。

締 切／5月9日（火）先着150名（会員優先）

連絡先／（財）懐徳堂記念会事務局

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内 TEL 06-6843-4830（直通） FAX 06-6843-4850

E-mail: kaitokudo@let.osaka-u.ac.jp URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitokudo/ （懐徳堂記念会）



本学社研がトップ!：経済・社会科学系附置研究所の研究業績比較

理系の学問分野と同じように、経済学をはじめとする社会科学でもレフェリー付きの国際学術誌にどの程度論文を発表したかが、研究成果を評価する上で一つの重要な目安になります。とくに著名な国際学術誌への掲載には厳しい審査があるため、そのような学術誌への論文掲載数は、論文引用数とならんで、質を重視した研究評価方法として国際的にもスタンダードになっています。今回、本学の社会経済研究所と他大学の経済・社会科学系研究所（京都大学経済研究所、神戸大学経済経営研究所、一橋大学経済研究所、東京大学社会科学研究所）の研究を、著名国際学術誌に掲載された論文数をもとに比較しました。

ヨーロッパ経済学会（EEA）は、ヨーロッパ内外の大学の経済学研究の水準を比較するシンポジウムを2003年に開催しました。そこで発表された経済学学術誌のランキング（“Rankings of Academic Journals and Institutions in Economics”, Kalaitzidakis, et al.）を参考にして、ランキングの100位以内に入っている学術誌を中心とした「Top 100」、50位以内の学術誌を中心とした「Top 50」という2通りを分析しました。

2006年2月現在で各研究所のHPに載っている専任講師以上の研究者を対象に、これらのリストの学術誌への一人あたり論文掲載数を計算。図1は最近5年間（2001－2005）の一人あたりの論文掲載数の比較です。トップ100のリストでも、トップ50のリストでも、本学社会経済研究所が1位です。

一般に（国内外を問わず）社会科学系研究者の著名国際学術誌掲載論文数は理科系に比べて少ないので、サンプルを多くするために、過去10年間（1996－2005）と過去20年間（1986－2005）で計算。この順位は変わりませんでした。（図2と図3）また、政治学、社会学、法学、経済学などの社会科学系の著名国際学術誌への掲載を加算しても、数値はほとんど変わりませんでした。

図1 2001-2005 の一人あたり論文掲載数

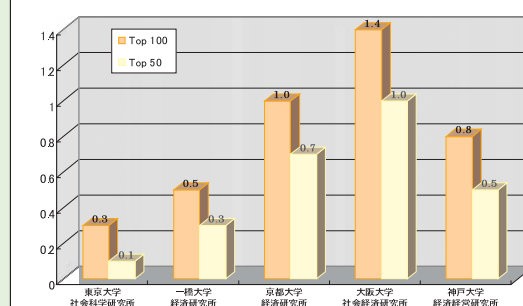


図2 1996-2005 の一人あたり論文掲載数

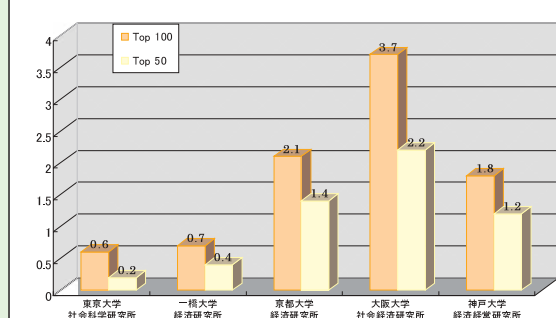
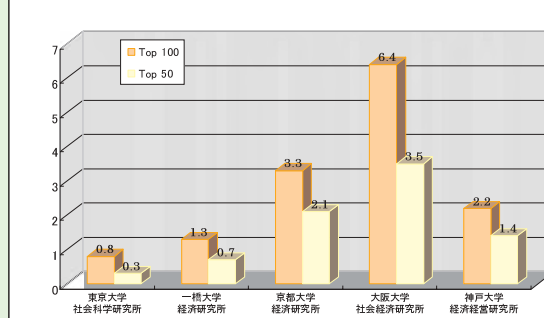


図3 1986-2005 の一人あたり論文掲載数



（社会経済研究所）

2006年4月に組織・スタッフが増強され、大阪大学出版会が大きく変わろうとしています。会長に就任したばかりの鷲田清一理事・副学長に出版会の役割とこれからを聞きました。

大阪大学出版会が変わる—新体制で取り組む課題は—

大阪大学出版会会長

鷲 田 清 一

■社会貢献の柱として

—出版会の陣容が大きく変わりました。

研究・教育だけでなく社会への貢献も大学の重要な仕事です。阪大の場合、その最たるものは附属病院でしょう。しかし体の健康だけでなく心の健やかさも人には必要です。教養やうまいおいのある豊かな生活を送るうえで役に立つ社会貢献もある。それが大学の文化事業です。

ただ、その発信機能が日本の大学は遅れています。市民講座はあるけれど、展覧会やコンサートなどは海外の大学にくらべて十分ではありません。音楽ホールやミュージアムやライブラリーがあって当然だと思います。

そうした文化事業の重要な柱として出版会による出版事業を位置づけていますが、これまでは小規模にしかできていませんでした。編集・営業・経理と何から何まで少人数のスタッフでやっていた。このたび、大阪大学後援会のお力添えで、陣容をうんと拡大することになりました。編集のプロに来ていただいたほか、営業や経理もそれぞれ専念できるようスタッフを増員し、出版社としての体制をまがりなりにも組織することができました。

■4つのミッション

—出版会の役割は？

一般の出版社とは性格が違います。大学出版会にしかできないことをやります。営業的にはうまくいくはずのない学術書の出版もそのひとつです。基礎的な研究は、長い目で見れば人類のより幸福な社会を実現するためにやっているわけで、世界に向けて発信していく責任があります。

他方、科学や学問の最先端で何がおこっているのか市民にわかりやすく伝える使命もあります。大学創立70周年を記念して出版した「大阪大学新世紀セミナー」シリーズはそのひとつです。非常に好評で経営正常化に貢献してくれました。

3つめのミッションは、教科書のスタンダードをつくることです。特定の先生が使うものではなく、日本の高等教育で教科書のスタンダードとなるようなものをつくりたい。

4つめは新人発掘です。学内にはいろんな才能を持つ研究者がいます。特に若手研究者に本を書いてもらい、社会に送り出していきたいと考えています。阪大内部だけでなく、全国の若手が阪大出版会からデビューしたいと思うようになればいい。そのためには、社会から評価を



受けるような本をいっぱい作っていかねばなりません。

—他の大学出版会と比べると？

名大出版会は毎年いくつも賞を取り、アカデミックな出版会として評価がすごく高くなっています。法政大は、現代思想・現代文化論・現代科学論の翻訳書で突出しています。東大はライターを集める力があるし、京大はヨーロッパ・アジアの古典を着実に出している。性格がはっきりしています。

阪大はまだ出版会としてのキャリアは短いけれども、夢はあります。はっきりした個性を持ち、阪大でしかできないような出版事業をやりたい。明確なポリシーを持つ品のある出版事業をやってきたい。



大阪大学新世紀セミナーシリーズ（全30巻）

■セルフラーニングとスローカルチャー

— 方向性は？

阪大の源流である懐徳堂と適塾は、江戸時代にできた市民の学問所。おかみがつくる官学ではなく、自分たちが勉強するために市民がお金を出してつくりました。今で言うセルフラーニングですね。自分を高めるため徳をつけるために市民が勉強する伝統がかつてはあったわけです。

なぜ学校を造ったのか。天下の台所として各藩の役人や文化人が集結していた大阪で商売しようとすれば、商人にも文化的素養が欠かせません。当時の先端知識だった漢学や蘭学を学ぶ必要もありました。昭和になって帝国大学として発足したときも、民の力に助けられました。

まさにそんなセルフラーニングを支えるために出版活動があります。自ら出版物を買い、「ああでもない、こうでもない」と考える。そんな独習のためのメディアが本です。突出した文化的素養を持つ関西でセルフラーニングの志をもういちど実現するサポートができればうれしい。

— 読む側からすると？

食べ物でも住まいでもスローライフが言われるけれど、読書はスローカルチャーの典型でしょう。10ページ読んでまともどって。分かるまで何回も読む。イエスカノーか反射的に応えるのではなく、自分のなかでじっくり発酵・熟成させていくメディアが本。ああでもないこうでもないで発酵させるにはぜったい本ですよ。

そんな本のカルチャーが危機的状況にあります。飛びつくのはハウツーものかメガベストセラー。みんな、手取り早い本ばかり読んでいる。著者も使い捨てになっている。スローカルチャーの典型であるはずの出版が消費の論理の中で正反対の動きを強いられている。

せめて大学出版会だけでも、本来のスローカルチャーにもどしたい。金儲けはへたでも王道を行きましょうというわけです。

■大学と出版会の連携で

— 本の値段は高い？

逆です。発行部数が少ないですが文科省をはじめとする種々の出版助成に応募しているから、経費を抑えられます。2,000円程度の本もたくさんありますよ。

助成金によって甘やかされている面はたしかにあります。しかしこれは大学のミッションでしょ。赤字覚悟でやっている病院と同じように文化事業も社会貢献としてやらなければ。

— 大学と出版会の連携は？

出版会のなかに出版企画部をつくりました。教員で組織するこのセクションでシステマティックにきっちり出版計画を立てていきます。それを下支えするのが、プロの編集



大阪大学新世紀レクチャーシリーズ

スタッフも加えた編集会議。先生方には、企画を積極的に持ち込んでもらう。プロには、具体的な提案をしてもらう。両者が一体になって企画を練ります。

いっぽう大学の側では、教育・情報室に教養書企画ワーキンググループを新設しました。おもだった部局から本好きの先生に入っていただき教養書・教科書の企画を考えていただきます。

こうした仕組みを通じて出版会と大学が積極的に連携します。阪大のなかでどんなおもしろい学問・研究が動き出しているのか。企画や執筆者について提案を待っています。

〈出版企画部から〉

大阪大学出版会から刊行する教科書・教養書の企画案をお寄せください。



岩谷美也子編集長（右端）をはじめとする出版会メンバー

大阪大学出版会

(財)大阪大学後援会・出版事業部として1993年に設立。約150点の書籍をこれまでに刊行。最先端を分かりやすく解説する「大阪大学新世紀セミナー」シリーズやスタンダードな教科書のラインナップ「大阪大学新世紀レクチャー」シリーズのほか、新シリーズ「大阪大学総合学術博物館蔵書」がスタートした。これまで3名だったスタッフは3年かけて拡充する。新体制は編集4名・経理1名・営業1名・総括1名。

大阪大学出版会 TEL 06-6877-1614 (直通)
http://www.osaka-up.or.jp

キャンパスの国際化をになう人材育成のために

－職員の海外研修報告会－

国際交流推進本部・国際企画室特任助教授 石 川 真由美

昨年12月に国際交流推進本部が「大阪大学における国際交流戦略」を定め、大阪大学が「世界に開かれた魅力ある大学」となるための基本戦略が明らかにされました。そのなかで、広い視野とコミュニケーション能力をそなえた人材育成やキャンパスの国際化の重要性が大きくなっています。本学が多くの国の研究者・学生の集う魅力あふれた大学になることで、はじめて研究・教育の一層の発展と国際社会への貢献が可能となるという考えが、国際交流戦略の根幹を成しているからです。そのために、足もとの国際化は避けておれない課題といえるでしょう。

教職員を海外に派遣し、語学の取得や人的ネットワーク構築の機会を与えることにより国際性を高めることは、今後の本学の国際化をになう人材を育成することと考えられています。すでに本学では、教育研究の国際化・高度化・活性化の支援を図るため、事務職員を海外拠点や交流協定校に派遣する、教育研究支援事業が毎年実施されてきました。この事業を利用して、多くの事務職員が海外で研修を受け、海外で培った経験を国際交流・学生交流の業務に生かすとともに、各担当部局において本学の国際化に大きな貢献をしています。



熱心に報告に聞き入る出席者



報告会の様子

このたび、平成17年度の研修生の中から、短期研修参加者として蛋白質研究所の一木朋子職員、業務・調査研修で大阪大学の海外拠点であるグローニンゲン教育研究センター、サンフランシスコ教育研究センターに勤務している地石雅彦職員（研究推進・国際部国際交流課）、辻 敏彦職員（同）より、現地での体験・海外事情等を報告していただく会を、3月9日木曜日にICホール2階講義室において開催しました。

この報告会には、年度末の朝9時開始という条件にもかかわらず、様々な部局から30数名の教職員が参加し、海外研修・国際交流業務に対する関心の高さをうかがい知ることができました。はじめと最後に挨拶をされた国際交流推進部長の橋本日出男理事は、ご自身の海外体験をふまえて参加者を激励し、ともにキャンパスの国際化を推進する強い意欲を示されました。以下は三氏それぞれの報告要旨です。教員・事務職員という枠をこえた柔軟な発想と創造的かつ建設的な行動により、ともにキャンパスの国際化を推進すべく、国際企画室は今後もこのような機会を設けたいと考えています。

派遣機関等

氏 名	機 関 名	国 名	期 間
一木 朋子	マンチェスター大学	イギリス	H17. 9. 15～17. 12. 19
辻 敏彦	サンフランシスコ教育研究センター	アメリカ	H17. 6. 13～
地石 雅彦	グローニンゲン教育研究センター	オランダ	H17. 4. 16～

■ 短期語学研修を受講して

蛋白質研究所庶務係 一 木 朋 子

報告会では、短期語学研修受講生として、3ヶ月間イギリス・マンチェスター大学附属の語学センターにて学んだ経験をお話しました。阪大NOWの2月号の海外レポートと内容が重複する点もあるかと思いますが、その点はご容赦願います。

はじめに

数年前と比べて日々の仕事のなかで語学力が必要とされる場面が増加していると感じ、この研修の受講を思い立ちました。研修先であるマンチェスター大学については学生・職員数の面から大阪大学と比較紹介しました。(表1)

表1 学生数等の比較

	マンチェスター大学	大阪大学
学部学生	25,683	12,224
大学院修士課程	6,045	4,253
大学院博士課程	3,290	3,410
教職員数	10,407	4,465
留学生数	7,400	1,029

毎日の様子

語学研修中の生活については、語学学校の時間割(表2)を見ながら、それぞれの授業及び放課後の学習方法について、またLanguage Centreでヘッドフォン付きのPCを活用したWeb自習や、グレイテッドリーダー(学習者用に新旧の名作をレベル別書き直したもの)を利用した放課後の自習についてお話しました。どの授業でも重視されたのは、積極的に「話す」ことでした。

表2 1週間の時間割

月	火	水	木	金
Class A	Class A	Class A	Class B	Test
Class A	Class A	Class A	Class B	Tutorial
Reading	Writing	Reading	Writing	

研修に行って良かったこと

第一に語学力の向上です。正直いってまだ発展途上にあると思います。しかし、出発前は非常にレベルの低いところからスタートしたことを考えると、自分では格段の進歩を遂げたと思います。



マンチェスター大学本部

何より、つたない英語であっても開き直って自分なりにコミュニケーションをする度胸が身に付いたことが一番大きいです。

語学力と同じくらい大きな収穫は、様々な国や年代の方と知り合うことができ、異文化に触れる経験ができたことです。日々、生活するなかでも、自分が今まで常識と信じて疑わなかったことが、実は当然のことではなかったという驚きや発見が多くありました。

それから、授業でマンチェスター大学と大阪大学の比較をテーマとしたプレゼンテーションの準備をしているときに、両大学の要覧などの資料やホームページなどを読んだのですが、大阪大学のこともまだまだ知らないことがたくさんあることを実感しました。

研修を終えて

3ヶ月間の研修後は同一部署に戻り、同じ仕事をしています。ただ日常の業務のなかで以前はできなかった応対やメール対応ができたときに研修の成果を感じました。

この記事を読まれている方の中にも当研修に興味をお持ちの方がいらっしゃると思います。3ヶ月の研修は短いですが得られるものはいっぱい多くありますので、現在の語学力が不安であるなどためらうことなく、積極的に参加されることをおすすめしたいです。

■ サンフランシスコ教育研究センター

研究推進・国際部国際交流課海外拠点支援係 辻 敏彦

はじめに

高校生の頃サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」につかまり、大学は英文科に進み、勤め始めてからも漠然と海外に行きたいという思いがありました。幸いにも平成11年には、大阪大学教育研究支援推進事業により英国のダラム大学にて語学研修並びにインターンシップを実施させていただき、平成17年6月からは、サンフランシスコ教育研究センターにて勤務しています。

サンフランシスコと大阪

1849年のゴールドラッシュ以降、西海岸の金融の中心地として、太平洋からの船による移民の玄関口として栄える当地は、古くから日本人が多く居住し、ジャパントウンは今年100周年を迎えます。大阪とも繋がりが深く、大阪市とサンフランシスコ市は姉妹都市、大阪府とカリフォルニア州は姉妹州です（ベイブリッジを挟んだパークリー市は堺市と）。でも案外、大阪という名前は知られていません。大阪府、大阪市とも機関の枠を超えて連携のうえ、まずは大阪という名前の知名度の向上や、ブランド化を図りたいと日々活動しています。将来的には、例えば彩都がシリコンバレーのように有名になればと思います。



アルカトラズ島とコイトタワー

それに対し、サンフランシスコという名前は有名なのでサンフランシスコ州立大学の訪問時には、留学生を獲得するのに好条件だと聞きました。海外だけでなく、アメリカ人にとってもサンフランシスコは魅力的な都市であり、13年連続で国内旅行で行きたい都市に選ばれています。観光客が非常に多いのと、西のウォールストリートと呼ばれる金融街の、バブルを彷彿とさせる活況もあり、物価は非常に高く、例えばサンフランシスコの戸建て住宅の平均価格は75万ドル（約9千万円）もします。



オフィスの3人（左から辻、Tim、室岡）

海外拠点で働く資質

サンフランシスコで仕事をしていると、忍耐力が必要な時があります。例えば夏の間は長いホリディに行く人が多く仕事が進みにくいですし、ハロウィンから感謝祭、クリスマスに至るまで、街中はずっとホリディ気分です。観光客も年中います。その中で、時差も文化も違う日本側が求める、かちっとした事務をしようとする、うまくいかないことが少なくありません。精神的な強さと、良い意味でのあきらめの良さやいい加減さが必要だと感じます。また、英語が話せることは大事ではなくて、英語で何を話せるかが大事だとも感じます。訪問者も多いですし、各種会議や会合で人と会い、大学の代表として話すことが非常に多く、日本や大阪大学の現状、交渉すべき点を知ってないといけませんし、人と会うのも好きでなくてははいけません。また、海外旅行傷害保険では、歯の治療は出来ないのも、海外勤務は歯も命です（ここまで理想を書きましたが、私はいい加減というところだけは、兼ね備えています）。

サンフランシスコ教育センターが、北米での大阪大学の知名度やプロフィール向上に役立つとともに、日本の高校生にも良く知られ、サンフランシスコ教育研究センターがあるから大阪大学を選んだと言われるような、ブランド力の向上に資すればいいと願いながら、サンドウィッチを頼む時は、いつもライ麦パンを選んで頑張っています。

■ 海外拠点に勤務して

研究推進・国際部国際交流課海外拠点支援係 地 石 雅 彦

はじめに

報告会話を聞いた際、拠点での勤務内容ではなく、海外拠点勤務に至るまでの経緯を示す方が、短期海外研修や海外拠点勤務を希望する側にとっては、より具体的な参加の可能性が見出せるのではないかと考え、拠点での勤務内容については、日々の業務内容を報告し、イメージを抱いていただけるような形で説明することとしました。

最初の海外研修と帰国後の活動

本学での勤務を決定した主たる要因が国際交流に関する業務に従事することであったことから、海外研修等には勤務当初から漠然とした興味を持っており、2001年9月から1年間イギリスでの海外研修の機会に恵まれ、語学及び実務研修を通じて、日本では得ることの出来ない貴重な体験をさせていただきました。

帰国後は海外研修前には全く従事したことなかった留学生課（現学生交流推進課）に配属されました。仕事に対しては、海外での経験を可能な限り反映させることを目指し、留学生の立場となり、わかりやすい書類の作成など、利用する側の視点で仕事に携わることを第一とし職務を遂行した結果、若干ではありますがこれまでより改善された点も見受けられたと考えております。

一方ではこれまでの知識・経験不足を再認識させられ、海外派遣の可能性について再検討を行い、種々の制度を調べた中で、拠点における仕事を通じた海外研修制度に身を投じ、今後の国際交流・留学生担当職員としての経験を深めることが最善と考え、2005年4月からオランダへ渡航することを決断しました。

オランダでは

渡航以後、オランダでは多岐にわたる業務に携わっています。

□ 日常業務に関連する事項

労働・滞在許可取得手続き、事務所の契約書関係、銀行口座開設、物品購入等

□ 現地事務所としての機能

2005年10月に実施された事務所開所式及びシンポジウムの運営・打ち合わせ、交換留学相談等



お世話になっているグローニンゲン大学の方々と（右端：地石）

□ 本学の国際戦略に関係する事項

オランダやヨーロッパ内の各関係機関の訪問調査等

日本とは異なる慣習には戸惑いつつ、外国で企画運営に携わることや現地の情報（高等教育に関して）を入手できることは大変貴重な経験です。

語学研修、海外拠点勤務とは

現実逃避、語学の上達や海外に行くことだけを目的とはせず、常に目標を抱き参加すべきであり、海外拠点に関しても、一般的に必要なとされる能力（事務に関する知識、阪大に関する一般的な情報、語学力）だけではなく、様々な知識や異文化適応力を積極的に吸収する意欲や職務を通じての自己研鑽といった向上心がなければ難しく、定型的な仕事にしか興味がないのであればおそらく向いていないかもしれません。

日本ではできないことを積極的に行うだけでなく、5-10年後を見据えたキャリアパスのイメージを持ち、法人化後の国立大学で極めて重要と認識されている職員の能力開発を行うつもりで参加していただきたいと思います。

プロフィール

いしかわ・まゆみ	平成15年8月人間科学研究科講師採用。平成17年10月から現職。
いちき・ともこ	平成11年4月総務部人事課採用。平成13年9月から現職。
つじ・としひこ	平成7年10月歯学部総務課採用。平成17年6月から現職。
ちせき・まさひこ	平成9年4月総務部人事課採用。平成17年4月から現職。

漕艇部 (ボート部)

みんなで一つになって、楽しくも真剣に打ち込めるスポーツ、それがボートです。

数ある団体競技の中でも、ボートほど選手の心が一つになる競技はありません。ボートは最大8人まで同じ艇に乗りますが、その8人全員の動き、呼吸、力のかけ具合が合わなければ決して速く進みません。どんなにパワーがあっても、バラバラに漕いでいては意味が無いのです。そのためボート部に必要なものは何より“団結力”であり、今までの運動経験や体格、運動神経のようなモノは全く問われません。どれだけボートが好きになり、ボート部のみんなと一緒に意識を一つにやっていけるかが重要なのです。現に今の主将は高校の時何も部活をやっていませんでしたが、大学からボートを頑張って今では関西ボート界屈指のタイムを誇っています。

ボート部の歴史は古く、もう1世紀以上続いています。そのため、後援会や組織力が強く、充実したバックアップの下で練習が可能です。多くの艇を所有し、淀川や大川などの練習環境にも恵まれ、選手の栄養管理、プロのトレーナーによるウェイトトレーニングの改善、ビデオミーティング等、様々な取り組みをしています。これらは全て“艇



をより速く進める“という一点に部員全員が妥協を許さず取り組んでいる結果です。おおらかな部長と強い意志を持った監督の下、各コーチ陣が厳しくもきちんと選手を指導し、マネージャーがそれを支え、選手がそれらに応えて強くなっていく、そんなしっかりした体制も我がボート部の自慢です。

大学から始める事が出来て、みんなで一つになって、楽しくも真剣に打ち込めるスポーツ、それがボートです。絶対に後悔しない4年間を過ごせる秘密がここにあります。

主将 田中 資人 (基電4)

〈コメント〉

何か新しいことを始めたい。充実した大学生活を送りたい。

そんな思いを抱く人はぜひボート部へ。



練習場所；豊中キャンパス

練習日時；火・金 16:30～(陸トレ@豊中)

木・土 午後から(試乗会@淀川)

部員数；男20人 女10人

連絡先；手塚 友 (dc2-2.3@ezweb.ne.jp)

清原小由理 (sayu.k48.rzu@docomo.ne.jp)

ボート部 URL；<http://www1.odn.ne.jp/cbc83360/>



編集後記

「力をつける努力をし、その力を優しさに変えられた時に初めて人間としての真の力が発揮できる。」卒業式の記念講話において、榎原美樹さんから贈られた言葉です。平和な世の中に生まれ育った我々にとって、世界の紛争、政争の最前線で取材されている方の言葉は胸に響くものがあります。キャンパスの玄関口としてリニューアルされた通称「阪大坂」を駆け上がる新入生、その力強い姿には未来が感じられます。その力強さを満開の桜並木が優しく見守っています。

4月から新たに広報係に着任しました。「大阪大学をもっと知りたい」と自ら思えるような広報活動を展開していきたいとします。

(野瀬)

スカイレストラン

阪大病院の14階にあるリーガロイヤルホテル直営の展望レストラン。

万博公園の北側に位置し手前に森林が広がり岡本太郎作の太陽の塔が近くに見えます。遠くは梅田方面、大阪城方面の高いビルが見える。

定番メニューは、スカイランチ（日替わり）、今夜のスペシャル（週替わり）。他にパスタ、ピラフやアラカルトメニューも豊富。万博公園や大阪市内を眺めながらゆったりとしたスペースで食事ができる。

「気軽に来店いただき、リーズナブルで美味しいものを提供することを心がけています」という4代目店長の沢谷光司さん。各種パーティーの相談にも応じてもらえる。

営業時間：10時～20時30分

定休日：土曜・日曜・祝日・年末年始

問い合わせ先：06-6879-5058

ホームページ

<http://park21.wakwak.com/~restaurant/>



工学研究科に長～いウッドベンチが!

工学研究科 GSE コモンイースト（高層棟）南側のオープンスペースに長い木製ベンチがある。ベンチは荷物が置ける幅の広いもので、雨が降っても表面に水滴が残りにくく、座面は若干の勾配がついている。特に夜には、ベンチの足下をブルーの淡い光が照らし、ベンチが周りの風景から浮き立ち、幻想的な空間が生まれている。

ベンチに腰掛け見上げると、眼前にそびえ立つ GSE コモンイーストから「大阪大学」の風格が実感できる。

春風で、疲れた頭を癒す憩いの空間でもある。



交流協定大学紹介

アーヘン工科大学(ドイツ連邦共和国)

RWTH AACHEN UNIVERSITY



アーヘン工科大学本部

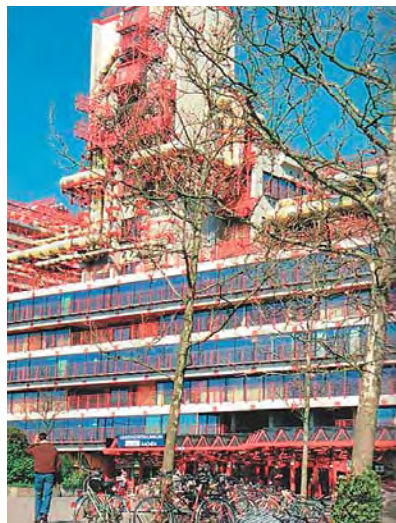


アーヘン工科大学は、1870年に Polytechnical School として設立され、現在 260 の学科 (Chairs and Departments) を擁し、400 名の正教授、29,667 名の学生、1,787 名のアカデミックスタッフ、2,197 名の事務職員、651 名の訓練生の人的規模であり、24 大学院を擁しているドイツ最大の工科大学です。国際化への取り組みは、地理的理由 (オランダ、ベルギーに近い) もあって、大変熱心であり、現在 4,927 名の国外からの留学生を受け入れています。

その半数がヨーロッパ諸国であり、アジア諸国 (中国、韓国、トルコ、インド、インドネシアなど) で、約 1/4 を占めています。

工科大学という名称から、理工系の大学という印象を持ちやすいのですが、医学部・歯学部とそれぞれの付属病院をもっています。特に、付属病院のデザインはモダンなデザインとして大変有名です。さらに、人文系の大学院 (ドイツ言語学、歴史、比較文学、教育科学、哲学、心理学、ロマンス言語学、社会学、プロテスタント宗教学、カソリック宗教学など) を擁する総合大学です。

アーヘン工科大学とは、長年にわたり活発な交流が行われてきたことを受けて、2005 年に大学間交流協定を締結し、教員及び学生間の積極的な交流が行われています。また、今年 5 月には、交流促進を目指して、第 1 回の共同シンポジウムが、アーヘン工科大学で開催されます。



モダンなデザインで知られる付属病院
(パンフレットから引用)

所在地 : Landoltweg 1 D-52056 Aachen

Germany

<http://www-zhv.rwth-aachen.de/zentral>

阪大 NOW No.89 2006 4月号

2006年4月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1

TEL : 06 (6879) 7017 FAX : 06 (6879) 7166

ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。

E-mail : souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp